

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS 天駆ける翼

アカルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 天駆ける翼

### 【Nコード】

N6481U

### 【作者名】

アカルト

### 【あらすじ】

空の王の遺伝子を持つ青年、半年後に起きる管理局システムの崩壊、一年半後に起きる管理世界の崩壊、彼は機動六課で何を感じ、何を守るのか。

リリカルなのはの二次創作です。

オリ主&オリキャラ多数出てきて、JS事件終了後にはオリジナルストーリーが入ってくるので「それでもOK」な人に読んでいただ

けるとうれしいです。  
基本シリーズです。

## 第零話

## プロローグ

リリカルなのはの2次創作です。  
オリキャラ&オリ主などが出てきます。  
初投稿&初作品などで変な表現などがあるかもしれませんが最後まで頑張ります( )

## プロローグ

ドン！

耳を塞ぎたくような大きな爆発音が遠くでする…

黒髪の男が目の前にある丸い大量の男>何か<に向かって叫ぶ

「ブレイズキャノン！」

男が持っている杖のような物から青い光が放たれ球体になり…目の前にある大量の>何か<に向かって発射される  
砲撃は男の目の前にある丸い何かを粉碎するが…数が多い…

「ああもう！役割が逆じゃないか！」

そう言いながらも男は目の前のものをなぎ払う

( どうだ〜クロノ 楽しんでる〜 )

( 何がだ！これは基本 君の役目だろう！ )

そう言っつてクロノと呼ばれた男は念話の相手に怒りをぶつける

( わるいわるい、もう少してデータのコピー終わるから )

( まったく )

そう言いクロノは足元に青い魔方陣をつくる。

( 雑魚はついでだから片付けておく… )

( わりいな )

一度だけ深いため息をつくると足元の青い魔方陣が強く輝きはじめ

「ステインガールブレイド・エキスキューションシフト？」

そう叫ぶと青い短剣が大量に出現し目の前のものに当たり爆発した…

「お疲れ〜」

いつの間にか現れた小さな男が陽気な声でクロノに話しかける  
男だとは分かるが身長は160前半だろう

「まったく本当に君は言う事を聞かないな」

「あんまりストレス溜めると…ハゲるぞ…」

「誰のせいだ」

「さあ？」

そう言っつて首を傾げる。

「それで、どうだった？」

真剣な表情になったクロノが少年？に聞く、さっきまでとはあきらかに表情が違う

「たいした情報は無かったな、しいて言うなら予言どおり」

「それでも大きな収穫だ、確信になったのなら半年後の予言のほうにそなえられる」

「…奴らは一年半位動かない、得た情報はこれだけ…か」

少年は安心したような声をもらす

「君は約束どおり六課のほうに行ってもらっぞ」

がっ、クロノがそう言つと少年は苦い顔をする

「デスクワークできないぞ…俺」

「妹に手をだしたら凍らせるからな」

「シスコン」

「なっ！」

クロノがこの後エターナルコファンを発動させたのはいつまでもない

## 主人公設定（前書き）

ダメダメだけど謎だらけの主人公です



## 主人公設定

名前	ケント・スカイ
魔導師ランク	- S ?
魔力量	AAAランク相当 ?
魔力光	白と黒の混色（白の中に黒が混ざってる感じ）
階級	二等空尉 ?
術式	ミッド主体ベルカ混合
出身	ミッドチルダ北西部？
年齢	19歳
身長	164cm
体重	51kg
希少能力1	閃光（限界の反射神経・超速移動）
希少能力2	？
好きなもの（事）	甘い物 読書 空を眺める
etc	

嫌いな物（事）

心霊系全般

デスクワーク

e t c

黒髪に青い目をした青年、顔は整っており背が高いと「かつこいい」なのだろうが残念ながら低いため「かわいい」と認識される事がしばしばある。

基本明るく誰からでも好かれる性格だが自分が本当に信頼している人間にしかほとんど信用しなかったりという部分がある。仲間や友達を失うことを非常に恐れておりときどき・Sとは思えないほどの力を見せ

る。過去の話しになると辛そうなそぶりを見せなにかあったのかと思われる。デバイスはシーザー

デバイス

シーザー

待機状態

逆三角の白いペンダント

刀状のインテリジェントデバイス、声は女性でよくケントをからかう、だが彼とは絶対的な信頼関係に結ばれており力を発揮する。シヤリーのメンテを拒否し本局にいる「ある人」にしかたのまない普通とは変わったデバイス

## 主人公設定（後書き）

？だらけですみません（ペこり）

物語が進むにつれて更新する予定なのでよろしくお願いします。

## 第1話

## 問題児（前書き）

今回はちゃんと主人公の名前だします

すっかり忘れてました（がくっ）

けっこう謎が多い主人公ですが頑張ります！

## 第1話

## 問題児

「グオー」

「クマだよな」

<クマですね>

はいクマがいます…なんか2メートルくらいのヤツが身長164しかない俺を見上げるようにして、  
なんでミッドチルダに？

<あつ、マスター、道間違えました(笑)さっきの道右ですね。ちなみにここは自然保護区だったりしちゃいます。>

「あゝそういうわけ、だったらクマがいるのもなっとk…ってオイ  
！」

<なんでしょうかマスター？>

「さっきの曲がり角ってだいぶ前だぞ！てかあと1時間で顔合わせの時間じゃん一日目から遅刻なんてシャレになんねーぞ！」

<マスターは苦勞人ですね>

「おまえのせいだな！」

そのあと命からがら逃げました、死亡原因がクマに襲われ死亡で新聞載りたくないからなあ

機動六課

「…遅い」

「まあまあ、はやてちゃんおちついて」

「そつだよはやて 向こうも何か理由があるんだろうし…」

ショートカットの茶髪女性を同じく茶髪のロングヘアーの女性と金髪のロングヘアーの女性とでなだめる

「それでもや、部隊全員の顔合わせからもう3時間や、クロノくんからの推薦で、Sランクがあるーゆーてひきぬいてきたゆづのに…副隊長としての自覚あるんやろーか？」

「あははは」

さつきからはやてはグダグダだ…  
まあ3時間もいすに座っていたら当然か…

「しかも連絡もせんと、なあ…せつかくフェイトちゃんの部下やのに」

そついつて金髪の女性を見るその時に

ぷんぷんぷん

「入ってええよ〜」

はやてがそう言ったあと一人の男が入ってきた…新品なはずの制服をボロボロにして…

「機動六課ライトニング部隊副隊長ケント・スカイと相棒シーザー遅れました…」

<ごめんね〜>

いまにも倒れそうな青年と楽しそうな声でしゃべるデバイスがそこにいた

## 第1話

## 問題児（後書き）

短いですが、すみません（ぺこり）

主人公の名前はケント・スカイです

いろいろ苦勞人ですがよろしくお願いします



## 第2話

### 隊長達（前書き）

小説って書いてみると大変ですね  
テスト勉強ほったらかして書いてる自分がいます。

## 第2話

## 隊長達

クマから逃げてきたケントです…はい。

さっきのクマって時速50キロで走るんですね〜

いや〜驚きました（、、）ノなんかとどこどこるかまれ  
たけど気にしたら負け…うんそうしよう

>汗くさ！<

てかデバイスに鼻ってあんのか？謎だ

なんかバカデバイスがなんか言ってるけど無視無視

それよりも目の前の扉が問題だ…

なんか黒いオーラがだだ漏れしてるんだけど…あと殺気…

「ここが部隊長室で間違いないんだよな…」

入りたくね〜！グダグダオーラ大量生産中じゃん！俺のせいかな、俺  
のせいなのか！だが

「くっ、ここで入らなければ男がすたる」

俺は死を覚悟し扉をノックした

はやてside

いろいろツツコミたい事があるけど今はがまんや、うんがまんや

「初めましてやな、私が機動六課部隊長の八神はやてや、クロノ提  
督推薦のケント・スカイ二等空尉であつとるやおか？」

「あつ、はい、問題ないです」

おお！挨拶は悪くない、服ボロボロやけど

「高町なのは一等空尉です！スターズの隊長で違う部隊だけよろしくね、ケント君。」

「はっ！フェイトTハラオウンです。同じライトニングの隊長だけど執務官の仕事で留守にする事が多くて迷惑かけちゃうかもしれないけど1年間よろしくね。」

「こちらこそよろしくお願いします、なのは隊長、フェイト隊長！」

あとから紹介した金髪少女が赤くなつとたんは後でからかうとしてとりあえず簡単な自己紹介は終わった事やし本題やな、

「じゃあなんで遅れたか聞かせてもらうか？もちろんちゃんとした理由あんねやおな〜」

とびきりの笑顔で言うたつた。

さあ、あんたを待ったつたこの3時間の恨み、はらさせていたただこか

side out

やっぱり聞いてくるよな。

俺は心の中で深い深いため息をし2つの選択を選ぶ事にする

その1・素直に話す

その2・仕事に関する用事を自作する

その2を考えれば被害は少なくしむ…だが！

「えっと、クマに襲われました…」

ああ…みなさんの目線が痛い、うん、だって本当なんだもん。あとで変な罪悪感残したくないもん、時速50キロで走るクマに襲われたんだもん、ミッドチルダにも熊いるんだもん

「あゝそれは災難やったなゝそれやったらしようがない…てっ、そんなわけないやおボケゝ副隊長が初日から遅刻とはどういう意味や！」

ああ部隊長怖いです…後ろに狸顔の修羅が見えるのは俺だけですか？あとデバイス持つのやめて) - ; (

「あはははははは」

「大丈夫や、軽いお説教だけやから」

おそらく軽いの価値観はお互い違うのではないでしょうか

(残念ね、マスター)

このバカデバイスは明日解体しよう、そうしよう

結局その日ははやてさん(本人がそう言えと)に正座で2時間怒られた…マジあしイテエ

side フェイト

どうしたらいいんだろう…

廊下にケントが倒れてる…なんか「足が痺れる」とかいつてるからはやてかな、原因は…

ほっとくわけにはいかないし…どうしよ…

「えっと、だいじょうぶ？」

かがんで声をかけてみる、

>ごめんね〜ダメマスターで〜<

デバイス？えつと確か名前はシーザーだったけ…

「何がダメマスターだダメデバイス！」

だいじょうぶそうかな？

「すみませんフェイト隊長、足が痺れてるだけなんで少ししたら治ります」

「フェイトさんでいいよ同じ分隊なんだしね」

「はい、わかりました。」

笑顔でそう返してくる…なんか…やっぱり可愛い…いちよう同い年なのに

「よいつしよ」

そう言ってケントは立ち上がる…復活早いな…

「部屋の荷物整理やら仕事やらあるので戻らしてもらいます。明日から訓練入りますんで。」

そっか、私がないシグナムと同じ副隊長なんだよねこんなに小さいのに

「そこらへんはなのはに聞いてもらえればいいよ。指導頑張ってるね。」

「

「わかりました」

うん、いい返事そう言ってケントは男性遼に行ってしまう  
さて、私も仕事しない」

「フェイトちゃんにも春がきたな」

「はやて！そつ、そんなことないよ、ちょっと可愛いと思っただけで、」

「図星やな」でもあともう一步で恋愛に変わるところやな」よし、  
私がフェイトちゃんが本格的な春に目覚めるように強力したる」ま  
ずはなのはちゃんに報告や」なぜバリアジャケットを付けていらっ  
しゃるのですかフェイトさん」

「バルディツシュ…トライデント、」

「わ、悪かった、うちが悪かったから許し」

「スマツシャー？」

機動六課は初日から隊舎の一部が破壊された…

## 第2話

### 隊長達（後書き）

ケント「俺ってなんて不幸なんだ」

作者「君に幻想殺しなんて能力つけるつもりさらさらないからね」

ケント「バカなデバイスに馬鹿な作者、俺ってほんと不幸だ」

作者「馬鹿でサーセン」

第3話

遅刻……（前書き）

しょうもない話です……（――；）



### 第3話

遅刻……

遠い……

一通り六課の人達に挨拶をすまして自分の寮に向かっているけど……  
男子寮の端なんて聞いてねーぞ、なんだ？ 部隊長のいじめか？  
長い廊下を歩き終えて自室のドアを開ける

「なかなか綺麗じゃん！」

ベッドは清潔感あふれ基本的な生活用具は全てそろってる、奥に行く  
くとベランダから海を見下ろせる、ちょっとしたリゾートホテルだ  
な、これ。

デバイスがキヤーキヤー言ってるがあえて無視してベッドに倒れこ  
む……クマに襲われ部隊長に説教され、まあさっき見た感じだとこの  
部隊ではなんとかやっていけそうだ。

> 明日は新人達の訓練見るんでしょう？ <

新人のFW陣達は初日から訓練らしく会うことができなかった、ま  
あ明日会うことになるからいいか……

「ああ」と軽い相づちをうっておく……

そういえば同じ分隊の部隊長のシグナムさん？ に挨拶した時なんか  
模擬戦申し込まれたけどなんだったんだ？

そんな事を考えながらも俺は眠りについた……

「初日に遅れたうえに二日目は寝坊とはどついう神経しとんじゃあ  
んたは？」

そついいながらも一時間正座で説教されているケントです…

「申し訳ございません」

「その気持ちがあんねやったら寝坊すんな！」

8時開始なのに10時に起きました…バカデバイスになぜ起こさな  
かったかを聞いたら

>そつちの方が面白そうじゃない<

だよ！

訓練…午後からちゃんと見よ…

side スバル

お昼ご飯食べ終わったあと訓練場にみんなと行つたらなんか男の子  
がなのはさんと【お話】してた…なのはさんの額に青筋はしってる  
けど大丈夫かな？あつ、ティアじゃっかん引いてる…

「えつと、昨日紹介できなかったんだけどライトニング分隊副隊長  
のケントくん。フェイト隊長が仕事柄留守にする事が多いから補佐  
として来てくれました。」

えっと…なのはさん？なんか全部言っちゃいませんでした？自己紹介くらい自分で出来ます…

「えっと…ケントです、よろしくな〜」

簡単な挨拶、他にもいろいろ聞きたいけどご飯の時にいいよね。

その後シーザーさん？やエリオとキャロ、ティアや私が自己紹介した後…

「じゃあ模擬戦やるっか！みんながどれだけ出来るかどうが見学させてもらうから。」

（スバル、やるからには勝つわよ）

なんかティアが怒ってる？なんでだろ…けど、うん…やるからには勝つ！

（うん！）とだけ念話で返事し、スバルは持ち場についた

side            ティアナ

たしかに副隊長だから尊敬はしないといけない…でも…

「あれはなに？」

部隊結成一日目から遅刻し、さらには午前の訓練にも【寝坊】なんかふざけた理由で来なかった…

いくら隊長といっても意識が低すぎる

「自分はがどれだけ迷惑かけてるか分かってんのかしら？」

あんなふざけた奴に負けられない…

「絶対勝つ？」

そう一人でつぶやき、FW陣に指示を出していった…

### 第3話

遅刻……（後書き）

次回は簡単な戦闘です。

うまく書けないかもしれませんが頑張ります！

はやて「私の扱いひどくない！」

作者「大丈夫だ、問題ない、たぶん」

## 第4話

### 初めての模擬戦 (前書き)

上手く書けません…

ぐだぐだですがどうぞ

## 第4話

### 初めての模擬戦

俺の意見を全くきかず、なぜか模擬戦が始まった…

「やるしかないよな」

>どうしたの？もしかして勝てない？<

むっ！こいつ主人に応援の一つぐらいできんのか！

(じゃあ今から30秒後に始めるよ)

なのはさんの元気な声が響く…声のテンションは遠足に行く前の小学生みたいだな

そんなことを思いつつ

「じゃっ、セットアップ…」

>みんなみたいに元気に言えないの？セット！アップ！！的なのりで〜<

「馬鹿いえ！あんな恥ずかしいの19にもなって大声で言えるか！そんな馬鹿今どき見ないだろ！」

(うつつ…ごめんね…馬鹿で…)

「えっ、マジですか…」

(うん…)

「…シ、シーザー！早くセットアップ！」

>はいよ〜 <

そう言いシーザーにジャケット装着をつながす…

ひそひそと後で「お話し〜」などと言っているがあえて無視する…

うん…そのほうが身の安全は約束される…

俺のバリアジャケットが展開される…全体としてはクロノのジャケットを白を主体に黒といった感じた。肩のトンガリやらなどはない…あと刀状となったシーザーが腰にぶら下がってるぐらいか？ちなみに、なぜこんなのかというところ…俺にはファッションセンスがないらしい、前にエイミイさんのまえでデザインしてみたら盛大に笑われた…そんなに悪かったか？あれ？

>ダメマスター？模擬戦始まつてるわよ〜 <

あつ！本当だ…、じゃあいつちよやりますか！！

仕掛けてきたのはエリオだった。青い槍をこちらに向けながらすごい速さで突っ込んでくる…ピンク色の魔力をまとっているので恐らくフルバックであるキャロのブーストでスピード強化をしているんだらう…

「真っ正面からつつこんでくるか、なかなかいいけど…」

そう一言いうとケントは右腕に魔力による身体強化をしたかと思うと、エリオを片手で「受け流した」そのままエリオはスピードを抑えきれず



「え！うわーーーー！！」  
などと、叫びビルに衝突する、だがケントにはそれを見る時間がない  
エリオの真後ろ…ちょうどケントの死角になるように飛んでいた魔  
力弾がエリオを受け流した瞬間に襲ってくる…しかも後ろからは…  
「はあああああああ！！！！」

青髪のフロントアタッカー、スバルがリボルバーのような物をグイ  
ングインしながら殴りかかってくる…おそらくさっきのエリオ  
は罠で魔力弾を当てて、俺がバランスを崩したところにスバル、も  
し外れても体制を立て直したエリオがいる…か…

「だが！まだまだーーーー！！」

そっぴい俺は一瞬だけ…

レアスキルを発動させる

エリオを受け流した手で魔力弾をへはじく、エリオのほうに…  
それと同時に進行でスバルのリボルバーを付けている右手首を下から  
手刀で打ち、スバルの攻撃もはじく、スバルが片手バンザイのよう  
な体制になり…、その時には魔力弾をはじき終わっているのですその  
ままスバルのジャケットを掴み…

「うわーーーー！！！！」

「ギヤーーーー！！！！！！！！！！」

エリオに投げる……

ちなみに下がエリオで上がスバルだ。

なんかエリオだけ災難な感じがするが気にしないでおう、2人に  
バインドをして

「前線撃墜」

した…まあこれで模擬戦終了だな、後方だけでは勝負になんないだ  
ろ…

>マスター…<

「なんだよ？」

>ほどほどにしないと怪しまれるわよ…<

「サーセン」

うう…今正体ばれたらクロノになんて言われるか…やり過ぎたか？  
てかちゃっかりスキル使ったし…

そういえば一步も動いてねえ、どうしよう…

その後なのはさんからの通信で模擬戦は終了した…

side ティアナ

「強過ぎる…」

あの副隊長はその場から一步も動かずに…攻撃魔法を使わず…デバ  
イスさえ振らないまま私たちに勝ってみせた…

悔しい

今の思い…キャロのブーストは完璧だったしエリオも自分の役割を果たした…失敗したのは訓練を積んできた私とスバル…しかも私はあしでまといにもなってしまった…  
だけど…

「強くなつてやる」

兄さんの果たせなかった夢を、ランスターの銃弾は弱くないということを証明してやる！そのためにここへ来たのだから。

自分の思いを再確認し…ティアナはなのはの元へ戻った…

side      なのは

「はあ〜」

「大丈夫ですか、なのはさん？」

うう、せっかくケントくんの実力見れると思ったのに…あれじゃわかんないよ…

シャーリー慰めてくれたけど、うう…今度模擬戦申し込もつかないかな？  
ちなみにあの後ケント君は

「デスクワークがあるので〜」

とか言って消えてしまった  
それより、

「ティアナの魔力弾：普通なら反応なんてできないような距離とス  
ピードだった…どうやったんだろっ？」

そんな小さな疑問を持ちながら、なのはは教導を続けた…

## 第4話

### 初めての模擬戦 (後書き)

スバル「私たちの扱い雑じゃないですか？」  
作者「サーセン」

## 第5話

### ファーストアライト1

side ?

少年が目を覚ます。手には刀…

右を見ても、左を見ても荒野でしかなく地平線があるだけの殺風景な風景…

だが人はいる…立ったままみんな眠っている、全員同じ刀、そして…

「同じ顔」

side out

初めての模擬戦から一週間ぐらいがたった、FWメンバーともだいぶうちとけ、六課内からも話しかけられるようになった。よくなのはさんやシグナムさんから模擬戦のお申し込みがくるのだが丁重のお断りしている、そして今は…

「うっっ」

「大丈夫？」

ああ、なんて優しいんだフェイトさん、それなら少し仕事を…

「それは駄目、自分でやらないと」

「なんで言いたい事わかつたんですか？」

デスクワーク中です。隣には同じライティング分隊のフェイトさん、  
なんだが…

「ケント君って本当にデスクワーク苦手なんだね…」

苦手です…すごい苦手、いすに座った瞬間眠くなんない？やる気  
もでないし量も多いし、かんべんしてください…

結局その後フェイトさんに懇願して手伝ってもらいました。とおり  
かかった部隊長がニヤニヤしてたが何だっただんだ？

フェイトさんは午後から聖王教会に行くらしい、俺はちなみに暇…  
新人達の訓練でも見るか、時間を見るとだいたい訓練終わったぐら

い…無理じゃん

大きな背伸びをして立ちあがる、食堂にでも行くことと思い足を進める

「あつ！ケント君！」

前からはなのはさん、また模擬戦のお申し込みか…

「今から新人達の新デバイスとりに行くんだけどよかったら一緒に来ない？」

どうもスターズ2人のデバイスが壊れたらしい…丁度いいのでデバイスもらおうとかいう話らしい…だけど

「えつと…お断りします。」

「な！なんでですか！」

うつ…エリオ…おまえの純粹なところは好きだが…わかるだろう

「シャーリーに会いたくね〜」

あいつシーザーのメンテさせてくれてるさいんだよ！シーザーは…あいつ…じゃなきゃいやだっていうし！

「う〜わかった」

「すみませんなのはさん、午後からは教導手伝いますんで」

「えっ！じゃあ模擬s」つつしんでお断りします」「う〜〜〜」



そんな感じの話の後、なのはさんたちはシャーリーのところへ

<マスターそろそろメンテしたいんだけど>

「おまえは俺に本局へ行けと申すか」

<わかってんじゃん>

うげえ…メンテの時にこいつの性格変えてやるつか

「また今度な」

<このチビマスター>

「なんだとこら」

食堂でヴァイスと一緒にラーメンをすする

「それでシグ姉さんが「気合が足りん！」って怒るんですよ」

「お前も苦労してるんだな…」

ヴァイスとは共に苦労人として馬が合う、それぞれの愚痴なんかをメールやらなんやらで言い合う

「ケントさんはいいじゃないですか〜よりによってフェイトさんに…」

「フエイトさんがどうかしたのか？」  
ヴァイスが俺の肩をたたく…その瞬間

ビービー！

「こねって！」

「一級警戒体制…か」

出勤…ラーメン食ってからでいいかな？

第6話

ファーストアライト2 (前書き)

S i d e

I

とは第3者目線という意味です

## 第6話

## ファーストアライト2

ただいまヴァイスが操縦してるへりで上空にいます…

「ねえ、ケント君?」

「はい」

「なんでラーメン食べてるの?」

「残すのはもつたいないんで」

「そうじゃなくて、もっと緊張感とか…」

「現場ではちゃんとしますんで」

なんかなのはさんが頭をかかえてるが気にしない気にしない、あとスバル、その羨ましそうな視線やめろ、食べづらい。

ちなみに事件とはなんかリニアールがガジェット?に占領されちゃった〜( ) ( ) しかもロストログアのレリックもあるからなんとかしてね〜( ^ ^ ) な、感じらしい…

「ほんと緊張感あるの?」

「すみません」

説明おおざっぱすぎたか?なのはさんが睨んできた…てかなんで俺の考えてることわかるんだ?

「さて、新デバイスでいきなりになっちゃったけど、いつも通りにやれば大丈夫だから！」

おっかなびっくりじゃなく、思いつきりやってみよう！」

空は私とフェイト隊長、ケント副隊長で制圧するから、みんなはスターズ・ライトニングに分かれてリニアレール内のガジェットを破壊しつつレリックを安全に確保。

何か聞いておきたい事はある？」

そう言うてなのはさんは周りを見渡す……

「無いようだねじゃあ、頑張っていこうね！」

質問とかいう以前に4人ともガチガチじゃねーか？キャロなんか泣きそうだし……

「ケントくん、そろそろ降下ポイントに着くから準備してね」

おっ！まじか！早くラーメン食わねーと！それと……

「キャロ、緊張はわかるけど気楽にいこーぜ、あんなランチみたいな訓練毎日してんだから大丈夫だよ。実際俺なんかガジェットよりも終わった後の報告書のほうが怖いぐらいだ、まっ、早く終わらして早く報告書書いて早くねよーぜ」

「ケント君はもう少し緊張感を持ったほうがいいよ……あとランチみたいな訓練って……キャロ、そんなに緊張しなくて大丈夫。離れても、通信で繋がってるから。ピンチになったら、助け合える。キャロの魔法は、みんなを守る優しくて強い力なんだから」

「は……はい！」

「よし！ケント副隊長…行くよ！」

そう言っただけなのは…制服のまま飛び降りた…って、なに  
危険な事やっちゃってんの？

「えっと…みんなはバリアジャケットちゃんと展開してから降り  
るんだよ…」

「あつ…はい…」

「じゃ…セットアップ…」

>はいはい<

一瞬のうちにバリアジャケットを展開し……

「すこし暴れますか？」

俺はへりから飛び降りた…

ちなみにすぐにフェイトさんと合流できた

「すごい数ですな」

「うん…目視するだけでも100機はあるね…」

これ作っただけで今月の生活費は大丈夫なんだろうか？

「じゃっ、目視出来るやつらは潰すんでさがつて下さい」

「えっ？ちよつとまってーどついでいっしょとっ」

「まあ見てて下さい」

s i d e

ケントは鞘からシーザーを抜く…

「「綺麗……………」」

なのは達が驚くのも無理もない…シーザーは持つ部分と柄は真っ黒だが刀身は純白で、太陽の光に照らされてまばゆく光っている

「いくぜ…」

そういうと刀身がまばゆく光始め魔力をためはじめる…

「これって、集束砲？」

「ムーブショット・ブレイカー！！」

ケントがシーザーを横に振ると一つの驚くほど巨大な「斬撃」が発

射される…そして…

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！

そんな音をたてたかと思うと100近くあったガジェットは一瞬にして「消えた」

「えっと……」

「今ので全体の3分の2くらいですかね…あとは分散して片付けましょうか？」

「いまの…どうやってやったの？」

「はい？えっと…そこからへんの魔力を刀身に集めて撃ち出しただけですよ？練習すればシグナムさんも使えるんじゃないでしょうか？」

「そう…なんだ…じゃあ残り片付けよっか…」

そのあと5分くらいで全部撃墜  
リニアのほうも無事リック確保し

「やっと帰れるぜ」

「戻ったら報告書ね（＾ー。）」

はえっ？

side ?



「クククっ、ああいい、とても嬉しいよ！」

紫の髪をした男が目の前に映るいくつのも大画面映像を見ながら興奮気味に笑う…

そこにはリニアール事件での機動六課のメンバーが映し出されている…だが男はある一つの画面から目を背けようとはしない

「これが出てきたということは本局は本気なようだ、そして！」  
そう言い顔に手をのせる…

「この魔力光…間違いない！まさか今の時代にまで血が引き継がれていたとはねえ」

「飛天の王よ……。」

## 第7話

### 出張任務1

新人達の訓練も本格的なデバイスを手に入れたので、次のステップに進むらしい…

この前までは

とにかくガジェットこわせ！

だ

つたのだが、これからは各個人のポジション別で自分の能力を伸ばす訓練をするらしい。

なので副隊長の俺たちも教導にあたるはずなんだが…

「なんで俺の担当がシグナムさんの教導になってるんですか？」

「ふむ…お前がこの前使った斬撃を撃ち出す集束砲…なかなかの威力じゃないか…高町に聞いてみると私にも使えろとお前が言ったらしいので遠距離での強力な技は前々から欲しくてな、是非教えてもらおうと思ひ高町に頼んでみたのだ…スカイを少し貸してくれ…とな」

なのはさん…俺の意見は無視ですかい…

「はあ、確かに言いましたけど、集束は難しいですよ。結構時間かかると思いますけど…」

「うむ…頼む」

「じゃあ始めに…」

「いや、まで！」

「？」

「この前の映像を見ているかぎりお前刀に関して相当な実力者だと思うのだが、一度模擬s「やってもいいですけど今後一切指導はしませんよ?」…ぐう」

この人相当なバトルマニアだな…聞けばフェイトさんもそうだったというし…模擬戦なんて疲れる事したくないよ…

まあその後かれこれ2時間ちょっと練習しました…一回、集束した魔力が爆発してあたり一帯が吹き飛んだけど気にしない…

「ああ…私の部隊が…」  
とか嘆く声が聞こえたけど、気にしない…

side                      スバル

なのはさんから終了の通信がはいり私はその場に膝を落とす

「つ…疲れた〜」

「だらしねーなスバル。こんくれーでへばってちゃ、フロントアタッカーは務まらねえぞ」

「ははは…あはははは…。。。」

私がウィータ副隊長でティアがなのはさん…エリオとキャロがフェイトさん…なんかスターズだけ大変じゃない!主に教官が!

「まあ、あたしの訓練についてこれてるだけマシか…ほれ、スバル

「いくぞ！」

集合場所へ歩き出したヴィータ副隊長の後を、慌てて追いかける。

「全く、シグナムもモノ好きだよな…いきなり砲撃覚えたいだなんて…」

えっ？ほ…砲撃！

「いやいやまって下さいヴィータ副隊長！シグナム副隊長のデバイスって剣ですよー！？それなのに砲撃だなんて…」

「リニアのときケントのヤローがやったらしい…あのヤローのデバイス刀なのにな」

す…凄い……そうだ！またわたしのデイベインバスター見てもらおう！

そんな事を考えながら集合場所に向かう。あたしとヴィータ副隊長が訓練をしていた場所は、集合場所から一番近かったのでそんなに時間をかけずに着いた。

「あれ？はやて？」

「八神部隊長？えっと…なんでしょうつかあれ…？」

見るとシグナム副隊長とケント副隊長が正座して八神部隊長に怒られてる…多分滅多に見れる風景じゃないよね…

(えっと…ティア？なにかあったの？)

(シグナム副隊長が練習で失敗して訓練場の一部を海にしたらしいわよ…… どんだけスケールでかいのよ……)

(そうなんだ……)

確かにさつきからお金がなんやら私の苦勞がどうやら言ってる…… エリオとキャロが来たけど二人とも呆然としてる……

「まあ後で二人には報告書書いてもらうとして……」

「なっ！嘘でしょ？部隊長！」

「やかましい！それくらい当然や！ まったく、ほんならみんな集まったみたいやし本題に入るか！」

コホンと一回咳払いして部隊長が話し始める

「さつき聖王教会から連絡があつて、第97管理外世界でロストロギアが発見されました」

「第97管理外世界？ はやてちゃん、それってもしかして……」

「なのはちゃん正解。私らの故郷、海鳴市やで」

「はやて、それ本当？」

「うん。それで、機動六課に出動要請がさつき届いたんや」

「そうなんだ」

「じゃあ、久しぶりの里帰り、だね」

「だね！」

「なあスバル？」

「なんででしょうか？」

「第97管理外世界ってどこだ？」

「えっと…なのはさん達や私のお父さんの先祖の故郷です。名前は確か…地球？だったと思います。」

「へえ〜」

「細かいことは、後で皆の端末にメールしておくから、各自で確認してな」

「はやて、日時は？」

「明後日か、早ければ明日やな。そっちも分かり次第すぐに連絡するから、皆そのつもりで」

『了解！』

楽しみだなあ。あたしのご先祖様と、なのはさん達の故郷。どんなところなんだろ

「あつと、そういえばスバル。この後陸士108部隊に行くんやけ

「ど、お父さんとお姉ちゃんに何か伝える事あるか？」

「えと、特に無いです」

ちよくちよくメールで連絡とってるしね。

「そか、なら私はそろそろ行くわ。皆、とりあえず準備だけはしててな〜」

『はい!』

楽しみだな〜

side out

「管理外世界ねえ〜」

「どうしたの?もしかして嫌だった?」

あれから昼飯食<sup>ライメン</sup>って午前練習の報告書を作成中…ちなみに隣には自分の書類を片付けているフェイトさん

「いや、そうじゃないんですけど…管理外世界って砂漠やらなんやら多いじゃないですか…」

「ふふっ、海鳴はちゃんとした町だし砂漠なんてないよ。むしろ海がとても綺麗だよ」

「それ聞いて安心しました」

まあ向こうで訓練とかないんだったら半分休暇ということでもいいのかな？

「だめだよ、ちゃんとした仕事なんだから」

だからなんで俺の考えがわかるんですか？



## 第8話

### 出張任務2

屋上にあるヘリポートから出張任務に行くメンバーがヘリに乗り込む

「ところでケントくん？」

「なんでしようかなのはさん？」

「なんでまたラーメン食べてるの？」

「小腹が空いたんで…」

またなのはさんが頭をかかえてる…俺なんか悪いことしたか？それとスバル、前みたいなの羨ましそうな視線やめろ…ほんと食べづらい

「まあそれはおいといて…はい、リインちゃんのお洋服」

「わーい！ シャマルありがとですーっ！」

リイン曹長の服ということは、あれか？リちゃん人形サイズの…  
…つてええ！

いやそれ…カちゃん人形じゃないじゃん…でかすぎじゃないか？

「えっと…その服って…」

「はやてちゃんの、ちっちゃい頃のおさがりですっ！」

聞きたいのはそこじゃないんですが…

「なんか、普通の人のサイズだなんて……」

「だよなっ！キャロもそう思うよな！  
だってそれ普通の子供用だろ？」

「えっと……そういえばFWメンバーとケントさんには見せた事なかったですね！」

「なにを？」

「システムスイッチ！アウトフレーム・フルサイズッ！」

「……おおっ！」「……」

「はえっ!?!」

「そう言うとリイン曹長は光に包まれ……」

「つと。一応、この位のサイズにもなれるですよ?」

「でかっ!」

「はえ〜」

「いや、それでもまだちっちゃいけど……」

「はえ〜」

「普通の女の子のサイズですね」

「はえ〜」

「ケントさん…驚きすぎです…」

「はえ〜…はえっ!」

やべー!ちょっとびっくりし過ぎた!

「向こうの世界には、リインサイズの人間も、フワフワ飛んで人間もいねーからな」

ミッドでもフワフワ飛んでる人間そーいませんよ…ヴィータさん…

「うーん。大体、エリオやキャロと同じくらいですかね?」

「ですね」

「リインさん、可愛いです」

「そうですか?」

「それならミッドでもその姿でいたほうが過ごしやすいんじゃないんですか?」

「この姿だと魔力の燃費が悪いんです」

「さいですか…つまり今流行りのTNP(低燃費)というわけですね…」

「そうこうしてるうちに着きました…管理外世界の…どこだっけ?」

「地球にある海鳴市だよ、ケント」

ありがとうございます…しかしなんで俺の考えがわかるんですか？  
フェイトさん？

「なんなんでしょうか？この「コテージ」？」

「例の現地協力者の方が貸してくれたんだよ」

現地協力者は凄い金持ちだという事がわかりました…

「ここが、なのはさん達の、故郷ですか？……」

「そうだよ。ミッドと、殆ど変わらないでしょ？」

「空は青いし、太陽も一つだし。」

「山と水と。自然のにおいもそっくりです！」

キャラがワイルドな発言をしたが気にしない…んっ？

「クロノからの通信？」

「えっ！お兄ちゃんから?!」

そういえばフェイトさんはあのシスコンの妹でしたね…でもこの通  
信は…

「すみません、なのはさん、すこし時間かかるかもしれないので先に調査始めて下さい」

「えっ…うん、どうしたの？」

「そこらへんはプライベートです」

誰にも聞かれないようにしないと…

通信がもれないように今は森の中…ついでに盗聴防止用の結界をしておく…

「悪いな…いきなり連絡して」

「どうした？なんか見つけたか？」

「今日、「奴ら」の研究所を一つ破壊できたんだが…」

「どうした？」

「一人…こつちの世界に転送されていた…」

「なっ!？」

「誰が転送されてきたか…いつ来たか…そこまではわからなかった

…」

まじかよ?!レリックのことで今忙しいのに!

「どうする?スカリエッツィは…」

「……………予言ではス力野郎が事件を起こすほうが早い…あくまで今回の様子見だろう……………まずはス力野郎を捕まえてから奴らの対処にあたる…気おつけろよ…こっちの世界に転送されたからにはお前か俺に接触する可能性が高い…」

「……………わかった…3提督にもそう伝えておこう……………」

「心配するなクロノ…まだ時間はある、六課は俺が守るよ」

「たのむ」

「いつもありがとな…シスコン」

「なっ!なにがシスコンだ」

そっつい通信を切る…

「さあ…いつ…どんな奴がくるか…」

>マスター……………<

シーザーが心配し声をかけるがケントは応えない

静かにケントは虚空を見上げる…その目は……………

泣いていた……

## 第9話

### 出張任務3

クロノとの通信を終えてコテージに戻る

「おっ！ケント君、クロノ君からの通信なんやったん？」

ん？はやてさんか…

「六課での生活はどうだ〜とか、俺の妹に手を出すな〜とかでした」

「はっ！そうか、フェイトちゃんにはクロノ君という最大の敵がおったのを忘れとった！」

なんか「ぐわー」とかいつてるが無視しよう

あとシャマル先生からの話では、なのはさん達スターズ分隊は徒歩で、フェイトさん達ライトニング分隊は車からサーチャーを設置して搜索してるらしい…

「ふう〜、じゃあ俺も歩きながら仕事します」

「もういいよ〜今から通信いれようとしてたところやし」

通信？

『さつき、協会本部から新情報が届きました。』

ロストロギアの所有者が判明。運搬中に紛失したとのことで、事件性はないそうや。

本体の性質も、逃走のみで攻撃性は無し。ただし、大変に



高価なもので、できれば無傷で捕らえて欲しいとのこと。  
まあ、気い抜かずにしつかりやる』

『はいっ』

「っという事はレリックではなかったと…」

「そういう事や!」

『こちらライトニング。こっちも一段落付いたから待機所に戻るよ。  
ロングアーチ、何か買って帰ろうか?』

フェイトさんからの全体通信…

『こちらロングアーチ。ありがたいことに、夕食は民間協力者の皆  
さんが用意してくれるそうや』

『うん。了解。じゃあ、スターズのみんなを車で拾って帰るね』

夕食か…それより…

「民間協力者ってだれなんですか?」

「わたしよ」

「はい?」

金髪ショートでパンツスタイルの、凄まじい美人さん。そしてなんか気が強そうな人が立っていた…  
なのはさんといいフェイトさんといい…六課に来てからよく美人さ

んと会うな…

「えっと…ライトニング分隊副隊長、ケント・スカイです。今回の事件での協力、ありがとうございます。」

「そんな堅苦しい挨拶は無しなし、私はアリサ・バンニクスよ。よろしくね」

「ケントくん？」

「なんででしょうかはやてさん？」

「美人の中になんで私ははいつとらんねん！」

「そういうキャラじゃないんですか？はやてさんって？」

「どういうキャラやねん私は！これでもピチピチ19歳の美少女や  
「！」

「自分の事を美少女発言！？」

「あの〜話についていけないんだけど…」

そんな感じで1日目の捜索は終了！

アリサさんやはやてさんと一緒に夕食の準備をした…途中で2人がゴソゴソとなにかを言っていたが気にしない、「あれがフェイトの…」とか言っていたが気にしない…

そこには今まで誰も見た事がないような戦場があった…

「スバル！肉ばっか食わない！食べ過ぎ！」

「あー、わ、私のお肉がー！」

「あまいなスバル、周囲を警戒し、尚かつ自分の領分をしっかりと守る。それがバーベキューにおける基本中の基本！…っな？ヴィータ！お前私の皿の上にある肉を！」

「あめくのはどっちだシグナム！バーベキューの網の上だけが戦場じゃないんだぜ！」

あそこのテーブルに行ったらバーベキューにおける、歴戦の勇者でもないかぎり、肉を食べる事は不可能だろう。

ばかみたいに食べるスバルとヴィータさん、負けず嫌いのシグナムさんが同じ席って…しかもその中で焼いているはやてさんはもつと凄いです…

ちなみにこっこのテーブルは和やかだ…なのはさんやフェイトさんエリオやキャロとその他新メンバー…そして…

「ほんと久しぶりだね、ケント君」

「直接会うのは1年ぶりぐらいですね。エイミーさん」

そう…あのシスコンの妻、エイミーさん

「うんうん…でもやっぱり…」

「なんですか？」

「身長伸びてないね」

「じつ、これから伸びるんです！」

この人はいつもこの話題を…コンプレックスなのに…

「ん？でも小さいほうがかわいいぞ」

「男はかわいくても嬉しくないんです…ん？」

なんだあれは？テーブルの端に誰も手に付けてないカラフルな物体がある…

「なのはさん？」

「どうしたの？」

「あのカラフルな物体って…」

それを聞いた瞬間なのはさん達がギョツとした表情になる…

「えっと…それはシャマル先生が作った料理なんだけど…」

「医師が作った料理ですか…なんか興味深い」

栄養バランスや体に良いものかはいってあってあの色なら納得だからな！

「だ、だめです！」

「なんですか？リイン曹長？」

「それをたべたらs」どうぞケントくん！」「うっ、うっ」

シヤマル先生がリイン曹長を何故だかわからんが押さえつける  
まあ断る理由も無いし…

「じゃあ…貰います」

「どうぞ、ケント君」

その物体を口に入れた瞬間見たのはバーベキューをほったらかして  
必死に俺に駆け寄ってくるみんなであった…

「……………ん？ここって？」

「よかった！目が覚めた！」

目の前にはフェイトさん…って！

「なななな…なにを……………」

「なにをって…膝枕だけど……………」

いや、アウトアウト！エイミーさんこっち見て笑うのやめて！  
そのまま起きようとするが…

「か…体が痺れて動かねー」

「なに！ついにシャマルの料理は神経系の毒物になったか！」

「シャマル先生……」

「ゆ…許して下さい！」

シャマル先生…涙目だ

「とにかく、しばらく横になっていた方がいいよ」

いやいやいや！俺も健全な男子ですから！いろいろな意味で理性吹っ飛びますから！

こら部隊長！笑をこらえない！

こらエイミーさん！写メとらない！

ちなみに20分ぐらいは体が動かなかった……シャマル先生…

晩御飯の片付けが終わり部隊長が口を開く、ちなみに俺は俗に言う茹でダコ状態で、立ってはいるが理性を整えるのに必死だ…

「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか」

『はい……!』

やっぱりエリオと俺以外女だということあってお風呂は好きそつだ…あれ?そついやザフィーラは?……

「でも!」お風呂無いわよ

えっ!じゃあどうすねば…

「そつすると……」

「やっぱり」

「あそこですかね?」

「あそこでしょう」

なんか怖い…FW陣なんて全然理解してないぞ、俺もだけど…

「さて。機動六課一同。着替えを準備して、銭湯準備っ!これより、市内のスーパー銭湯に向かいます」

「スーパー……」

「セントウ……?」

「はえ?」

「えっと……いらっしやいませ〜団体様でしょうか？」

「えっとお……大人13人、子供4人です」

「エリオと、キャロと……」

「わたしとアルフですっ」

「あの、ヴィータ副隊長は……」

「あたしは大人だ」

「ケントくんは？」

「エイミィさん……俺も一様大人です」

当然だが戦闘機は男湯と女湯にわかれていてエリオが安心していた  
……なぜ？

だがそんな疑問はキャロによって解消される……

「広いお風呂だって。楽しみだね？エリオくんっ。」

「あ、うん。そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

「……えっ？エリオくんは？」

「えっ！？ば、僕は、その、一応、男の子だし……」



「うん……あ、でもほらっ。あれ見て？」

キャラが指差した先には、入浴施設の利用規定。

そして、そこに書かれている一つの文。

女湯への男児入浴は、11歳以下のお子様のみでお願いします

エリオは10歳。この利用規定によれば、女湯への入浴は可能…

「せっかくだし、一緒に入ろうよ？」

「フェイトさんっ!？」

フェイトさん…10代の思春期直前な男の子の気持ち考えましようよ…

「でもやっぱり、スバルさんとか隊長達とか、アリサさん達もいますしっ!」

「別にあたしはかまわないけど？」

「って言うか、前から頭洗ってあげようか」とか言ってるじゃない?」

「あたしらも良いわよ? ね?」

「うんっ。」

「いいんじゃない? 仲良く入れば。」

「そうだよ。エリオと一緒に風呂は、久しぶりだし……。入りたいなあ」

だめだ女性陣：嫁入り前の体なんだからもう少し恥じらいをもとうぜ……

やっぱりエリオが目でSOSを送ってくる……だが、

「諦める……エリオ……」

「！、ケ……ケントさん！」

「目の前にいる女性陣を説得させられるほど俺は気用じゃない、時には諦めも大切だ……」

絶望したような目になるエリオ……すまない

「それじゃあ行こ エリオ君！」

「ケントさん！……ケントさん！」

無事に帰ってこれたら後でなんか奢ってやるよ

風呂に入る時はやてさんが

「この露天風呂は最高やで〜」と言っていたので入らせて貰おう……

場所は変わって風呂の中……ああ……

「癒される」

文句なしの100点満点！疲れがどっと引いていく

「はやてさんオススメの露天風呂行きますか…」

外の風呂なんてミッドじゃあまりないからなく楽しみだ

side フェイト

久しぶりの露天風呂…気持ちいい……

はやてが行こうって言い出したのに肝心のはやてがこない…

「何かあったのかな？」

そう思っただろうとすると

「えっ？」

「はえ？」

ケントがいた……

side out

今俺とフェイトさんは背中合わせでうしろを向いている

「えっと…なんでケントがいるのかな？」

「ここって男湯じゃないんですか？」

「私は女湯からはいって…」

あゝ…そういって…

「はやてさんですね」

「はやてだね」

つまりうまく俺たちを「混浴」に誘い込んだと…なんのために？

「俺…上がりますね…」

そう言って立つが

「まって…」

「？」

「ちょっとお話しなつた」

「……………」

断る理由もないので座り直す…

「六課での生活は楽しい？」

「楽しみですよ…いろいろと…」

「そう…」

そう言っつて沈黙になる……

「ねえ…ケント？」

「なんででしょうか？」

「好きな人っている？」

単刀直入ですね…

「なんでそんな事………」

「ほ、ほら……わたしよライトニングの体中だからさ、隊員のことを知っておいたほうがなにかと役に立つかな〜と思って……」

「そんなもんですか？」

「そんなもんなの!」

………おそらくこの人は中途半端な答えではなっとしなさそうだ……

その時勝手に…無意識に口が動いた…

「人間として堕ちた俺に…人を愛する資格なんて…無い……」

慌てて口を塞ぐが、遅かった……

えっ？と言ってフェイトさんがこっちを振り向く……

「す…すみません！」

そのまま俺は逃げるように露天風呂からにげてゆく、フェイトさんが「まって！」と叫ぶが足が…止まらない…

俺は転がりこむような勢いで男湯に突っ込む…よくよく落ち着いてみると涙がでてきた…俺は…

サイテーだ…



第10話

出張任務4

「どっしょ……。」

口がすべってあんな事言ってしまうなんて…

しかも相手はただでさえ心配性のフェイトさんだ…ほんとどっしょ…

そんな感じで俺はロビーでコーヒー牛乳をチビチビと飲む…

>自業自得…まったくもう！<

「うっっっ…」

>そっこと言ってるうちに来たわよ〜<

右を向くとフェイトさんが小走りに駆け寄ってくる…

ちゃんと…謝らないとな…

side

はやて

なんかおかしい……

いつものフェイトちゃんやったら多分今頃私は「お話」でこの世におらんはずや…でも……

「フェイトちゃん！混浴露天風呂で二人きり！ラブラブツアーはど  
うやった?!」



って、聞いたたら……

「あつ、うん……気持ちよかったよ……露天風呂……」

なんて返ってこうへんやろ！明らかいつものフェイトちゃんやないやんか！

温泉から出たら出たで誰か明らか探しとうし！

「どつだと思つっ？はやてちゃん？」

「そこまでは解らんわ、エイミィさん」

ここにはやて&エイミィさんのフェイトちゃん追跡隊結成や！

「ねえ？ティア？八神部隊長達何してんのかな？」

「スバル！こつから離れるわよ！こついうのは関わらないほつがいわー！」

ひそひそ言つとるけど丸わかりやで……二人とも……

s i d e            o u t

「ケント……君……？」

「……はい……」

「隣……座るね……」

そう言いフエイトさんは腰を下ろす…

「すみませんでした…」

「えっ？」

「さっき…俺が言った事…」

「そっ！そんな、謝る事じゃないよ！」

そう言っつて…少し無言になる……

「過去に…。何かあったの？」

「はい」

落ち着いて…素直に答えてみる………だけど………

「聞かせてもらえないかな？」

「今は…駄目です………」

そう答えるとフエイトさんは少し悲しそうな顔をする…

「今は…です………」

「え？」

「時がきたら絶対にお話します…なのでその時は……受け止めてくれますか？」

「約束…だよ……」

「はい」

フェイトさんの表情が少しだけ柔らかくなる

「じゃっ！仕事といきますか！」

「……うん！」

side  
はやて

「なあエイミィさん？」

「どうしたの？はやてちゃん？」

「なのはちゃんはまだ恋愛までいってないとはいえユーノ君…フェイトちゃんもちゃんと恋しよう……私だけなんか遅れちゃうような感じするんやけど……」

「はやてちゃんにも好きな男の子ぐらい見つかるって」

「早く現れてほしいわー私の白馬の王子様……」

side  
out

その後問題のスライム？（ロストロギア）が現れたが

野生スライムが飛び出してきた！

FWはどうする？

殴る

召喚する

封印する

切り刻む

FWは「封印」を使った！

効果はばつぐんだ！！

野生のスライムを倒した

FWは1058の経験値をもらった！

…的な感じで見事封印。

次の朝には六課に帰りました！

「ところでケント君？」

「何でしょうかなのさん？」

「なんでまたへりの中でラーメン食べてるの？」

「いつもは醤油味でしたが今回は塩ラーメンです！」

なんかまた頭抱えてる…なのはさんはへりに乗ると頭痛が起きやすいのか？

またバ アリン貸してあげよう。あとスバル…いつもいつもその視線やめる…

## 第11話

### 小麦粉？の密輸を阻止せよ！

「本局からの依頼…ですか？」

「そや」

いきなり部隊長室に呼び出されれば唐突にそんなことを言うてくる  
部隊長…

「え〜それはロストログア関係で？」

「いや、まったく関係ない」

「はえ？」

まてまて…ここは「古代遺物管理部」の機動六課であって、なんで  
ロストログアに関係のない事件なんて受けないといけないの？

「簡単に言つと上の連中のいやがらせや…」「エースばっかいるんだ  
からこつちの仕事ぐらい手伝いやがれ」みたいな感じや」

確かに機動六課は過激な戦力をもっていて、それらを一斉に引き抜  
かれた事に頭がが痛いのはわかるが…

「それでケント君にはその依頼任務に行つてほしいんや…」

「ちなみに内容は？」

「お塩と小麦粉の密輸阻止や」

「一つ聞きますけど吸い込んだら？」

「多分周りがふわ〜となっていていろいろなものが見えたりするから絶対に吸い込んだらあかんで」

わかりました…有難うございます……

「そんなそこら辺の悪党みたいな事件やけど敵グループが以外とやつかいでな…非魔導師には必ず質量兵器…魔導師にはBランクやAランクまでおるらしいんや〜」

「どっかのテロリストですか？」

クロノに全部押しつけよっかな……

うん…そんな事したらまじで永久凍結させられるな…

「俺だけですか？」

「馬鹿いい！いくら副隊長でもそんなところ一人で行かせるか！ただでさえリミッターかかっとなのに」

そっぴやあつたな、リミッター

「やから執務官であるフェイトちゃんをいれてシグナム、バツクにシヤマルの4人で第45管理世界ブルズに行ってもらっ」

流石に質量兵器が出てきたら新人はパスか…まあ断る理由もないし

一様OKした

小麦粉ねえ……

「あれが敵さんのアジトね。」

そんな感じでやってまいりました第45管理世界ブルズ…来たときは結構大きな町だったが、南に進むにつれ砂漠に…  
なんで犯罪者つてこういう所に集まりたがるのか？  
あと敵さん達はやっぱりテロリストらしく資金集めに小麦粉売ってんだとか…なので組織自体を潰してほしいだど…

「うむ…では私とテストロッサが先行する…お前はここでシャマルが見つけた敵の親玉をたたいてくれ」

「はいはい」

まあ今回は暇だろう…2人で先行したら制圧なんて時間の問題だ…  
あと予想では相手の親玉はAランク相当だと考えている  
目撃された最も高い魔力がAなんだと

「いくよ！シグナム！！」

そう言つと…

バツコオオオオオオン

「管理局の者です！武器を捨て、速やかに投降してください！」



フェイトさん……いきなり壁をぶっ飛ばすとか……

「局だと！」

「イヌが！」

「殺せ！」

「うほっ！いい女！」

最後のはほっというて投降する気は0だな……

あっ！シグナムさん今10人ぐらいぶっ飛ばした……

「やっぱりAランク相当の魔導師が2人？」

シャルさんが内部を分析してる、その間に前の2人は奥に進んで  
いって見えなくなった

「あら？Bランク相当の魔導師がこっちに来てる、ケントくん、迎  
撃よろしく……えっ?!」

どうしましたかシャルさん？

「こっちに来てる魔導師の魔力が上がった!?ランクは……S相当  
!?!」

だる……

「距離……200、100、50、くる!」

ガキイ!

俺が腰から抜いたシーザーと相手のデバイスがぶつかる、形状は……  
同じ刀かよ……

「ヘッ！てめえやるじゃねーか、俺の初撃を止めるなんてよ！」

「こつちには優秀なアシストがいてな……」

目の前の男は嬉しそうにする

「シグナム！テストロツサちゃん！すぐにもどれる？！」

『すまん、今Aランク魔導師と戦闘中だ…リミッターさえなければ  
すぐに向かえるんだが…つく！』

『こつちも…なかなかねばるね……うっ！』

援軍は無し……と……

「ケント君！私がバックアップするから時間を稼いで！」

「りょーかい」

「作戦会議は終わったのかよ！」

こいつやけにテンション高い…うるせー

「てかなんで俺ら？前の2人のほうが厄介だと思っただけど？」

「あの姉ちゃん達は魔力封印されてんだろ？解除でもされたら厄介  
なんでな…てめえらはように人質だよ！」

なるほど…

「まあてめえは男だからどうせ殺すんだけどな！後ろの奴含めて女どもは一生俺の奴隷でかんべんしてやらあ」

……ついでい

「無理だとおもつよ」

「ああっ！」

そう言つて俺は男との間合いを一瞬でつめ…切り上げる  
なかなかというか男も反応して受け止めるが俺は連続で切りつける

「なっ！」

「場所変えよ……」

「転送魔法?!」

「てめえが自分の下心語つてるときに仕込んだんだよ馬鹿！」

「なんのためにだ！後ろの女がいねーとおまえなんか勝ち目がねーだろ!!馬鹿はてめえだ！クソガキ！」

「ケ！ケント君!!」

「ここから真南に20キロの所にいますから」

すみません、シャマルさん…

目の前のガキが言った通り転送された場所はアジトからほとんど離れていねえ

ちくしょう！……せつかくまとまった金が入りそうだったのだが

「このガキがそんなに死にたきや今殺してやるよ！」

おれが叫ぶが目の前のガキは何もいわねえ  
死ぬのが怖くなったか？

「誰も見られてないな……」

はっ？

こいつなに言ってるやがんだ？

「なんだてめえ！」「だれかに見られたら力がでませうん」とか言い  
てえのかよ！」

「半分当たり……とでも言っというてやるよ」

「じゃあその力とやらを見せてみるよ！」

side

フェイト

どうか無事でいて……

それだけだった……

結局戦闘に決着がついたのは通信があつてから3分後……シャマルがいる所に戻れたのが5分後、今、ケント君の所に行くのに今で10分  
そう思いスピードを早める……あとちょっと……

「ケントく……ん？」

そこにいたのは無傷のケント君とボロボロになった犯罪者だった……

side

out

「本当に怪我とかない？」

「……大丈夫です」

今帰りのへりの中……その質問かれこれ4回目です……フェイトさん  
ちゃんとシャマル先生のチェックも受けたんですし……

ちなみにあいつらはこの世界の治安維持組織に引き渡して少ししてから管理局に引き渡されるらしい

「しかしよく男の魔力源がロストロギアだと気づいたな……」

「カンですよカン」

みんなには転送の時にロストロギアを奪った事にしておいた全然気づいたなかったんですけどね

「帰ったら報告書だね」

「……………はえ!？」

## 第12話

### ホテル・アグスタ1

「凡人」

自分を例えるならその言葉が一番だろう

今の六課の戦力は明らかに異常だ…

隊長陣は全てSランク並の魔力量

スバルの特化した攻撃力に突破力

エリオの性質変化、それにあの年でBランク

キャロのレアスキル…竜召喚

他の隊員も、みんな未来のエリート達

私には…何もない

毎日の訓練も、そんなに強くなってる実感が無い。

自分は兄さんに追いつかないといけないのに……

自分の周りには…天才と歴戦の勇者しかいない……

やっぱり私は、ただの凡人……

「オークションね」

はい！現場のケントです！

今取引が許可されたロストロギアのオークション会場、ホテル・アグスタに来ております！

はつきり言って俺らが出なくてもいいような感じがするんだがロストロギアにつられてガジェットが出てくるかもしれないんだとさ…はやてさん……なんか小麦粉事件も含めて俺ら「パシリ」になってませんか？

『そっちはどう？ケント君？』

『何もなさすぎて眠たいです』

『このまま何も無いのが一番なんだけどね』

通信をしてきたのはシャマル先生

『俺らは昨日の夜から警備してるんですよ？少し仮眠を「だめよ、もうすぐ始まるんだから」…ですよね』

帰ったらはやてさんに文句言ってやる！なんで副隊長だけ警備時間がこんなに長いんだ！

「あと少しの我慢だろ……本当にやる気がないな……お前は」

「シグナムさん、働いたら負けだと思えますます。」



「……………」

死んだ魚を見るような目でこっち見ないください

—警—

アラート…ちょっとお出ましますか……

『シグナム！ケント君！お願い！』

「気を抜くなよ」

「そう簡単にはやられませんよ」

side

ティアナ

『スバル？そつちはどう？』

『うん…特に異常無し』

今の任務はロストログアのオークションがされるホテル・アグスタの警備、確認のためにスバルと連絡をとる

「でもすごいよね！八神部隊長と守護騎士全員集合なんてめったにないよ！」

『そうね…あんたって部隊長達のこと詳しいんだっただけ？』

『うっん、お父さんやギン姉にちょっと聞いたぐらいなんだけどね…』

簡単に言えば、ライン曹長意外は部隊長の持っているデバイスが関係している固有能力らしい  
詳しい情報は特秘事項なので不明…

レアスキル…

警！

アラートが鳴り響く私はすぐにスバルと合流しサポートのシャマル先生に通信をつなぐ

「シャマル先生、私も前線の様子が見たいんでモニター回してもらえませんか？」

「わかったわ、すぐにクロスミラージュに転送するから」

画面に映ったのは副隊長達とザフィーラが次々とガジェットを破壊してゆく映像

「副隊長達とザフィーラすごい！」

「これで…リミッターつき？」

自分と立っている世界が違う

でもだからってなに？



「了解」

『リインちゃんが向かっているから探してみてください!』

いますね、ちゃっっちゃと合流しちゃいましょう

「リイン曹長」

「ケツ、ケントさん!?!」

「ぱかぱかん ケントが仲間に加わった!」

「ふっ、ふざけてる場合じゃないですよ」

「サーセン」

目の前で飛んでいる画びょう?みたいな虫を振り払いながら少しふざけてみる……

「リイン曹長」

「はい?」

「よけて!?!」

ガキイン、と一瞬、シーザーと相手のデバイスとで火花がちる

相手の男はすぐに距離をとり身構える

かなりゴツイイメージの男だ

「槍かよ…俺槍にいい思い出ねーんだよ」

「……………」

無言か……

「はあ、え」と速やかに武器をおいて投降してください、今ならあなたに弁護士をプレゼントします…っおっと！」

忠告したが、攻撃してきはった、投降の意思無しっ

「リイン曹長…離れないくださいね…はあ！」

「むっ！」

そのまま俺は相手との間合いを詰めて下から上に斬り上げる  
だが相手も槍を振るいシーザーの軌道をずらし隙が出来た俺に対して槍を振るおつとする…  
だけど…

「あめえ」

自分の後ろに6つのスピアを展開し男に放つ

男はすぐに攻撃をやめてスピアをなぎ払い爆発が起きる

そこに向かってもう一度間合いを詰め今度は上から下に向かって斬りかける

「なめるな！」

だがそれは槍で受け止められ鏢ぜり合いになる

「俺ってな…ミッド主体ベル力混合なんだよ……」

「だからなんだ」

お互いのデバイスから火花がちる…だが体格の差か若干男が押ししている

「ミッド式の攻撃の主体は射撃…それと」

シーザーが眩く光り始める……

「砲撃……」

「!……!」

男が間合いを取るが…遅い

「ショットオンムーブ!!」

リニアの時よりかは小さいが…零距离!!

ドガアアアアン!!

「やったか?」

まあ…現実そんなあまくないか

「今のは…効いたぞ……」

爆風がはれるとバリアジャケットをボロボロにした男が…

「零距离で立てるとか……どんだけだよ」

「いい騎士だ…名前は？」

「人に聞く時は自分から名乗れ、あと俺は一樣魔導師だ」

「すまなかった……ゼストだ……」

「機動六課ライトニング分隊副隊長ケント・スカイだ、ゼストはなぜこんな事をする」

「目的の為だ」

「スカリエッティか？」

「あいつなどと一緒にするな」

……つまりゼストは自分自身の目的達成のためにスカ野郎と組んでる…

「聞きたい事が山ほど有るんで捕まっつて貰えませんか？」

「そんな気はさらさらない」

「残念です」

お互いがデバイスを構える……その時

「はいはい、そのまま」

で〜

どこからか聞こえる声

「なっなんですか？」

「?!」

ライン曹長とゼストが困惑する……だが……

俺の思考回路は一瞬遮断される  
この声って……

「嘘………だろ？」

>マスター!!上!!<

シーザーの声によって俺は我に返る

「ゼスト!!ライン曹長!逃げて!!」



その声の直後、上から舞い降りたフードの女にゼストは腹を蹴られ、体制を崩す

そして展開させた槍状のデバイスをゼストに…突く！

「！！っ…スカイ！いつの間にも！」

俺はシーザーを使いゼストに向かっていた槍を受け止める

「ゼスト…勝負は中止だ…今すぐここから逃げろ！」

「なっ?!だがお前だけをおいて「お願いだから早くしろよ!」…  
…わかった…」

俺は絶叫に近い声でゼストに怒鳴りつける

「ケントさん?!」

「リイン曹長はすぐにここから離れてください…お願いです」

「…わ、わかりました。すぐに助けを呼んでくるですっー」

クロノからの連絡で奴らの内一人がこっちの世界に来ているのはわかっていて…

俺に接触してくるのだったってわかっていて…

あの漆黒の槍…間違いない

だけど…なんでよりによってあんななんだよ…

「姉さん……」

フードの女は少しだけ……  
楽しそうな表情をした……



第13話

ホテル・アグスタ2

side

?

カンッ！ガッ！

荒野の中に1000を超える少年が走り回る……

その手には……刀……。

ガスッ！

一人……また一人と血を流す

大地は血色に染まり

少年達は殺しあう

自分と瓜二つの人間を……

荒野に立つ一人の少年

白かった実験服は真っ赤に染まり

大地には五体不満足の死体が並ぶ

肉の塊が……並ぶ

目の前には白衣を着た一人の男性……

初めて見た……自分ではない人

体はゴツく研究者よりかはヤクザに似ている男性

彼は一言だけ言う

「来い」……と……

s i d e

l

戦闘が始まって十分…ケントは絶え間なく攻撃を仕掛け、相手はず

つと防戦一方…いや、「防御しかしていない」

「うおおおおおおおおおおおお！！」

ケントがシーザーで無数の斬撃を打ち出す…

だが……

ガガガガガガガガガガ

目の前の敵は「まるでそこに攻撃がくるのを知っていたかのように

「斬撃を撃ち落とす

「くそっ」

そうつぶやいた瞬間、ケントの姿が…「消えた」

その瞬間

カンッ！！

女性の背後で金属音になる

「まだまだ……」

消えたはずのケントが背後から斬り上げるが相手の槍によって受け止められる……

「バレットシューター」

ケントの背後で10個白いのスフィアが展開される。そして……

「ファイア!!」

スフィアが相手に襲いかかる

ドドドドドドドドドドドッ!!

甲高い爆発音と煙がまっ

「うん!悪くない」

初めて発せられるフードの女性の声

「あなた…なんでここにいる……」

その問いに「うん」とうなった後、被っていたフードを脱ぎ始める

「うっっっ会いたかったよっっ!!ケンちゃん!!!!」

現れたのはケントと同じ黒髪で青い目をした女性、胸の膨らみはフ  
イトやシグナムにも負けないぐらいに成長している

「……相変わらずだな……姉さん」

「さみしかったよっさあハグハグしよっお姉ちゃんと愛を確かめ合  
おっ」

「うぜえ」

「がびっん」

ショックを受けたのか女性はすすり泣く真似を始める

「うう、酷いよケンちゃん…しばらく見ない間に反抗的になって…  
しくしく」

その姿を見てケントは深いため息をつき…シーザーを構える…

「で、なんの要件だ」

「おおっ！そうだった！…なんと！ケンちゃんわざわざお姉ちゃんが向かいに来ました〜！」

それを聞いてケントは一気に真剣な表情に変わる

「それは…あいつの命令で来たのか？」

「半分そうかな、あとこれは伝言」

「なんだ？」

「偽物の自由は楽しんだ？」

「あ…あ…うあああああああああああああああ…！」

雄叫びのような絶叫をあげてケントがいきなり斬りかかる、コンマ  
1秒足らず、瞬間の出来事

「そう言えばケンちゃんってレアスキルから二つ名ついたんだよね  
…確か…」



の閃光)  
」

(大空

s i d e

ケント

何度も何度も意識を失いかける

ガスッ！

「うっ…あっ…」

槍を使つての打撃が腹にめり込む

「大人しく帰ろう、ケンちゃん」

姉さんの能力は俺の能力と全くの上下関係にある  
余程の事がない限り……勝てない

「「覚醒」もしてないケンちゃんが私に勝つ事は無理よ……帰ろう」

「いやだ」

もうあんなところに

「いやだ」

戻るのは……

「いやだああああ!!」

間合いを瞬間的に詰めての斬撃……

俺の能力……閃光は大きく分けて2つある

限界の反射神経と超速移動

名前の通り限界の反射神経は生物が踏み込めない超高速の世界を見つめる事ができる……簡単に言えば俺に不意打ちは不可能、だが脳の処理量を超えてしまったため長時間の使用は不可

超速移動は音の約3倍もの速さで移動するチートくさい能力、当然、限界の反射神経を使わないと目がついていけない、それにいくら身体強化魔法を使っても空気抵抗などによって体にダメージを与えてしまうためこれも長時間の使用は不可

この能力によって俺にとってはSランクもFランクも関係ない「反応」ができればどちらも手の出しようがないからだ……だけど

ガスッ！ガッ！

俺の能力は……姉さんには効かない……

「もう終わり、ケンちゃん。これ以上頑張らなくてもいいよ……」

>マスター！しっかりして！<

やばい……意識が……くそ野郎が……

約20分……俺は一回も攻撃を当てられなかった……

姉さんは……強い

意識が、刈り取られる……

「紫電、一閃！……！」

ガキーン！

姉さんの発動させたプロテクションと上空から現れたシグナムさんがぶつかると

「へえ」

「ぐ、はあああああああ」

ガシャンガシャンガシャンガシャン

シグナムさんのレバンティンからカートリッジが4発排出される

ドガアアアアア

姉さんが発動させたシールドブレイクによって一旦シグナムさんは距離をとる

「スカイ！しっかりしろ！」

「シグナム…さん、な…んで？」

「すまない遅くなった、心配するなガジェットは全て破壊した」

俺は気合いで意識を立ち直らせる

「部外者は立ち入り禁止だよ」

はれた煙から姉さんの声

「ケンちゃんは殺せないけど邪魔する奴は殺してもいいって言われてるんだろ、だから…」

やばい！

「死んで、そこのデカおっぱい」

槍での高速の突き！

「くっ！」

>プロテクション<

シグナムさんがシールドを張る、だけど！

「だめだ！シグナムさん！避けて！」

「なっ?!」

姉さんがニヤリと笑う

シールドに槍がふれた瞬間…シールドが「消えた」

「えっ」

「一匹目」

グサッ

血が……飛んだ

## 第14話

## ホテル・アグスタ3

side

1

「ぐ……はっ……」

「ス……カイ？」

「あらら」

人を殺す凶器が……ケントの腹を貫く

純白のバリアジャケットはみるみる内に赤く染まり、口から大量の血を吐き出す

「……捕まえ……た……」

ガシッ！！

左手で力強く槍を握る……右手には魔力によって光り輝く刀

「……！！」

目の前の女性が初めて焦る

「零距离だ……置き土産に貰っとけ……」

ケントがシーザーを天高く掲げる

「ムーブショット……」

「くっ！」

女性が回避姿勢をとるが…間に合わない！

「ブレイカアアアアアア！！！！」

side

ケント

姉さんのいくつかある能力の一つ、それは……

「絶対破壊」

結界もシールドも「触れるだけで」かき消す

だから避けるしか回避の方法がない、だがシグナムさんは…

「防御」した…



俺ができる事は一つだけ…

「閃光！」

そこから先ははっきりと覚えていない

体と脳を気力で動かした

頭から墜ちていく浮遊感

遠くでシグナムさんが叫んでいる

すみません

俺は今度こそ意識を失った

s i d e

シグナム

「スカイイイイイイ!!」

頭から墜ちていくスカイを必死で追いかける、あの傷で墜ちたら…  
… 確実に死ぬ!!

「うおおおおおおお」

ガシッ!!

捕まえ…た

>シグナムさん!すぐにシャマルさんを!<

「わかってる！」

シーザーが叫ぶ

ケントが放った巨大な砲撃は相手に直撃……あんなものをくらって無事ではすまないだろ…

「今のは流石に危なかったわね……」

「な…に…」

空中にはさっきの女の姿、だが

「なんだ、その翼は…」

片方だけ、左から現れた「悪魔のような」翼がすっぽりと女を覆う程巨大な漆黒の翼が現れている…

翼が開かれ女がでてくる

さっきまで青かった瞳は左側だけ黄色く変色している

「あなたなんかが知る必要なんてないわ…それより……」

女が目を閉じると翼は何事もなかったかのように消滅する

「私は治癒魔法を使う事が出来ない、今、ケンちゃんを連れて帰ろうとしても死んじゃうわね」

目を開けるとさっきまでの青い瞳に戻る

「だから……今日は見逃してあげる、私もそろそろ」あっち」に帰らないといけないし」

「お前の目的は…なんだ……」

「あなたに教えたところでどうなるの？」

「私は「逮捕と人命、どっちが大事？」ぐっ……」

私が一様応急処置はしているがスカイの血は一向に止まる気配を見せない

それに敵は圧倒的に自分より強い…私の紫電一閃が、びくともしなかつた

女が去ってゆく

私はシャマルが来るまでほとんど何も出来ずにいた

side

ケント

目を開くと真つ白な天井…あの言葉を言うか？

「知らない天じよ」「目が覚めたのね！ケント君！」「……………シャマル先生」

シャマル先生…せめて最後まで言わせて……

「具合はどう？」

「まあまあです」

シャマル先生は「そうっ」とつぶやくと「すぐみんなを呼んでくるわ」とか言っつて何処かに行ってしまった

俺は…窓から見える空を見上げる

「負けた、か」

> 全く、本当にダメマスターなんだから<

「スクラップがお望みですか？」

振り返るとシーザーがベッドの隣に置いてある

> 「カナ」にあれだけ戦えたら十分よ、勝手に落ち込まない<

「ありがとう」

> 全く…ほら、お啓さんよ

「？」

バタンツ！

「ケントー！」

「そげぶっ！」

黄色い「ミサイル」が俺の腹に、直撃……って確か俺腹貫かれて…

「げぶしっ！」

「フェイトちゃん！あかん！それだけはあかん！ケント君死んでしまっ！」

やべっ、魂が口から…

「シャ、シャマルー早くきてー」

「ほ、本当にごめんなさい！」

「もう…大丈夫です」

あの後、フェイトさんミサイルのせいで、どこかに飛んでいきそうだった俺の魂をシヤマル先生が押し込んで何とか助かった…腹痛えあと今は隊長陣全員がここに大集合してる

「はやてさん…あの日結局どうなったんですか？」

その後説明された事を簡単に解説すると、警備の方は無事完了、ただティアナがスバルに向かってミスショットをしたらしい、なのはさん曰く「もう大丈夫、ティアナもちゃんとわかってくれた」と笑顔で答えた、ガジェットをあらかじめ片付けおわったシグナムさんの所へリイン曹長が、急いで向ったが結界のせいでなかなかはいれなかったそうだ

シヤマル先生が駆けつけた時には俺は意識不明の重体、すぐに俺は六課で治療を受けた

ちなみに今あの日から3日後だとさ

「結構寝てたんですね俺は」

「全く、血まみれで運ばれた時は生きた心地がせんかったわ」

「よかった、よかったよ」

ガチ泣きはやめてくださいフェイトさん…すごく申し訳ないんですけど…

「さて、お目覚めのすぐあとやけど真剣な話や」

はやてさんの言葉で皆が真剣な顔つきになる

「ケント君の事はひとまずおいといて、これや…」

病室に中ぐらいのモニターが写しだされる

「この女の人、ケント君の事をケンちゃん、ケント君はこの人の事を姉さんって呼んだった、詳しく教えてくれへんか？」

皆が一斉にこちら側を見つめる、だけど…

「はやてさん」

「なんや？」

「すみません……」

「なっ!？」

はやてさんも予想外だったんだろう、驚愕の目をしてこちらを見る、他の人達も同じだ、でも、まだ早い

「敵がスカリエッティの仲間の可能性もあるんやで?、それにケント君をこないにした張本人でもある、なんでなん？」



今度は少し強めに質問してくる

「……今はまだ……話せません」

はやてさんが目つきを鋭くする

「ケント君、私達がいるのは「組織」や、個人の独断で物事を決める事はできひん」

ああそつだ、俺達がいるのは「組織」だ、それだからこそ

「その「組織」での機密事項な場合どうすればいいんですか？」

この場の空気がこもりついた

## 第15話

## 過去の鎖・見えない鎖

「それは真面目にいうとるん？」

はやてさんが俺に問いかける

「はい……彼女、……姉さんの事を知っているのは俺とクロノ提督、聖王教会の騎士カリム・グラシア、そしてかの三提督ぐらいです。他の上層部の人間でさえ、彼女の正体は知らされていません……いえ、彼女自体知りません。」

「カリムにあの三提督やて!!!」

はやてさんが目を見開く、他の隊長達も程度は違っがかなり動揺している

「なんでそんな事をお前なんか知ってただよ」

「俺の姉さんだからじゃないですか？」

「あつ……」

ちよつとヴィータさん……

「ねえケント？」

フエイト……さん？

「それはケントの「過去」に何か関係あるのかな？」

「?!」

「凶星だね…」

フェイトさんが微笑みながら話しかけてくる  
だけどその目はまっすぐ、俺の目を向ける

「フェイトちゃん？ケント君の過去って…」

「すこし…ねっ」

なのはさんの問いにつらそうな笑いをしてから再びこっちに向き直す

「教えてくれないかな？私はこれ以上ケントが苦しむところを見たくない」

「あ……あ……。」

「組織としてじゃなくて「友達」そして「仲間」として…ねっ」

「とも…だち？なか…ま？」

「そっだよ」

フェイトさんの優しい言葉…

俺は…どうしたらいい……

『殺せ』

!!

目に映るのは大量の、壊されるためだけに生まれてきた、人の形をした「人形」

空から聞こえるのは冷たい声

理性が感情に押しつぶされそうになる

そして、姉さんの声

「偽物の自由は楽しんだ？」

s i d e  
フ ェ イ ト

俺の意識は闇に沈んだ……

「あっ」



ケントに異変が感じられたのはすぐだった

「ああああああああああ」

ケントの体が小刻みに震え始める

「ケント!どうしたの!」

その瞬間、

ドンッ!

「キャ!」

ケントが私を弾き飛ばした

「「フェイトちゃん?!」」

「テストロツサ?!」

みんなが私に駆け寄る

ガシャン!!

それと同時に、ベッドからケントが転がり落ちる、



私達は突然のことに防御できないまま壁まで飛ばされる

「この感じ……」

「はやてちゃん？」

「同じや…初代リインフォースと」

「え？」

なのはがびっくりしたようにはやてを見る

「私がリインフォースの中におった時と同じ感情を感じる…今のケント君の魔力からは……さみさと孤独しか感じられへん」

「嘘……」

なのはが言い終わる前に、私は走り出していた、バリアジャケットもつけずに……

「フェイトちゃん！」

「テストロッサー!!」

あと少しの所でケントに手を伸ばす

シジジ!

「うっ！」

結界……近づくとたびに痛みがはしる……でも……

「一人じゃない！」

私は叫ぶ

「仲間がいる！！！」

手を結界に押し込むそのたびに痛みが増す

体を入れる

「私も……みんなもケントの味方なんだよ」

一歩一歩近づく

「私が、ずっとそばにいるから」

ケントの目の前まで来てしゃがむ、ケントが顔を上げる

「もう一人じゃないんだよ」

おもいつきり抱きしめる

「私はケントの事全部わかってあげられないかもしれないけど」

強く…抱きしめる

「私が支えるから…ケントの事…だからもつ…」

「あ…う………」

「過去の鎖、見えない鎖を断ち切っていいんだよ」

「あっ………」

プツンと糸がきれたかのように…

黒い魔方陣は消え

ケントはフェイトに倒れこんだ



第16話      プチ家出

side      はやて

「お久しぶりです、クロノ提督」

「クロノでいい…で、どうしたんだ？いきなり「時間をくれ」なんて」

時空管理局本局、ケント君がおかしくなった後、すこし考えてからクロノ君に連絡をとった、流石にすぐには会えないという事で1日経っているんやけど  
そのため今クロノ提督の仕事場に来ている

「世間話無しで率直に言うわ…クロノ君が私達に推薦したケント二等空尉についてなんや」

「あいつがなにかやらかしたか？」

「いや…私が知りたいのはケント君の過去についてなんや」

クロノ君が少し難しい顔をする

「どうしてそんな事を？」

クロノ君に全てを話す、ホテル・アグスタで現れた女性の事、六課で起こったケント君の行動

「まったくあいつは…世話が焼ける……」

クロノ君……苦勞人やな

「まあ座ってくれ……」

「えっ？……あっ、はい」

いつもより真剣な顔付きで話しかけてきたからちょっとびっくりしてもうた

「……これから話す事は本局の最重要機密事項の一つだ……すまないが部隊の人間にはもちろん、特に上層部には多言を絶対にしないでくれ」

「わかつとる……」

クロノ君は少し目をつぶって話し始める

「まず…『はやてちゃん！はやてちゃん！』「シャ？！シャマル？」！……」

ああもう、こんな時に！

「どないしたん？」

『ケント君が…』

「ケント君が？」



『医務室からいなくなりましたー!』

「はああああああ!？」

side ケント

意識が闇に落ちた時に感じた優しいぬくもり  
俺を包んでくれそんな暖かい光

「過去の鎖、見えない鎖を断ち切ってもいいんだよ」

闇の中で聞こえた言葉、でも…

「そんなものをお前が背負う必要はないよ…フェイト……」

>よかつたの？六課にはもう戻らないなんて……<

「これ以上、俺のせいで迷惑をかけたくは無い」

>まったく<

俺は今、本局に来ている

六課で目が覚めてほしい二時間くらいか？

「あの老人会とも話さないで」「ケント！」「はい？」

振り向くと走ってこっちに向かってくるクロノの姿が…

「久しぶりだな〜クロノ」

「何が久しぶりだ！なんで六課から突然いなくなった?!」

「What?なんでお前がしってる?」

「私がおるからや」

「へっ?」

なんでここに？

「やあはやてさん、相変わらずお若く美しく」

「褒めてもお説教からは逃げられへんで」

またあのThe正座タイムですか

「なんでここにいてよ？」

「それは……」チラッ

>テヘッ<

「シーザアアアアアアア」

「フェイトちゃんなんかケント君がおらんなったって聞いた途端倒れたらしいで」

「そういうわけだ、ケント、すこし僕の永久凍結魔法の訓練につきあってくれないか？」

「やーめーてー」

あゝ俺生きて帰れるかな？

「ケントがいなくなっただって聞いてみんな心配したんだよ！なのはやフォアードのみんなだってガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミ……」

クロノの1時間にも及ぶ訓練という名のイジメが終わりはやてさんからの正座での説教2時間……無理やり六課に帰らされてフェイト

さんからの説教…もう3時間…あ、足が…

始めはなのはさん達も何か言いたそうだったがフェイトさんの長々と続く説教についていけなかったらしい…

今ではこの広いブルーディングルームに2人だけだ…

「聞いてる？ケント！」

「はっ、はい！」

「もう、本当に心配したんだから」

おめでとうございますフェイトさん…「心配した」の回数が今回で70回目になりました

「ケーントー」

…バルディッシュをのど元に突きつけないで、お願いですから

「なんでいなくなったの？」

「それは…>自分の過去なんかで迷惑かけたくないんだとさくなっ？！シーザー！！」

それを聞いてフェイトさんは少し難しい顔をする

「私言ったよね、ずっとそばにいるって、もう一人じゃないって」

「……」

「私がケントを支えるって」

「言われたかもしれません」

よく覚えてないけど……

だがその直後、

「フェイトさんにキスされた」

「えっと……」

「もうこんなバカな事しないように！」

フェイトさんはそう言って小走りで部屋からでていく……

……部屋もどろ

「落ち着けん……」

あれから一度部屋に戻って寝ようとしても……眠れない……  
なので今は落ち着くために六課の外回り……

>よかったじゃない、美女のキスなんてく

「ぶっ!!おっ、おまえな」

抜き打ちとは……恐ろしい奴……

>どうせ、自分に愛される資格なんてない、なんて思ってるんでし  
よく

「うっ」

……そう、俺は……愛す資格も、愛される資格もない……俺みたいな化  
け物に……

>ケント……く

「!?!」

シーザーがいきなり怒鳴ってきた

>あなたは何のために将来有望な部隊なんかを探したの?!<

>クロノがなんで無理矢理あなたを六課にやったのかわかってるの?!<

「……………」

>いつまでもうじうじするな!この部隊を信じろ!みんなはあんたを裏切ったりはしない!<

「……………」お前には助けられてばっかだな」

>だってマスターのパートナーだもん<

いつも通りに戻る  
まったくこいつは…

「あつ!ケントさん!」

ん?この声は…

「なにやってんだヴァイス」

「ちよくと来てください」

俺の六課に少数しかいない男友達の一人…ヴァイス、なんか悩み事か？

「あれ見てください」

……ティアナ？

「自主練か？あいつ」

はつきり言ってもう六課は消灯時間に近い…こんな時間に自主練なんて

「今日は訓練休みだったのか？」

「いや、いつも通りでした…かれこれ4時間くらいしてますよ」

だったらだいぶきついな…ただでさえリンチみたいな訓練にこんな時間まで自主練なんて、無駄な努力でしかない、集中力も体も限界だと思うし何より変な癖がついたら逆交換だ、それにアラートなんかが出た時には疲労のせいで逆に足でまとい、いい事なんかこれっぽっちも無い



「注意はしたんですけど聞かなくて」

「それで俺にか？」

ヴァイスは首を縦にふる

「まあやってみるだけやってみりわ、お前はもう寝ろ、大事な時にパイロットが潰れたら意味ないぞ」

「お願いしますね」

……今日はいろいろとありすぎだ



## 第17話

## 変態研究者

side

ティアナ

自分のやった事が許せなかった…

だから同じことを繰り返し返さないように今日から自主練をはじめた

凡人の私が天才に追いつくには努力しかないから…

「成長期にはちゃんと寝ないと俺みたいになるぞ」

「ケント副隊長?!」

今日の今日まで寝ていたケント副隊長がなんでここに?それよりももう歩いて平気なのだろうか?

「俺なんか3日も寝たのに身長伸びてないんだぞ」

「……………」

なんか、可哀想だ

「まあそんな事よりもうすぐ消灯だからはや寝ろ、なのはさんの訓練を受けたあとにあんまり頑張り過ぎると最悪死ぬぞ」

「大丈夫です…私みたいな凡人はこうするしか天才に追いつけませ

んから」

「凡人…ねえ…ほらよ」

ケント副隊長が何かをこっちに投げってくる

「俺コーヒー苦手でな、ココアで勘弁してくれ」

「あ、ありがとうございます」

素直にそれを受け取って飲むが

「ブツ！な、なんですかこれは！」

甘ったる過ぎる、なんなのよこれ、砂糖何杯入ってるわけ？

「かのリンディ提督の口に合わせた特製ココアだ！クロノが沢山あるからくれた、本当にうまいな」これ」

「冗談じゃない、これを飲みほすぐらいならスバルと同じ量のパスタを無理矢理食べるほうがまだマシよ！」

「すみません…ちょっと口直しに水を……」

「ああ水ならここにあるぞ、ちょうど飲んでなかったからな」

「すみません」

ケント副隊長が出したペットボトルの水を口直しに飲んだ筈だったが…

「\* + ^ ^ \$ ? % # > ÷ — × : / & a m p ; @ \* x \$ ¥ ! !  
! ! !」

「これもリンディさんの口に合わせた特注品らしいぞ！俺、こんな  
うまい水があるなんてしらなかったよ」

ケント副隊長つて、甘党だったんだ…ああ…意識が…

「ん？ティアナ、ティアナアアアアア！！」

彼女はこの時に誓った…彼からの貰い物は口にしてはいけないと…

side ケント

いきなり倒れたティアナを医務室に連れて行き今は自分の部屋の前  
シヤマル先生曰く、過労と精神的ショックで倒れたそうだ、なんか  
したか？俺

まあ明日には目を覚ますらしいから大丈夫か

そんな事を考えながら部屋のドアを開ける

ガチャ                    ドアを開ける音

「やあケント君、待っていて」

バタツ                    ドアを閉める音

俺は頭に手を当て今起きた事を整理しようとする……

うん、ない、俺の部屋に今六課が追っているマッドなんかがいる筈がない、やっぱり病み上がりだから少し脳が正常に動いていないんだ、うん

次にドアを開けたらいつも通りの俺の部屋が……

ガチャ                    開ける音

「人の顔見て現実逃避するのはやめてほしいんだg」

バタツ                    閉める音

「……………。」

>マスター。 <

「なんだシーザー？」

>現実から目をそらさないようにしましょ <

「……いや、これは夢だ、夢才チだ」

ガチャ ……………

「フフフフフ、何度ドアを開けても現実が変わらんよ」

「なんで此処にいらっしやるのでしょうか？ ジェエル・スカリエ  
ツティさん？」

マッドで変態な研究者がそこにいた

「つまり俺がいない間に忍び込んでそのホログラム装置を置いたと  
……」

「まあそのとうりだケント君、君は実にもの分がいい！」

なんか俺がいない3日の間に部屋に忍び込んでホログラム発生装置  
を置いて行ったらしい、まあ本物が現れるわけがないか……

「で、なんの用だよこんなそんじょそこらの二等空尉ごときに」

「おや？ わたしが君の正体を知らないとでも？ 管理局のデータをハ  
ッキングすれば直ぐにでてくるよ？ まさか機動六課にわざわざ二等

空尉など名乗って務めているとは思っていなかったがね」

……………」

「俺の事はどこまで知ってる？」

はっきり言って俺の過去さえ知られてなければいいんだが

「そうだね…君が二等空尉などでは無いことと」

「飛天王の血を受け継いでいることぐらいか？」



「それだけか？」

「まあね、他にもいろいろ調べてみたがろくな情報などなかった」  
それぐらいなら……良しとしよう

「そんな事よりケント君」

「なんだ？」

「私の所に来ないかね？」

「はっ？」

こいつは一体なに言ってる？

「知りたいのだよ！無限の欲望の名にかけて！幻の王を！勿論君には今私が出来る最高の待遇でお迎えしよう」

俺に進んでモルモットになれと、冗談じゃない

「知らねーよそんな事、それよりもお前自首しろ、こっちの面倒が省ける」

「むっつ、残念だね…まあいきなりそんな事をいわれても戸惑うだろう、また来るよ。いい返事を期待しているよ、ケント君」

なんかハハハハハハハとか悪役によくありそうな笑いをしながら出ていった

「シーザー？」

>なに？<

「今あったことはノーカウントにするよ」

>立派な現実逃避ね<

とりあえずホログラム装置は破壊しました  
スカ野郎は明日報告しよ、もう眠い  
時計を見たらもう1時…

本当にいろいろありすぎだ、今日は…

## 第18話

### 治癒魔法って素晴らしい

どもっ！ケントです！

今自分は何をしてるかっていうと……

「お願いしますお願いします、もう訓練場壊さないで下さい。  
お願いしますお願いしますお願いしますお願いしますお願いします。  
……」

正座の俺とシグナムさんの前で泣きながら頼みこんでる部隊長です

……

はい、訓練場ぶっ壊しました、収束失敗作で…ちなみに「また」です  
今回は3分の1ぐらい海に替えましたー

イエーイ

〇（ ）〇

壊した回数は5回目から数えてないです

もう六課は火の車

八神家の晩御飯がだんだん質素になっているのは気のせいだと思います  
たい

ふざけるのはよしたほうがいい気がする……

もう正座始めてから俺もシグナムさんも3時間が過ぎようとしてい  
ます……

その間はやてさんは泣きながらずっと「お願いします」を繰り返す  
んですよ、何処のホラー映画だ

シグナムさんも「切腹でござる!」なんか言い出すし……  
まあ今の俺に出来ることは、

「どうもすみませんでしたー」

土下座するくらいだったりする

へっ?プライド?そんなもの今可燃ゴミに捨てましたがなにか?

さらに1時間後

トンッ

ビリッ

「痛っ!」

>マスターの自業自得<

麻痺した足で歩くのってこんなに辛いんだな……

side      なのは

ティアナ大丈夫かな

今日のティアナは明らかに動きがおかしかった、技のキレも無く回

避もいつもと比べて遅い

「どうしちゃったんだ「ムニユ」??」

……今足元でムニユっていった?

試しに足に力をいれてみると…

ムニユムニユ

「なのはさん……一部の大きなお友達にはたまらないかもしれませ  
んが俺にそんな趣味ないんで足どけてくれると嬉しいんですけど…  
…」

「ふ、ふええええええええええ?!」

なにになになになに?!なんでケント君が廊下に倒れてるの?!  
しかもなんで私は頭を容赦無く踏んづけてるの?!

「む、無念、た、高町、こっちも頼む……」

なんでシグナムさんまで倒れてるの?!  
と、とりあえず

「シヤマルさん!!」

s i d e

ケント

治癒魔法っていいもんだ  
みるみる内に痛みが引いていく

「はいお終い、シグナムもケント君も大丈夫！」

「すまないシャマル」

「ありがとうございます、シャマル先生」

とりあえず訓練場はもうこれ以上壊さない様に努力するでしょう

その日の八神家の夕食が白米だけだったというのは余談である

side

?

ビー・ビー・ビー・ビー

「敵は一人だ！」

「直ぐにに駆除しろ！」

第12管理世界

フェディキア

都市からだいぶ離れた山岳地帯にその研究所はある

「こつちだー」

「死にやがれ！！」

バンバンバンバンバンバンバンバン！！

発射されるのは鉄の銃弾

「……………シールド」

銃弾が向かった先に銀色の魔方陣が展開される

カンカンカンカンカンカンカンカン

その魔方陣は鉄の塊を全てはじき返す

「撃て！撃ちまくれ！！」

ものすごい量の銃弾が発砲されるが全てシールドに遮られ、目標に当たる事はない

「……こんなミッドのお膝元みたいな世界に違法研究所があるなんて……」

身長は170中間ぐらいだろうか？シールドを展開しているのは銀髪で紅い目をした美しい女性、髪はショートカットで青と黒をモチーフにしたバリアジャケットを着ている

「私の任務はこの研究所の破壊と実験台とされている人と動物の保護です…貴方達は抵抗しないならマスターが助けてくれる可能性がありますありますが？」

「黙れ！おまえは此処が何かわかってしているのか?!かの時空管理局少将ラーズ様の研究所だぞ！次元犯罪者になりたくないんだったら大人しく帰りやがれ！」

時空管理局少将ラーズ、デブで黒い噂があとを絶たないどうしよもない局員だ、



「ありがとございます。わざわざ教えてくれて、おかげで探す手間が省けました」

その瞬間、20～30いる研究員の胴体に一瞬で銀のバインドが巻かれる

『!!!』

「一度だけ聞きます、投降するか、しないか」

「はっ！こつちにだつて魔導師はいんだよ！バインドぐらいでいい気になんな！」

「残念です……」

胴体にあるバインドが、光始める！

「バインド・バースト!!」

TT

バインドが爆発し辺りが煙に覆われる

血が、飛ぶ……

「可哀想な子供達を、助けに行きましょうか……」

女性が血だまりの中を歩き始める、そして…

プルッ

頭に現れる、とんがったフサフサな純白な耳

ペア

腰に現れる「九本の」またまたモフモフな真っ白い尻尾

「お…お前、使い魔か！」

奥にいて生き残った研究員が声を荒げる

「ちょうどいいです、実験室などにいる被害者達の所へ案内して下さい」

その1時間後…第12管理世界フェイクアの山岳地帯で大規模な爆発が起きた



## 第19話

### お財布と相談だ

「ティアナが朝と夜に自主練？」

「はい」

訓練場ぶつ壊して3日が経ちました、昨日の夜中に散歩してたらまたまたティアナ嬢が自主練してたから注意しようと近づいたら逃げられた…なぜだ？

もしや？と思つてサーチャーをそこに置いておいたらやっぱり朝も自主練してたわけで、あまりに休憩がないので許可降りてるかなのはさんに確認中

「うーん、わかった、こっちからは注意しとくね。ありがとう、ケント君！」

なのはさんが注意するんだったら大丈夫だろう。だけど、

「質問いいですか？」

「ん？どうしたの？」

「俺からみたティアナは明らかに焦っている、力に執着しすぎているんです。なぜなのかと疑問に思いました…」

ティアナは…焦っている。何かを追う様に、否、何かから逃れるように、

「アグスタ警備の時にしちゃったフレンドリーショットの事気にしてるのかな…あと、お兄さんのこと…」

ティアナのお兄さん？

そこからティアナの過去を聞いた。

ティアナには親はおらず、家族は兄しかいなかったこと、

兄はティアナの憧れで、一等空尉、名をティード・ランスターということ、

そんな兄が、任務中にしんでしまったけこと、

そしてその時にかげられた兄の上官の心ない言葉のこと、

「…プレッシャーになってるんですね…兄の存在感が」

「そつだと思っ…」

俺は目の前のココアを飲む…ん？リンディさん使用のココアだけどこか？

「それでも、無理して体を壊し、またミスなんてされたらたまらんですよ」

「うん」

ちなみになのはさんにココアを勧めたら断固拒否された、美味しいの…

「それと、考えもおかしい、ここは古代遺物管理部機動六課、今はロストロギアであるレリックの回収が目的であり強くなるために作

られた物ではないです、訓練の疲労のせいで任務に支障ができました  
だただの足でまといになるんです。

訓練はいいですが本来の目的を大切に、わかってますか？なのはさ  
ん？」

「じゃ！じゃははは」

わ、わかってるよそれぐらい」

目が泳いですが……まあいいか。

そのままわかれて俺は訓練場へ、シグナムさんの収束魔法、早く完  
成させないとな

side

はやて

「お腹すいたな」

「ですう」

「だ、大丈夫？はやて？」

あかん、この頃ちゃんとした物食べてへん、栄養が不十分なんはよ

うわかつとんやけど…

「お金がない〜」

「ですう〜」

「ほんとに大丈夫?!」

フエイトちゃん、心配してくれるならお恵みを……  
もう6時やし晩御飯の時間やな、今日の晩御飯は白米かな〜

「主〜〜」

ドタドタドタドタドタ

んっ?遠くからシグナムの音が…

バツコーン!!!!

「……………」 自分

「……………」 リイン

「……………」 フェイトちゃん

……………これは幻覚や、シグナムが部隊長室のドアを吹っ飛ばして入ってくるなんて考えられへん、  
夢やと思いたい。

「主!?!」

「なんや〜シグナム？」

デアボリック・エミツシヨンでぶっ飛ばしたいと思いつつも冷静に対応する私は偉い！賞賛に値するわ！  
こんなにシグナムが取り乱すことはそうそうないし、もし敵の襲撃とかやったらシャレにならんからな〜

「スカイが！」

「ケント君が？」

……またあいつが何かしたか？

「前線メンバーと隊長陣全員を、ミッドにある レストランで奢つてくれるそうです……！」

「ようやったー！！シグナム！！六課隊長陣と前線メンバーをすぐに集め！早速出発すんでー！」

レストランってミッドでも有数の超高級バイキングやんか！！シグナムが何したんかしらんけど奢ってくれるんやったら話にのらん手はない！  
ドア？それがどうした！

「ちよっ！シグナム？どういう事なの？」

「テストロツサ！お前もすぐに準備しろ！私達は腹が減って減って死にそうなんだ！」



s i d e

ケント

鬱だ……

なんでよりによって高級店なんだよ、2時間前の自分を思いっきりなぐりてえ

〈2時間前〉

「えっと、シグナムさん？」

目の前にはピンク色の髪をした物体が転がっている……

「シグナムさん」

「……………」

返事がない、ただの屍のようだ

試しに落ちていた気の棒でつついてみるが反応無し、だったら…

「模擬戦しましょうか」

ビクッ!!

「しよう!今すぐしよう!始めよう!」

「……………バトルマニア」

呼んでも起きなかったのに「模擬戦」と聞いた途端起きるとは…

「ですが残念です。収束が完成したらという約束でした」

「ぐっ、」

残念そうだけど仕方ない、その時、

ぐうううううう〜

「……………」

「……………な###」

あら、かわいい音がシグナムさんのお腹から

そのままシグナムさんは恥ずかしさから赤面してしまった

「えっと、なんか奢りましょうか？」

「……いや、いい、主やヴィータ、シャルルやザフィーラも我慢してるんだ。私だけ楽は出来ん」

八神家全員ですか…なんとなく、なんとなく誰のせいかわかる……まあ、お腹すいてるままも可哀想なんで…

「じゃあシグナムさん、こういうのはどうですか？」

「なんだ？」

シグナムさんが首をかしげる

「今日の練習で収束を完璧に出来るようになったら隊長陣プラスFW全員分俺が夕食を奢りましょう。場所は何処でもいいですよ。」

「本当か!？」

まあ、シグナムさんの収束はまだまだ酷いし今日中に終わる事なんて無理なんだが……

適当に練習して八神家の皆さんに食堂のカレーでも奢ろう。他の隊長達やFW陣は不公平にならないようにだけ

「じゃ、じゃああの有名な レストランでも……」

「なんでもいいですよ〜」

どうせまだまだなんですからね」

この時の発言を俺は5分後にものすごい後悔する事になる……  
まさか1発で成功だなんて……

そして今……ミッドに行く車の中

「本当に太っ腹やな」ケント君！」

はやてさんにはベタ褒めされるわ……

「あんなレストランに行けるなんて感激です」

スバルは目をキラキラさせてよだれ垂らすわ

「うっ……ありがとう。ケント君」

シャマルさんは空腹とおさらば出来るのが嬉しいのか泣き出すわ

「そんなにすごい所なんですかフェイトさん」

「ミッドでも美味しいって評判のレストランだからね」

フェイトさん一家はその話で盛り上がるわ

「…ちて」

お財布と相談だ

第20話

魔王降臨！？

（  
・  
1111）（前書き）

ものすごいグダグダです

途中から何言いたいのか全くわかりません

それでも良い方は見て下さい

第20話

魔王降臨!?

(。・111)

「……………」。

>……………  
……………<

こんにちは、現地リポーターのケントです　キラッ・・・  
すみません、調子のりました、19の男がやったら気持ち悪いだけ  
ですよ

さて、今私は機動六課の訓練場に他の隊長達と一緒に来ています。  
なんとも今日は六課のスターズとライトニングに別れてなのはさん  
と模擬戦らしいです  
ん？なんで最初「…」で始まったかって、それは…。

「私は…………もう、誰も傷つけないから!!失くしたくないから  
!..!」

「……………」　ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ　(なのは様)

「だから、だから強くなりたいんです!..!」

「少し…………頭冷やそうか」

なにこれ？（；。；；

〈今朝〉

起床、パンを口にいられてからデスクワークへと

〈昼〉

デスクワークがなかなか終わらず軽い休憩と一緒にラーメンをすす  
る、午後からの模擬戦をなのはさんに遅れると連絡、

〈今〉

シーザーに手伝ってもらいなんとかデスクワーク終了、急いで訓練  
場へと、模擬戦始まったからヴィータさん達がいるビルの屋上へ  
と移動、「遅れました」的な事を言ってみたら全員無視……少し  
凹みながら模擬戦に目を移すとティアナ死亡フラグ、そして魔王降  
臨………なんで？



「クロスファイア……」

「うあああああああ！！ファントムブレ………」

ん？あれって砲撃？

……まあとりあえずティアナ  
事情を知らない俺が介入したらややこしくなるんで……

「シユート………」

なんか怒られてそうだから、それぐらいはくらっとけ

ガガガガガガ！！

これで終わりか………  
面白くは無かったな……

「ティアア？！」

「バインド？！」

……はい？

ウイニングロードの上にはバインドされたスバル、なんで今更バインドされる必要がある？

そしてフラフラで半分意識がないティアナ

ティアナを見たまま無表情に新たなクロスファイアを生成するなのはさん

だいたい今の状況は理解できた

185

「オーバーキルだな……介入する理由ができしまった、シーザー？」

>わかってるわよ<

「それじゃ」

「>セットアップ<」

s i d e

ティアナ

認めてもらう

それだけだった

そのために疲れた体に鞭を打って朝、夜と自主練をした

天才やエースばかりの部隊で認めてもらうには努力するしかない

自分がここに在る為には、努力するしかないのだから

けどその結果がこれ……

なのはさんを怒らせ、撃墜寸前、意識はもうすぐきれるだろう

目の前で2発目のクロスファイアがなのはさんの指先にためられる

避ける気力は……ない

静かに目を閉じる

だけど、待っている衝撃は……来ない

薄れゆく意識の中で最後に見たのは

自分の上司である小さい青年だった

side

第3者

ギャラリーは目の前で起こった出来事に目を見開く  
なぜなら今さっきまでギャラリーにいた青年が一瞬でこちらに現れたのだから

さらに砲撃型のなのはが放ったクロスファイアを全て「斬り裂いた」のだから……

「邪魔しないで、ケント君……」

クロスファイアを放った張本人、なのはは静かに、だが周りにいる人間を震え上がらせる声で青年……ケントにつぶやく

「俺は途中から見ていてティアナが何しでかしたかは知りませんが、明らかなオーバーキルです。

少し冷静になって下さい、あとスバル！」

ケントはウイングロードの上に立っている青髪の女性、スバル・ナカジマに声をかける

「ティアナを医務室まで運んでくれ」

「えっ？でもバインドが……ない?!」

スバルはさつきまで自分を縛っていたバインドが外れている事に驚愕する、いや、バインドは外れたのではなく「斬られていた」  
そして……

「こいつを頼んだぞ」

次はティアナを抱えたケントがスバルの前にまたしても「現れた」  
スバルは驚きながらもティアナを受け取り医務室に走って行く

「余計なこと…しないで!!」

ガガガガガガガガガ!!

なのはから10発の魔力弾がケントに向かって放たれる……だが

シャシャシャシャシャシャシャシャシャ

ケントはその全てを「叩き斬った」

少しの間両者共に無言になる

なのはは自分の魔力弾がいつも簡単にかき消された事に驚きを隠せない

「それがなのはさんの教導ですか？」

無言の時間を破ったのはケントだった  
彼は静かに、優しくなのはに問いかける

「うん……だから邪魔しないで」

相変わらずの無表情でなのはは質問に答える

「教導官でもなんでもないケント君が私の教導に出て来ないで」

彼女は冷たく言い放つ、だがその瞬間

「寝言は寝て言え、高町」

ゴウッ！！

不可視の風がふく

青年……ケントを纏う雰囲気が変わる

なのはは動かない、否、動けない

レイジングハートを持つ手は震え、一瞬の内に体は汗をまとう

風に乗って来たのは尋常じゃない「殺気」  
体にかかるのは「威圧」

「自分と考えが違い、気に入らない下の人間には力で捻じ曲げる？  
はっ？笑わせんな」

カツツ、カツツ、と一歩、また一歩とケントはなのはに近づく  
なのはは……動けない……

「そんなもんだだけの支配だ」

ケントがなのはの目の前に立つ

「ティアナが何したかはわかんないけど」

顔を近づける

「十人十色、十人いれば考えはみんな違う、相手の全てを力で否定  
するな……悪い所を変えられるように努力しろ、完璧な人間なんてい  
ないんだからな、助け合わなきゃいけねーだろ？」

何時の間にか殺気は収まっている

「あいつが目を覚ましたら2人でお話したらどうですか？今回の事  
を通じてなのはさんも何か学べますよ」

そう言っつていきなり「お姫様抱っこ」し始める  
これにより、なのはの脳は半分正常に動き始める

「へ？はにゃ？はにゃあああああああ？！」

「体ちゃんと動かないでしょ？ギャラリーまで連れて行きますから  
そこからは歩いて下さいね」

「大丈夫だよ！歩ける歩ける歩ける歩ける！！」

余談だがギャラリーについた直後にケントはフェイトにバルディッ  
シュでホームランされた

side ケント

………いてえ

なぜかバルさんでのホームランくらって現在部隊長室

「これが何なんか説明してくれるな？」



わかりましたわかりましたはやてさん、だからその右手に持っているシュベルトクロイツ閉まってくれませんか？

この子狸……………ゴホンゴホン、はやてさんが知りたがっているのは今日みんなの前で見た「閃光」の事……………

アグスタの時の戦闘映像では上手く誤魔化してばれずにすんだが…

…ハアorz

あれ見せたら転移魔法とかと勘違いされるんだよね

実際消えて現れた様にしか見えないし

～説明中～

「ほんならそれはケント君のレアスキルになるんやね」

「まあ……………はい」

「それやったら私やなのはちゃんなんかは天敵やな」

そうですね～お2人は移動砲台ですから自分の懐に入られるのを嫌がりますからね

俺の能力でしたら発射する前に撃墜ですから、それで……………

「なぜ、わたくしは正座をさせられているのでしょうか？」

「ん？今の今までそんな事を報告せんかった罰よ〜」

その笑顔が怖いです

「お説教スタートや」

「や〜め〜て〜」

side はやて

「謎や……」

今日のケント君の行動を映像で見るとあのエースオブエースの攻撃をいとも簡単に無力化する姿が映し出される。だが、いくら「閃光」という能力を使ってもここまで無力化できるものなのか？

「クロノ君はクラウディアで主張中やしな〜」

結局はケントについて聞ける人物は今いないのだ  
クロノに迫り聞き出す寸前だった時はケントが行方不明になり結局

聞けなかった

通信で聞こうにも機密事項なので万が一ハッキングなどされていれば洒落にならないので無理

その時

ー警ー

「考え事は一旦中止や！お仕事モードに切り替えるで〜」

彼女は自分に喝をいれ、仕事場へと向かっていった



第21話 クロノの思い(前書き)

短いです、すみません

## 第21話

## クロノの思い

こんな時にアラートとか空気読めよスカ野郎

そんなわけをただいま痺れた足に鞭を打ちながら絶賛移動中です。  
はやてさんは説教キャラが定着してるのでしょうか？

「ギ……ギギ……」

ベリベリベリ……

「いつてー！」

>早く行かないとまた怒られるわよ<

「わかってる……わかってるんだけどよ」

無理じゃね？飛んでいいかな？部隊内で…なのはさんから O H A  
N A S I I くらいそつだ

「あー！ケントさん！？こんな所にいたんですか！」  
ん？

「なにしてたんですか！隊長達行っちゃいましたよ！」

「……………あ！シャリオか……………」

「何ですかその間は！」



シャリオモといシャーリーに聞かされたのはなのはさんの過去、ジーンとくる話だったけどプライバシーの事考えましようねシャーリー（こつ呼べとうるさい）

あれから帰って来たなのはさんとよく話したらしい、俺は盗み聞きしてた愉快なカラフル頭のちびっ子達を縛り上げたただけでなに話したかは知らない、まあ今度は大丈夫だろう。

じゃあ、

おやすみなさい



side

クロノ

「ステインガー・レイ!!」

ガガガガガ!

「ぐう」「くそがー!」「うわー!」

研究員を10人ほどふっ飛ばす、もちろん非殺傷設定なので死んではいない

「ディランダル!」

まだ20〜30人はいるが、これで決める!!

「ステインガーレイ・エクスプロージョンシスト!!」

100を超える刃が研究員達を貫く、これでおわりか?

「うおおおおおおお!!」

「くっ!!」

>ボス!!!<

死角からの斬撃……間に合わない!

ガキーン!!

「なっ!」

目の前に純白のミッド式魔方陣、恐らくは彼女の「遠距離プロテクション」

「シールドだと?! なっ、バインド?!」

研究員にかけられる腕と足を拘束するバインド、

キイイイイーン……

そのバインドが光始める……!!

「まで! 殺しては駄目だクオン!」

僕が叫ぶとバインドの光はだんだんと小さくなる

「最後に気を抜くからそんな事になるのですよ、クロノ提督」

草履のようなものを履いてこちらに近づいてくる彼女、クオン……  
彼女の頭には真っ白な毛が生えた動物の耳が付いており、お尻の辺

りにはこれも真つ白な九本の尻尾が付いている

「殺しはしてはいけなйдろ！君のマスターからも注意を受けている筈だ！」

「それが殺されそうだった貴方を助けた恩人に向けての態度ですか？」

「それについては礼を言う、おかげで助かった、だが！」

「こんな奴らは更生なんかしても無駄ですよ、こいつらのせいだけでだけ人間や動物が殺されたか……」

クオンは違法研究者を嫌う、実際第12管理世界フェディキアの時も研究者達を皆殺しにしてる、だけど

「それで、これで全員ですか？何なら私がここで殺しておきます」いや、僕は君とは違う、この人達は管理局で法によって裁く……勝手にして下さい、私は先にクラウディアに戻っておきます」

第103管理外世界の違法研究所の職員は全員逮捕、実験台とされた拉致被害者の生存者0名、管理局上層部が黒幕の疑いあり……と

僕は自分の砲撃で空いた穴から空を見上げる

思い描くのは自分の親友、

自分の運命に縛られ、羽ばたく事が出来ない命の恩人

かつて白い少女が一人の少女の運命的を変え、助けた様に

僕も彼を助きたい  
なあ

「ケント……」

第22話 機動六課のある休日 1

いきなりだけど今日一日休みだ……………休みだ……………休みだあああああ!!!

「ちよつ！いきなりどうしたん!?」

「休みですよ休み！俺が六課に来てから休みなんて一日も無かったじゃないですか！ワーカーホリックにもほどがあります！」

魔王が降臨してから数週間が経ちました、相変わらず訓練、デスクワーク、訓練、デスクワーク、訓練……………と、「休日？なにそれおいしいの？」みたいな日々を乗り越えた自分に賞賛をおくる！えっ？お前はアグスタの時寝てたじゃないか？そんなもん知るか！……………

「えつと、まあ今日一日ゆっくりしてな」

はやてさんがなんか苦笑いしてるが無視無視、今日一日なにすんなにする？よし！今日は一日寝よう！グダグダ過ごす、これ決定！

> だったら私のメンテいけるわね <

こやつは一体なにを言っておる……………

「我輩に本局へ参れともうすか？」

> 当たり前じゃない、もう四ヶ月くらい行ってないじゃないの「



……いや……でも、

「もちろん拒否権なんかありませんよ！相手が私より下だと思った場合はシーザーのメンテナンス、ちゃんとさせてもらいますからね！」

……はい……。

ギユウウウウウウウ

ん？なんか風を切る音が、

ガシャン！ドカアアアアン！！ 新しく付け替えられたドアが破壊される音

「……。」「」 俺、はやてさん、シヤリオ

「いくらシャーリーでも抜け駆けはゆるさないよ！！」

「なっ！？フェイトさん？！私はそんなんじゃないですよ！デバイスマイスターとしての職務を果たそうとしているだけです！着いていくと言っても今回だけです！」

「そんな事はわかってるよ！でもダメー！！」

「ああ……ドアが……ドアが……」

シヤリオもフェイトさんもなんで話し聞こえてるんですか？シヤリオは辺りにあるもの投げない、フェイトさんはバルさん振り回して

はいけません、はやてさん……頑張れ。

まあ今俺が出来る事は、

「逃げよ、」

>私も賛成<

触らぬ神に祟りなして言うからな

で、

「結局こうなのかよ」

本局に行くにはそれ用の転送ポートがある場所に行かないといけない  
そこに行く時、電車を使おうとしたのだが…

「そのデバイスマスターはどんな人なんですか！いつから管理局  
に！」



後ろに座ってるシャーリーは敵対心バリバリだし

「シャーリー、あまり相手に迷惑かけちゃ駄目だよ」

なぜかフェイトさんがついてきてるし、しかも車だしてくれたし

あとフェイトさんの話によるとFW陣も今日は休みらしい、なんでも今日の訓練が第二段階クリアの見極めテストだったんだと、ついでに俺が教導してるシグナムさんはいぶ上達した、訓練場はもう破壊しないだろう、今は実戦を踏まえた強化中というところ、日に日にシグナムさんが「模擬戦をしよう!」と言ってくる回数が増える感じがする。収束魔法が完成したらするって約束だったからな

「とにかく!私より技能が少しでも下だったら変わってもらいますからね!」

……鬱だ

ムムム

「んっ」

全体通信、発信したのは…キャロか

s i d e

スカリエッティ

「レリックのもとにたどり着いたローンの反応が、全て消滅しました」

とうとう来たね、ああ嬉しい、自分でも笑っているのがわかる

「やったのは局の魔導師かい？それとも「当たり」をひいたのかな？」

「確定できませんが、恐らく後者だと思います」

とうとう来たのだね、器よ

「素晴らしい！早速追跡するでしょう」

「ドクター、「当たり」がでただったって？」

「おや？ノーヴェ、耳がはやいね」

私が作り出した戦闘機人No.9、ノーヴェ、彼女もまた、私の計画を行うための駒の一つ

「それなら私も出たいんだけど」

「駄目よノーヴェ、貴方の武装はまだ調整中なんだから」

「今回の「当たり」なら、自分の目で見てみたい」

彼女の気持ちもわからんではないがね、だが

「焦らなくても、あれは必ず私たちの元へくる、今回は待っていてくれないかな？」

貴重な駒を失いたくはないんでね

「わかったよ、ドクターがそう言うなら」

「すまないね」

さあ、

ショーの序章だ!!

彼は知らない、

自分を超越る人間が、

世界にはいると言う事を……

s i d e

? ? ?

「あーめんどくせえ」

ミッドチルダの裏路地に一人歩く男がいる

彼の後ろには何処の世界でもいそうなチンピラが転がっており、ここで殴り合ったことがわかる

本当は綺麗な筈な金髪はボサボサで、しばらく手入れをしていない様に思える

年齢は、17、8くらいか？

「表の世界の王様なんかになんで興味があるんだろうねー親父は」

そう愚痴お言い、チンピラから「奪った」財布を自分のポケットにしまう

「いるのかねえ」

一度大きな背伸びをし、言い放つ

「この「雷神」を楽しませてくれる存在は」

そう言い青年は、ニタリと笑い

飛びたった







「うん、バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし……心配ないわ」

シヤマル先生の言葉でみんなが胸をなでおろす

キヤロの通信を簡単に説明するとミッドを歩いていたら不思議な物音が、駆けつけてみるとレリックに繋がれた金髪幼女発見。ただケースは2つなのにレリックは1つしかないことからもう1つは地下水道に落ちている可能性大、それにつられてガジェットがくるかもしれない。

と、いう感じだ

なので機動六課が緊急出動、俺たちはそのまま車で、なのはさん達はヘリで合流した

「ごめんね皆、お休みの最中だったのに……」

全くだ、メンテと言っても午前中には終わらせなかったのに……

「次はゼー……たい検証しますからね!!」

シヤリオうつさい、今それどころじゃねーだろ、まあ十中八九ガジエットは出てくるな、あと……この金髪幼女……

ボロボロの服に足の鎖、恐らくは違法研究所の……

「ケント隊長？聞いてる？」

「ん？ああ、すみません」

やっべ、全然聞いて無かった。

「はあく、それじゃあみんな、ケースとこの子はヘリで護送するから、みんなは現場調査お願いね」

「……はい！」「……」

下水道の方にはFW陣が逝くのか……ん？字が間違ってる？臭い下水道なんだからこつちのほうがいいだろ？

そんなくだらない事考えてたらグリフィスからの通信がきた

『ガジェット来ました！地下水路に数機ずつの構成で総数16……20！海上方面、12機単位が5グループ！』

やっぱ来たか、しかも海上方面もあるとかだるすぎんだろ、休みだったから余計に、それに地下水路の制圧をこれだとFW陣だけではないといけなくなる。人手不足か……

『ロングアーチへ。こちらスターズ02』

ヴィータさん？

『海上で演習中だったんだけどナカジマ三佐が許可をくれた、今現場に向かっている、それともう1人……』

『108部隊、ギンガ・ナカジマです』

なんか隊長達やスバルなんかがビックリしてるが……だれ？

『別件調査の途中だったのですが、そちらの事例とも関係ありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか？』

『うん、お願いや』

まあ人数が増えることに越したことがないしな、それに「ナカジマ」と言っただくらいだからスバルの姉かなにかなだろう、ひとまず人手不足は解消つと

「さて、皆。短いお休みは堪能したね？」

「お仕事モードに切り替えて、しっかりやっていこー！」

「……はい！」「……」

F W達の元気な声が響く、ん？そういえばクラウドディアってもう帰って来てるんだったよな……

「一様保険として呼んどくか……」

そう思い、俺は通信をいれた

s i d e

3人称

とあるビルの一角に一人の少女が紫色の髪をたなびかせながら佇んでいる、年齢的にはエリオやキャロと同じくらいだろうか  
少女が静かに目を閉じるとモニターが現れ、一人の女性が映し出される

「へりに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。お嬢様は地下の方を……」

少女は何も言わずに目を開ける、

「騎士ゼストとアギト様は？」

「別行動……」

「お一人ですか？」

「一人じゃない」

少女がデバイスを使うと目の前に黒い何かが召還される

「私にはガリユールがいる」

「失礼しました、協力が必要になりましたらお申しつけ下さい、最優先で実行いたします」

「うん」

モニターが消え、少女は黒い何かに話しかける

「行こうか、ガリユール、探し物を見つけるために」

少女の周りに魔方陣が展開され、彼女は「消えた」

side ケント

「私が呼ばれた事故現場には、ガジェットの残骸と壊れた生体ポッドだったんです。ちょうど、5〜6歳の子供が入るくらいの。」

近くに何か・・・重いものを引きずって歩いたようなような跡があった、それを辿って歩いていこうとした最中に連絡を受けた次第です」

ギンガと呼ばれる女性から説明を受ける、

「それにこの生体ポット、少し前の事件で見たことがあるんです」

「私も……な……」

2人の声が沈む、当たり前だろう、俺だって一つ、思い当たるものがある、それは……

「人造魔導師計画の……素体培養器」

1番当たってほしくないのか、まったく……

「これはあくまでも推測ですが……あの子は人造魔導師の素体として造りだされたのではないかと……」

ブチッ！！

俺は念話を切った、これ以上聞かなくてもいいだろう。それに……俺自身を抑えられなくなる

今はフェイトさんとなのはさんで海上のガジェットを制圧している、制圧し終わるのは時間の問題だろう

ちなみに俺はへりの護衛だ

その時、事態は急変した

「航空反応、増大!!」

「これ……嘘でしょ……」

ロングアーチからの通信……マジだ、なんかどんどん増えてやがる

「シヤマル先生!俺も出ます。へり任せました!ヴァイス、しっかり操縦しろよ!」

「わかったわ」「了解つす旦那!」

いい返事!

俺はセットアップしてへりから出ようとする。その時……

パリパリパリ……

……なんだ?

一瞬だけ何か聞こえた……電気?……っ!!

ズドオオオオオン!!!!

へりに向かって晴天の空から「雷」が墜ちた！

「閃光」があつたからとつさにシールドをはれたが、くそ、へりは

……なんとか無事か……っ！！

そして第二波！！

「うおおおおおおおー！！」

ショットオンムーブ！！

俺は雷を「斬り裂いた」

魔力による斬撃と衝突し、爆発を引き起こす、やはり、魔導師か  
だがこの電力、人がだせるものじゃないぞ！！

「ヴァイス！！直ぐにここから離れる！出来るだけ遠くへ！！」

「りよ、了解！」

相手は電撃の性質変化を持つ魔導師、さらにはさっきの雷はゆうに  
フェイトさんの2〜3倍の威力、くそ、悪い予感しかしねえ

煙がはれる

目の前にいるのは17〜8歳くらいのボサボサの髪をした金髪の青年



青年は口を開く

「えっと……ああ、始めましてだけ？」

裏切り者の兄さん  
「





第24話

機動六課のある休日 3 (前書き)

むっさ短いです

## 第24話

## 機動六課のある休日 3

side

3人称

「俺はお前を弟にした覚えが無いんだが……」

ケントは冷たく金髪の青年に言い放つ

金髪の青年は一度小さくため息をしてから口を開ける

「そりゃそうだ、兄さんが裏切った時はまだ俺は「選抜中」だったからね、兄さんが知らないのは不思議じゃない」

そう言つて青年は杖の様なデバイスを機動させる

デバイスはアームデバイスらしく何かを話すことがない

「そう言つことはお前も「王の血」を持つてんのか？」

「いや、俺は兄さんみたいに特別じゃない……あるのは、これだな」

青年がデバイスを前に出すと

パリパリパリ……

「電撃の性質変化……」

「いいや、俺のは性質変化なんてもんじゃねーよ」

「は？」

魔力を氷や炎、雷などに変える事を「性質変化」という、現に六課ではシグナムは炎熱系の性質変化、フェイトやエリオは電撃の性質変化を操る。

だがもとも魔力だった物を別の物に変えるのは限度があり、一定以上の威力は望めないのだ。

なので主に攻撃魔法の補助として使われる事が多い

だが性質変化以外の方法で魔導師が「自然の力」を操れるというのは管理局の歴史上存在しない。

「兄さん達……いや、俺達魔導師はリンカーコアから魔力を放出し、攻撃魔法や防御魔法、またまた回復魔法や補助魔法を使っている。だけどこんな考えはどうだ？」

お互いがデバイスを構える

「リンカーコアから放出するのが魔力以外のエネルギーにしてしまつたら」

「……と、言う事は、お前のリンカーコアから発生してるのは魔力ではなく、雷だと」

「まあこうやって空を飛んでる訳だし、全部が全部ってわけじゃないんだけどな」

ケントは片手で頭を抑えながらつぶやく

「全く、あいつが考えそうな事だ……ここに現れた以上、目的があ

るんだろ。あと名前、なんだ？」

「まあな、俺がここにわざわざ現れたのはこっちの王が見つかったから回収しに来た、本当はさっきのへりと一緒に一番やっかいな兄さんたおしておきたかったんだがね」

「こっちの王？」

「おっと、これ以上裏切り者に話す事はないよ」

「だろうな」

二人は戦闘準備にはいり、名乗る

「時空管理局本局所属二等空尉、ケント・スカイ」

「No.6、「雷神」、ボルス」

「勝負!!」

s i d e

なのは

私は今、フェイトちゃんと一緒に現場の北西部海上でガジェットと交戦している

「シューート!!」

何体か爆発する、だけど……

「やっぱり……」

スファイアが当たっても爆発せずに消えるだけ……

幻術と魔法の交戦編隊、かなり巧妙で見分けがつかない

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、ちょっとキリがないね」

明らかに敵の戦力が集中している、そうなると狙いは……

「地下か、へりに主力が集まってる」

だろうね、へりはケント隊長に任せただけ……ロングアーチからの連絡によるとケント君は今、正体不明の敵と戦闘中、今のへりは無防備ということになる。どうしよう……



「なのは、私がここに残って抑えるからヴィータと一瞬に！」

「フェイトちゃん?!」

ダメ!いくらフェイトちゃんでもこの数相手にリミッターかけたままなんて危険だよ!!

「コンビでも普通に空戦してたら時間がかかりすぎる。それに限定解除すれば広域殲滅で見分け落とせる」

「それは……そうだけど……」

それでも、一人残していけないよ……

「なんだか、嫌な予感がするんだ」

「でも……フェイトちゃん……」

『割り込み失礼!!』

「いや?!はやてちゃん?!」

『ロングアーチからライトニング1へ、その案も限定解除も部隊長権限で却下します』

あれ?

「はやて?!」

「はやてちゃん?なんで騎士装甲?」

はやてちゃんは戦闘には参加しない筈なのに、

『悪い予感も私と同じでな、クロノ君から限定解除の許可をもらった、空の掃除はわたしがやるで、なのはちゃんはへりに、フェイトちゃんはケント君の応援に行ってもらうで!』

な、なんかノリノリだね、はやてちゃん……

『書類仕事や頭硬い上司に向けて、たまりに溜まったこのストレス……ぶつけさせてもらおうわー!』

それが本音なんだね、はやてちゃん……まっ、でも……

「行こう!フェイトちゃん!」

「うん!なのは!」

出来れば、何も起きないで欲しいの

僕は今、ケントと「雷神」との戦いを聖王教会で見ている

「やはり、動き始めたのですね」

そうつぶやいたのは騎士カリム、「奴ら」の事を知る数少ない人間であり、聖王教会の権力者でもある  
モニターに映るのは二人の戦闘、だが……

「なんなんだ、これは？」

「雷神」の周りを流れる電気電気電気電気電気電気電気電気電気電気電気電気電気電気電気電気……はつきり言って異常だ。

普通の魔導師では制御不可能な電撃をいとも簡単に操作する。

「自然の力」をいとも簡単に操る魔導師か……」

ケントは大丈夫だと思うが自分も飛び出したくて仕方が無い、なんとって「親友」なのだから

「心配ないですよケント様なら」

カリムの言葉で冷静さを取り戻す。  
今から行っても間に合わないんだ、それに「彼女」も現場に向かっている

「負けるなよ、「最強」」

僕は小さくつぶやいた

第24話

機動六課のある休日 3 (後書き)

ちなみにボルスはスカさんとは全くの無関係です。  
No.6といってもセインはちゃんといます。

第25話

機動六課のある休日 4 (前書き)

今回が一番長いのではないか……

## 第25話

### 機動六課のある休日 4

「一千万ボルトオオオオオ!!」

オッス!オラゴク……調子乗りました、すみません。

残念ですけど俺には、かはめ波なんて出来ませんしスーパーサヤ人にもなれません。

>馬鹿な事考えない!<

「なぜばれたし……うおっ?!」

やっぱり強い……自分から「雷神」なんて厨二臭い事言っただけ、  
実力は確かだな……

ノータイムでディバインバスター並みの雷撃砲撃とかがあり得ねーだ  
ろ!!!

「クソオ」

金髪の青年、ボルスはだんだんと苛立ちの声を出す。

彼の周りにはバチバチと電気がはしっており、少しでも触れたら感電し、動けなくなる。はつきり言って人間が避けられる様な動きはしておらず、不規則に動いている。

だがケントはいとも簡単にそれらをかいくぐる。

「やっぱり厄介な能力だな、「閃光」は」

ケントの希少能力……「閃光」、人間では反応出来ない高速の世界についてゆき、又、人間では介入不可能なスピードを持つ事が出来る能力

そのうちの一つ、「限界の反射神経」を使い雷を全て避ける。

ボルスが不意打ちで撃つ雷を固めてノータイムで撃ち出す砲撃もケントには当たらない

強力な能力な分、コストもあるのだがまだまだ大丈夫なんだろう、さつきからボルスの攻撃パターンを観察している様にも見える。

ガッ！

「なっ！」



いきなりケントがボルスの前に現れ斬りつける。  
だがボルスも紙一重で攻撃に反応してデバイスで受け止める

「あまい!!」

ケントの後ろに3つのスフィア

「ファイア!!」

「雷神壁!!」

ボルスの目の前に雷の滝の様なものが現れケントのスフィアとぶつかり爆発する

その爆発によって両者が見えなくなるが……

「ショットオンムーブ!!」

「六千万ボルトオオオ!!」

魔力の斬撃と砲撃がぶつかり合い先ほどとは比べ物にならない程の爆発が起こる

side

ケント

あぶねーあぶねー

あんな砲撃くらったら死ぬよ、間違いなく死ぬよ

なんなのこいつ、常磐台の超電磁砲？それともワ　ピースのエル  
さんだったりするわけ？！

>つまんない事考えんな！<

おっと、デバイスに怒られちまったぜ

それにしてもこいつ、強い…………

さっきもよけながらチャンスを探して攻撃したけど反応できたとは  
な…………

俺と同じのがよくわかる。

それより「限界の反射神経」の使い過ぎで頭が痛い、脳に負担かけ  
過ぎたか…………

さて…………

「終わりにしますか！！！」

現場から離れていない廃墟ビルの屋上に2人の影が見える。

2人とも青いボディースーツに身を纏い、上からマントを羽織っている

大きなお友達には泣いて嬉しがられる格好だろう

「デイエチちゃん？ちゃんと見えてる？」

どちらも茶髪だがメガネをかけた女性がもう一人に声をかける  
もう一人、デイエチと呼ばれた女性は髪の後ろをリボンで結び、マントを風になびかせ、自分より大きな黒い「何か」を構えたまま、ある一点だけを見つづけている

「ああ、遮断物もないし空気も澄んでる……よく見える。」

デイエチが見続けている点、それはへり……

「でもいいのかクアット口、撃っちゃって？ケースは残るだろうけどマテリアルの方は破壊しちゃう事になる」

デイエチがメガネの女性、クアット口に確認をとる

「フッフ、ドクターとウーノお姉様曰く、あのマテリアルが「当たり」、つまり「聖王の器」なら砲撃くらいで死んだりしないそうだから大丈夫、それよりも余計な邪魔が入る前に終わらせましょう」

クアット口はそう言ってケントが戦闘をしている方向を見る

「もともとはトーレお姉様に時間稼ぎをお願いするつもりだったんですけど……あのビリビリ、なんなのでしょう?。」

「わからない、でもドクターは今頃、計画そっちのけで解析してるだろうね」

2人して苦い笑みを浮かべる。

スカリエッティは自分の分からない事が起きると周りが見えなくなる様な人間だ。

今頃はウーノ姉が苦勞してるんだろうなと2人してつぶやく

その時にそのウーノからの通信が来た

『クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギト様g「ウーノ！私はこの少年（ガチツ！）ぐえっ！」ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まっただわ』

「えっと……あゝあ、そういえば例のチビ騎士に捕まってましたね」

後ろでスカリエッティがウーノに犬の様な鎖で繋がれていたのをとりあえず2人は無視した

「今はセインが様子を伺っているけど……」

「フォローします?。」

『ええ、お願い』

2人は自分の製作者の性格にため息をつきながら支持を送った

s i d e

ケント

「チィ！」

「くそっ！」

スフィアを展開してボルスに向かって飛ばすが彼は雷で全て相殺する……くそっ！

相手も肩で息をしてるし俺も頭痛や空気抵抗での体の痛みとかで結構やばいぞ

だけど……この勝負、勝った！！

「五千万」

行くなら……

「ボルトオオオオ！！！」

今！！

俺はボルスの砲撃のスレスレの所を「超速移動」によって間合いを詰める。

やっぱり使い過ぎたせいで体中がいてえ

「なっ！？」

驚いてる驚いてる……

「てめえは大技を使った後、必ず1秒間何も出来ない時間がある」

おそらくは「充電時間」かなんかだろう。

こいつにとってはたった1秒なんだろうけど……

「クソオオオオオ！！」

俺にとっては「1秒も」なんだよ！

「ショットオンムーブ！！」

ボルスを斬撃が飲み込んだ………

side

3人称

「ハアハア」

ケントが肩で息をする。目の前には煙が立ち込めている

「やっぱり使い過ぎはきつい「ケント!!」「フェイトさん?」

ガジェットの殲滅に当たっていたフェイトが近づく

「……やったの?」

「わかりませんよ、結構タフな奴でしたから……なのはさんは?」

「なのはならへりの方に向かったよ」

ケントはよかったと内心安堵する。

突然の攻撃を防いだとはいえへりはノーガードだったのだから

「非殺………傷?」

煙の中から聞こえた声にケントは信じられないような顔をし、フェイトはバルディッシュを構える

そこにいたのはポロボロになったバリアジャケットをまとったボルス……彼は信じられない物を見たように自分の斬られた所を見る……

「そこまであまくなったのか？兄さんは？」

「お前を殺す理由なんてねーだろ」

ケントは再びシーザーを構え直す

「兄さんや俺はは選ばれたんだ、神によって……なのに……なんで？」

「兄さん？」

フェイトボルスの「兄さん」という言葉に反応してケントに問うが、ケントは答えない……

「……もういいや、兄さんはそっちにつくんだね。だからもう敵」

ボルスの目が本気になる、その目を見てフェイトは硬直する……あれは……



## 人殺しの目

多くの犯罪者を見てきたので直感でわかる。

あの子はやりかねない、本気で殺しにくる……………」と

「みんな信じてたのに、「カナ」だって……………」だけでもうあなたは、昔の兄さんじゃない、もう俺たちとは違う……………」

ボルスの周りに信じられないほどの雷が渦をまき、そして一つに固まる

「さあ、死んで……………」兄さん

「三億ボルト 雷竜」

雷の竜が、そこにいた

side 機動六課

機動六課管制室に、けたたましいサイレンが鳴り響く

「市街地に二つのエネルギー反応！……なにこれ？どっちも大きい！！」

「うそ……そんな！？」

巨体すぎるエネルギーが同時に二つ、管制室は驚愕する

「片方の砲撃チャージ確認!!」

「物理破壊型、推定Sランク!!」

「もう一つは!」

この場を任されているグリフィスが声を荒げる  
そしてモニターに映った物を見てまた驚愕する

「なんなんだ……これは……」

「竜……でしょうか……」

人など簡単に飲み込んでしまいそうな大きさの雷竜……それをケン  
トとフェイトの二人で相手をしている

「なっ!こちら側も推定ランクS!!」

「なんだと?!」

おそらく砲撃の方はヘリの方を狙っている、だが雷竜をリミッター  
をつけている隊長二人で相手する事も出来ない……だが、まだなの  
はさんが……

「うそ……でしょ……」

「どっした」

いきなり震え出したロングアーチの女性に、グリフィスが確認中を



「はああああああ!!」

フェイトさんがボルス本体にザンバーフォームで斬りかかるが雷竜に邪魔されて近づく事が出来ない

それに俺は閃光を使い過ぎたせいでろくに動けていない、体は動かねーわ頭がガンガンして意識飛びそうだ

「そうそう、兄さんにいい事教えてやるよ」

突然ボルスが口を開く

「兄さんに会いにくる途中ね、全身青タイトスの女の人を2人みたんだよ。なんだったのかな」

ボルスはさも楽しそうに話すけどケントは頭に?マークをあげている

「そのうち一人がなんか大きい袋もってたんだよ、いや、なんだったんだろ」

何か嫌な予感がする……ケントは直感で感じ取る「こんな所にいる場合ではない」と

「あれってもしかして、

魔力砲じゃないかな」

ケントは飛び出す！

だが雷竜が先にゆくのを拒む

『砲撃のチャージ確認！！』

ロングアーチから聴こえてくる声、フェイトも理解して離脱しようとするが……出来ない、

「邪魔するなああああ！！」

ケントの雄叫びの様な叫び声をあげる、そして……

遠くで爆発音がした……

「ハハ、へり爆発しちゃったね、残念残念」

「きさまああああ！！！」

フェイトがボルスを睨みつけるがボルスは平喘とした顔で言い返す

「したのは俺の仲間じゃない、部外者だ。勝手に罪をなすりつけないでほしいな」

笑が止まらないらしい、ボルスは必死に口元を隠している

「結局は誰も救えないんだよ！仲間も、自分自身も！！なあ、兄さん！」

だがその時、

ケントが小さく笑った

「なにが可笑しいんだよ」

フェイトも気持ちの整理が落ち着かないのか「えっ？」という顔に  
なっている

ケントは静かに向き直る

「今回は俺達の勝ちだ、なあ

クオン」



へりの煙が晴れるとそこには

三重に重ねられた魔方陣が展開していた。





第25話

機動六課のある休日 4 (後書き)

なんか神に選ばれたとかでてきましたがケントやボルスは転生者ではありません

あと 六億ボルト 雷竜 はぶっちやけバオウ・ザ  
ルガです

第26話

機動六課のある休日

5 (前書き)

やっと休日編終了です。  
長かった〜

第26話

機動六課のある休日

5

side

3人称

「あら〜」

「こつちもフルパワーじゃないとはいえ、マジで？」

2人は驚きの声をあげるがクアットロはふざけた顔をしながらもへりに施された防御魔法の解析を始める。  
誰が見ても変なのだ、あの魔法は、  
なぜならば……………

術者がいない

これがクアットロが不思議に思った事だ  
普通防御魔法と言う物は術者が手をかざし魔力をそこに形成する事  
で展開する魔法である  
だが目の前に発動されている魔方陣では「術者がいない」のだ  
そんな物は聞いた事がない

262

「見つけました」

不意にクアットロとデイエチが振り向き、  
そこに九本の尻尾がある銀髪女性が降り立った





「残念だったな、へりは無事だ」

ケントがボルスに向かって語りかける、ボルスは一瞬悔しそうなかおをしてからケントに再び向き直る

「勝った気でいるなよ、まだ終わってない……」

そう言い、ボルスは雷竜を一度、自分の元へ呼び寄せる。

その行動により、へりの方を見ていたフェイトも再び戦闘体制にはいる

「兄さんはもう「閃光」は使えないはずだ、俺に近づく事すら出来ないよ、雷竜がいる限り……」

「俺は能力ばつかに頼ってる様な奴じゃないんだよ。」

ケントは大口を叩いているが実際は满身創痕、立ってるだけで精一杯という状況だ、それに対しボルスは一撃必殺の威力を持つ雷竜、フェイトをいれたとしても明らかに不利だ

「それに援軍が来るまでもたせればいい事だ」

「だったら今殺す！！」

甲高い雄叫びをあげて雷竜が二人に突進する、それをフェイトは左右に上手くよけて突っ込もうとする、

だが……

ケントは見てしまった

フェイトの頭上から急降下してくる

もう一体の竜を

声を出す暇もない  
コンマ一秒、それだけの時間がフェイトの命運を分けた  
そして……………

ガガガガガガガガガガ！！

雷竜がフェイトの場所を貫いた……………

「見つめました」

サツと使い魔、クオンがディエチとクアットロの背後に降り立つ  
それに気づきディエチは自分のIS、「ヘビーバレル」をいつでも  
打てる様にクオンに瞬時に向ける

「さて、おとなしく投降してくださいれば嬉しいのですが……………」

「今は遠慮しておきます」

クアットロは自分のIS、「シルバーカーテン」を発動させて姿を  
消そうとするが、

「な?!」

「動けない?!」

動かないのだ、二人の腕が、足が、体が、

「不可視の拘束、インビジブルバインドあなた方の目を持ってしても見える事はないでし  
よう。

もう一度言います。

おとなしく投降してくだされば嬉しいのですが……」

「ぐう……」

二人共必死にバインドを破ろうとするが一向に破壊が出来ない。  
クオンが終わりだと思い二人が近づくが……

「ハアアアアアアア！！」

「なっ！！」

クオンに紫色の閃光が衝突する

「トーレ姉（様）！！」

紫色の閃光、No.3トーレは腕についでいる羽の様な物を使いクオンに連続で斬りかかる、クオンも上手く小型のシールドを展開して攻撃を防ぐが、いきなりの不意打ちで集中が乱れたせいか、デイエチとクアットロにかかっていたバインドが……外れた！

「デイエチ、クアットロ！！今すぐここから離れる！私が時間をかせぐ！！」

「わかった！」

「わかりました」

二人はビルの屋上から飛び降りて撤退するが、

「逃がさない!!」

ガチガチガチガチガチガチガチガチガチガチ!

二人が通った場所に現れる

バインドバインドバインドバインドバインドバインドバインド  
バインドバインドバインドバインドバインドバインドバインド  
バインドバインドバインドバインドバインドバインドバインド  
バインドバインドバインドバインド

「っっなっ!!」

デイエチとクアットロのすぐ後ろで連続して純白のバインドが発動される

二人は必死に距離をとるがバインドは追いかけるように瞬時に発動されていく

おそらくトーレが攻撃を止めたら一瞬でバインドの餌食となるだろう……

だがその分クオンは右手をバインド生成、左手をトーレからの防御に使っている、片手になった分だけ……

「スキだらけだ!はあああ!!」

「がはっ!」

トーレの蹴りがクオンの腹にはいる、それによってクオンが一瞬よ

ろけたスキにトーレは戦線を離脱する

「クアットロ、ディエチ、直ぐにここから離れる！ 掴まれ！」

「だから逃がさないと言ってるでしょう！！」

二人がトーレに掴まる

だがクオンのかざした手からはへりの時のような三つ、一定間隔で重ねられた魔方陣が……

「三重魔法壁            「滅波」！！」

「ハアアアアアア！！！」

魔法陣から竜巻のような風が放たれる、だが……

「……………逃げられたか。」

そこに三人の戦闘機人の姿はなく

あるのは竜巻によってえぐられた地面だけだった

二匹の竜が空を舞っている。

それを従えているのは金髪の青年

その戦闘はまっすぐに正面を向いてつぶやく

「オイオイまじかよ」

彼が想像していたのは感電死した女性の遺体だったが煙が晴れて見てみると、



真つ黒な翼が女性を覆っていたのだ  
天使の翼が黒く塗られている……例えるならば「墮天使」

彼……ボルスはこの翼の事を知っている  
だからこそ悟った

勝てない

と……

s i d e

フ ェ イ ト

私はさつき本当に感じた

「死ぬ」 と

体は動かなかった、今からだは無駄だと本能で感じたから  
だから私は目を閉じた

だけと感じたのは痛みではなく、

優しく抱きしめられる感覚だった

s i d e . 3人称

バサツと音をたてて翼が開かれる  
そこには怒りをあらわにしたケントと雷竜が直撃したはずのフェイト

「もう許してもらえとおもつなよ」

さっきよりひとまわり低いトーンでボルスにむかって話しかける  
ボルスは恐怖半分悔しさ半分という顔をしており、再び二匹の雷竜  
をぶつけようとするが……

「遅いよ、お前」

ボルスの目の前にケントがいた

ダンッ！！

「か…はっ！」

ケントの拳がボルスの腹につきささりボールのようにボルスの体は  
投げ飛ばされる  
そしてシーザーに集まるバカみたいな魔力……

「大丈夫だ……ちゃんと非殺傷にしてある」

「クッソオオオオオオオオオオ！！」

ボルスが二匹の竜を盾にする、だが……

「消え去れ、  
ダークライトブレイカー……」

白と黒の光が、  
天を埋め尽くす……

「ケント？」

我に帰ったフェイトがケントに近づく、若干声が震えており、少し恐怖しているのがわかる

「この翼って……………」

ケントから生える翼、最初ははやてと同じ、魔力で出来ている物だ  
と思っていたフェイトだったが、よくよく見てみると本物、つまり  
異常なのだ

「初めて見たわ、「カナ」以外の翼を」

フェイトが驚いて声がした方向を振り向く、  
明らかにボルスとは違う声、第3者……

煙が晴れる、そこには一人の女性、  
黒髪で黒目というフェイトが昔いた「日本人」によくいそうな特徴、  
年齢は……二十歳中盤くらいだろうか、十人いれば十人とも「美し  
い！」と叫ぶほどに「お姉さん」というオーラを全身からだしている  
そして彼女が担いでいるもの……右肩にはボロボロになったボルス、  
そして左肩には……

「なのは……！」

反応がロストしていた管理局のエースオブエース、高町なのは  
目立った外傷はないが気絶している。

「お前……………俺に殺されたいのか？」

ドスの聞いた声でケントが口を開く、殺気をだだ漏れしてるためフ  
イトも少し震えた

「大丈夫、心配しなくてもこの子は返すわ、その代わりボルスはこ  
つちで預からせてもらっわよ、簡単にいえば取引ね」

「俺がそんな取引に応じるとでも？」

「あら？悪い取引じゃないと思うけど？私だって「今の」貴方とは  
戦いたく無いし、貴方だってそろそろきついでしょ？完全な「覚醒  
」はしてないんだから」

「……………。」

「凶星ね」

クスツと彼女は笑う、大人の笑みというものだろう。ここに大きな  
お友達がいたら何人かは鼻血ながして倒れてるだろう

「奴に伝えとけ……………」

「??？」

「一年後、必ずお前を捕まえる……………そう伝える」

「フフ、わかったわ。一年後、楽しみにしてる」

彼女はもう一度小さく笑ってなのはを放り投げる。  
それを上手くフェイトがキャッチする

「……………約束は約束だ……………手を出すなよ、フェイト」

「でもケント！」

「あいつはちゃんとなのはをこっちに渡した、こっちが約束破った  
らどちらが正しいかわからなくなる」

「……………わかった」

フェイトは少し不満げだが何とか押しとどまる

「じゃあ帰るわ」

「お前、名前は？」

ケントが思い出した様に彼女に尋ねる

「No.2 「ファンタジア」よ、長い付き合いになりそうね、王子様」

そう言い残し、彼女…ファンタジアはボルスと共に転移魔法で消えた……………



そして、ケントの翼が光の粒子になって消える。

「フエイト……さん。」

「？」

「あとは………お願いします………」

そう言って、ケントは倒れた

side スカリエッティラボ

「ウーノ姉、ドクターに報告は………」

「もう私じゃ抑え切れないわ……収まるまでやすんでいいわよ」  
セインの問いかけにウーノがげっそりした声で答える、相当苦勞したんだろう  
研究室から狂ったような声が聞こえてくる、はっきり言ってアジトのどこいいても聞こえてくるので気味が悪い

作戦に参加したメンバーが散り散りになっていく中、トーレがウーノと飲む約束事したのは余談だ

side スカリエツティ

ああ面白い、ああ楽しい！！

シールド魔法の原理を根本からぶっ壊した使い魔、リンカーコアを自然のエネルギーに変換する青年、そして何より面白いのが！

飛天王状態のケント君

ああ楽しい！

この世界にはまだこんな可能性があるというのか！！

「くははははは！美しい、美しいぞ！！」

早速解析にはいるとしよう、こんなに笑ったのはいつ以来だ！

だが、

「自然エネルギーを持つ青年……あんなものをもし「造れる」としたら……いや、ないだろう。だいいち彼は死んでしまったし、こんなもの、無限の欲望を持つ私でも造れるかどうか怪しい……恐らくは突然変異だろう。ああ、彼が欲しい！研究したい！」

その日から一週間、スカリエッティは飲まず食わずで研究していたという……



第26話

機動六課のある休日

5 (後書き)

「クオン」はとら八に出てくる「久遠」ではなく、森羅万象チヨコの四代絶影クオンの姿をしています、なぜなら……作者が好きだからです!!

またケントやクオンの設定書きます。

## オリキャラ設定(前書き)

ケントとクオンです。

## オリキャラ設定

ケント・スカイ

魔導師ランク      S S +

魔力量      S相当

魔力光      白と黒の混色      (白が主体で黒が混じってる感じ)

階級      ?      (機動六課では二等空尉と名乗っている)

術式      ミッド主体ベル力混合

出身      ?

年齢      19歳

身長      164cm

体重      51kg

希少能力1      閃光

希少能力2      飛天王状態

好きなもの(事)      甘い物・読書・空を眺める・ラーメン  
etc

嫌いなもの(事)

心霊系全般・デスクワーク

e t c

黒髪に青い目をした青年、顔は整っており背が高いと「かつこいい」なのだろうが残念ながら低いため「かわいい」と認識される事が多い。

ケントの過去を知っているのは親友である 「クロノ・ハラオウン」 聖王教会騎士で少将である「カリム・グラシア」

そしてかの三提督

「レオーネ・フィルス」

「ラ

ルゴ・キール」

「ミゼットクローベル」など

アグスタの時に対峙した女性「カナ」とは面識があるがその仲間である「ボルス」や「ファンタジア」とは面識がない

フェイトの好意には薄々気づいているが自分にはそんな資格はないと言って距離をとる。

また、自分を「化物」や「怪物」と言う時もしばしば……

基本的に優しい性格であり誰からでも好かれるが、女性陣などから目が身長の事があって、子供を見る目になって来ている事が最近の悩み

謎の王、飛天王の血を引き継いでいる

クオン



魔導師ランク                    A A A +

魔力量                            A A A

魔力光                            純白

階級                                二等空尉

術式                                ミッド式

出身                                本人にもわからない

年齢                                本人にもわからない

好きなもの（事）                油揚げ                            きつねうどん                    きつね

そば                                いなり寿司                        ケントの役に立つ事

嫌いなもの（事）                違法研究者                        マッドサイエンティス

ト                                    ケントの敵

容姿は森羅万象チヨコの四代絶影クオン（作者が好きだから）

ケントの使い魔

冷静な性格で大人しい、ケントを尊敬、敬愛しており彼の右手となつて働く

バインドやシールド、幻術など、補助系のスペシャリスト、シールドは耐久ランクSSとかなりの実力者だがその分、攻撃魔法のランクはCである

クオンが使う遠距離で発動するプロテクションはクオンにしか出来ない、彼女曰く「なんか出来た」らしい……

またシールドを他の場所に何個も展開させたり、バインドを瞬時に発動させたりといういろと常識外れ

昔尻尾が九本と珍しい狐という事から違法研究所で捕まり、毎日地獄の様な日々をおくっていた

ケントがその違法研究所を破壊しクオンを発見、衰弱して死んでしまったところをケントが使い魔にした

第27話 予言

一人の少年がいる、手には刀、

シャツ、ビチユツ、

血がとぶ、

シャツ、グチャ、

肉がとぶ、

何人かがまとめてかかる、

シャシャシャシャシャ……グチャグチャグチャグチャグチャグチャ、

腕がとぶ、足がとぶ、頭がとぶ、

何人かは絶叫しながら、何人かは何も言わず、否、何も言えずに冷たくなる

少年は虚空を見上げて小さくつぶやく

「いつになったら自由になれるの？」

少年の目は色あせたまま……………

求めるように自由を欲する。

side ケント

「ん……」

目を開ける、見えるのは白い天井。

知らない天井じゃないな、明らかに六課の医務室の天井だろう、さて、王道を封じられた俺は第一声になんと言えば良いのか……

>あら？お目覚め？ダメマスター？<

「？が多いぞダメデバイス」

>フフ、よかったわ目を覚まして、あと、そろそろくるわよ……<

「覚悟はできてるよ」

未覚醒状態で飛天王になったからな……その代償は……

「ぐっ……ぎっ……がはっ！」

目覚めた後の激痛……

「ぐあああああああ！ああ、があっ！あ……あ……」

やばい、身体中の細胞が、骨が痛む！！

「はあはあ……ぐっ！ギギギ、ガアアアアア！！」

内蔵をぐちゃぐちゃきかき混ぜられるような痛み、脳を潰されるような頭痛……骨を一本一本折られるような感触、目を潰されるような激痛……

「あああああああああああ！！！！」

「はっ、はあはあ……ようやく……おさまったか……」

どのくらい耐えていたんだろうか……いつのまにか身体中汗だくでベツドからも落ちている。  
シーザーに結界をはってもらっているので外に声が漏れる心配はない。

> お疲れ様……<

「ありがと……よ、すまないな、こんな……酷い姿で……」

> 本当にそれを見てると生きた心地がしないわよ<

「俺もこんな激痛くらってなんで生きてるか不思議だよ……」

あれだけ痛かったのに終われば何事も無かったかのようにぱたと痛みがなくなる。なのでもう立つことも出来るし普通に喋れる。

「誰か呼んだらまたごっちゃんになるからな……簡潔にあの後の事を頼む」

シーザーから俺の倒れた後の事を聞く……

なんでも目的であるレリックの回収は達成したのだそう。やるな、FW陣。

へりを狙った相手の逮捕はクオンが失敗したらしい、そのクオンはというとどこかに消えたとか……多分クロノの所だろう。

負傷者は俺ぐらいでなのはさんは一時間くらい目が覚めたらしい、あとはほぼ軽傷、俺も目立った傷はなかった為に病院ではなく六課だそう。

あと保護した少女は無事に目を覚まして名前はヴィヴィオというんだと……

最後に俺は二日寝てた事

「それにしてもクオンが失敗だなんて珍しい……」

> 結構凹んでたわよ<

「マジで?」

> マジで<

あいつ結構溜め込みやすいからな、少し慰めにいかないか

「にゃ！ケント君目が覚めたの?!」

「Good Morning　なのはさん」

「ケント君！今は朝じゃないよ、お昼だよ！」

べつによいではないか

「今シャマル先生呼んでくるから！動いちゃ駄目だよ！」

へい、と軽く返事をしてからシーザーを手取る、さて……

「ケントー……！」

「>プロテクション<」

「へぶしっ……！」

黄色のミサイルを撃墜する事に成功！

ミッションコンプリートだぜ

「イタタ、なんて事するの」

「飛び込みはやめて下さい、流石に痛いんですから」

アグスタの時はたましい半分抜けましたもん



「もう大丈夫？ケント君」

「あつ、いたんですかシャマル先生」

「扱いが酷い！」

気のせいですよ気のせい……

それから少し診察した後、特に異常がなかったのでそのまま退院しました

side

子だぬ……ゴホンゴホンはやて

「頭がいたい」

二日前の事件は結果を見るとこっちの勝ちや、でも正体不明の敵やら狐ちゃんやら問題が多いんちゃうか

それになのはちゃんは撃墜された時の記憶が無いらしくて……あの女の能力も謎やし……

まあそうなんやけど！

「フッフ、やっと会えるで、クロノ君、そしてカリム……」

そう！ついに、ついにこの問題を解決してくれる救世主！クロノ君とカリムに会えるんや！

ん？全体通信、なのはちゃんから？

side

ケント

「はあ、食べた食べた」

「よく食べれたね、ラーメンばかり……」

今はちょうど昼飯の時間、なので食堂に行つて来ました、醤油ラーメン味噌ラーメン、豚骨ラーメン塩ラーメンと四種類全て完食したぜ、二日間も食べてなかったら以外と入るもんなんだなと、廊下を歩いていると……

「やだああああ！いつちやだああああ！」

……だれですか？

ドアの向こうから幼女の声、六課にキャロ以外の幼女なんていたか？それとも誰かが誘拐して来たか？

「ああごめんね、お願いだからなかないで」

ドアの向こうからなのはさんの声……誘拐犯はなのはさんですか……

「フェイトちゃんやないか、ケント君も大丈夫やったか」

「お久しぶりですはやてさん、大変ですよ、なのはさんが誘拐犯になってしまいました」

「な、なのははそんなことしてないよ！」

ジョークですよジョーク、  
だいたい誰なのかわかりません。

「あつ！八神部隊長にフェイト隊長、それにケントさん！いつ目が覚めたのですか?!」

「おゝティアナかゝ久しぶりだなゝそれにチビッコも」

なんだ？FW陣に隊長陣だなんて、

「なのはちゃんからSOSもらってなゝ、面白そうやから来たんや  
」

助けにきたのではなく面白そうだから来たか……

はやてさんがドアをノックして開ける

「み、みんな！来てくれたんだ」「びえええええええん」泣かないで」

見るとなのはさんのスカートに金髪幼女がしっかりと掴まっている。引き離すのムリじゃね

あとヴァイス、どこから現れたかは知らんが写真撮るのやめろ、ん？ネットで売れば高くつく？なら俺も……

「ケント君（怒）」

……やめておこう、命の方が大事です。

後、金髪幼女、もといヴィヴィオはフェイトさんが上手くなだめました、

ヴァイスは今度なのはさんと一緒に特別メニューをさせられるらしい……ドンマイ

そこまではよかったんだが……　　ヴァイス「よくねーよ!!」

「じゃあヴィヴィオの子守はケント君、お願いな」

「ちよくと待って下さい」

「なんや?」

「なぜ俺が?」

「ケント君、あんたが寝とった時に私たちは……山の様な書類を手分けして終わらせたねん……やりたいか?」

「サー、いえ、私はヴィヴィオの子守に専念したいです、サー」

「よろしい、じゃあ私やなのは隊長、フェイト隊長はちょっと出かけてくるから、エリオとキャラロはケント隊長と一緒にあったってな」

「わかりました」

「ほな行ってくるな」

「ヴィヴィオ、いい子でいるんだよ」

「……うん、」

しっかりとお母さんキャラが定着してますね、なのはさん  
まあそれはおいといて……

（ティアナティアナ……）

（は、はい、なんででしょうか？）

（念話でわるいな、なのは隊長達ってどこに行くんだ？）

（えっと、聖王教会に、確かクロノ・ハラOWN提督とカリム・グラシア少将に面会する、だったと思います。）

（ん、ありがとな）

クロノとカリムね、ふん、だから俺に子守を、ふん

(ねえキャラ、ケントさんが怖いよ)

(なるべく近づかない様にしよ、エリオ君)

チビッコが念話でこんな事を話していたのは余談である。

side 3人称

「じゃあ、クロノ君久しぶり」

「お兄ちゃん、元気だった？」

聖王教会のとある一室、そこに機動六課の隊長三人とその後見人であるクロノ・ハラウン、カリム・グラシアが集まっている。

「それはもうよせ、お互い、いい年だぞ……」

「兄弟関係に年齢は関係ないよ、クロノ」

クロノは一度否定したが言い返せなくなったので満更でもなさそうである。

少しはやてが笑ながらジト目でクロノを見つめるが軽い咳払いを一度して場を変える

「さて、おとといについてのまとめと改めた機動六課設立の表裏について、それから今後についてと…」

はやては一度目を閉じてからクロノとカリムに向き合う

「謎の襲撃者についてや」

五人のいる場所にカーテンが閉じ、他とは切り離されたような空間になる、空気も少し重くなり、いきなりだと少しばかり恐怖心もい

だいてしまう。  
そんな中、クロノが重々しく口を開いた、

「六課設立の表向きの理由は、ロストロギア「レリック」の対策と、独立性の高い少数部体の実験例」

そう言つてクロノは何もない空間にモニターを展開させる

「みんな知つてるとおり、六課の後見人は僕と騎士カリム、そして僕とフェイトの母であり上司、リンディ・ハラオウンだ。」

そう言つてモニターが消え、また新たなモニターが現れる、そこには三人の老人が映し出される

「それに加えて非公認ではあるが、かの三提督も設立を認め、協力してくれている」

これにはなのは、フェイトは驚き、目を見開く  
それを見てカリムは口を開く

「それは、私の能力と関係があります」

そう言つと椅子から立ち上がりくくられた紙の束を持つてくる  
カリムがそれに触れると紙の束は光だし宙に浮いた

「私の能力、「予言の著者」、これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で表した予言書を作成することができます」

そのままカリムは自分の能力について話し始める、月の魔力が必要なこと、年に一度しか使えないこと、そして…



旧き結晶と無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る

死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は碎け落ちる

「それって」

「まさか」

予言を聞き、なのはとフェイトは何かを感じたかのようにカリムに問う、そして……

「そう、ロストログアをきっかけで始まる、管理局地上本部の壊滅と管理局システムの崩壊」

二人が息を飲む

「情報源が不確定と言うこともありますが、管理局崩壊ということ自体が、現状ではありえない話ですから」

カリム自身、この予言の危険性と信憑性を鑑みて、現状の管理局システムの強固さや高い完成度が崩壊するとは考えにくい思っている

「そもそも、地上本部がテロやクーデターにあつたとして、それがきっかけで本局まで崩壊・・・うんは考えづらいしな・・・」

はやても予言には実質半信半疑という考えだ、今のところ管理局に脅威となるような組織は見つかっていない

「まあ、本局でも警戒強化はしてるんだがな・・・」

クロノが難しい顔をして腕を組む。

「問題は、地上本部なんです」

レジアス中将は予言を信用しておらず、対策はとらないらしい

「異なる組織同士が協力し合うのは難しい事です」

「協力の申請も内政干渉や強制介入という言葉に言い換えられれば、即座に争いの種になる」

「ただでさえ、ミッド地上本部の武力や発言力の強さは問題視されてるしな」

「だから、表立っての主力投入はできない、と？」

「……すまないな。政治的な話は現場には関係なしとしたいんだが……」

クロノは少し悔しそうにつぶやく

「裏技気味でも、地上で自由に動ける部隊が必要やった。

レリック事件だけでコトが済めば良し、大きな事態に繋がっていく様やったら最前線で事態の推移を見守って……」

「地上本部が本腰を入れ始めるか、本局と教会の主力投入まで、前線で頑張ると？」

「それが六課や」

はやての言葉になのは、フェイトも同意する

そしてまたクロノが唐突にびっくりする事を言い出した

「その六課なんだが……」

「？」

「試験期間が変わった……」

「なっ！なんやて?!」

「嘘!!」

「そんな……」

これには三人とも驚き声をあげる、確かに六課はいろいろと突っ込

みどころ満載の部隊だが試験期間を短くするような問題はまだ出してないはずだ、

「お、落ち着け」

「落ち着いてなんかいらねえわ！まだ何も問題起こしてないで！訓練場は壊しまくりやけど！」

「それもいろいろと問題じゃないのかしら……」

カリムが少し苦笑する

「そうじゃない！逆だ逆！！」

「ぎゃ、逆？」

はやてが鳩に豆鉄砲くらったかのような顔をする、クロノは一度咳払いをしてから改めて話し始める

「試験期間が二年間になったんだ」

「でもどうして？」

「なのは達が聞きたがっていた事に関係ある」

三人が聞きたがっていた事……ケント、

「彼は、一体何者なんや」

はやてが単刀直入に聞いて行く

今回の襲撃者との関係や突然現れた翼……

前に問いただした時は暴走してしまつた為に今回はムリに聞かなかつた、その代わりここ、聖王教会へクロノ、カリムに問いただしに来たのだ、

予想外な事に彼が今日、目を覚ました為に成り行きでヴィヴィオの世話を任せた、教会に行くなんて言つてしまつたらなにしに行くかなんてわかるだろう

クロノが少し目を閉じて口を開く

「すまない、それには答えられない」

「なっ?!なんでや!」

はやてが机を叩きクロノに詰め寄る、フェイトやなのはも教えてくれない事に驚いている

「六課にはレリックの事件が終わつた後、今回の襲撃者達の逮捕に六課は動いてもらう」

「納得がいかへん!」

「ケントは!」

クロノが大声で叫びはやても思わず体を震わせる、クロノは常に冷静であり、感情をぶつける事などほとんどない、そんな彼がいきなり大声を出したのだ。実の家族であるフェイトは目を一段と見開いている

「この事件が終わつた後、「自分から」話すつもりでいる。そしてそのせいでみんなに新たな危険を作ってしまう自分を悔いている」

ぽつぽつとクロノは話す

「襲撃者達はこの事件中ではこれ以上大きな動きは見せないだろう、  
だが早くて半年後、最長でも一年後には動き出す事はわかっている。  
その時ケントは自分の命さえ賭ける決意さえしている……だから、  
お願いだ。」

そう言つてクロノは

頭を下げた

「彼を……助けてやってくれ」

二人きりの部屋、一人はクロノ、一人はカリム、  
はやてやフェイトは、自分の過去を話すのがどれほど勇気があるの  
かを知っている、彼が自分から話す気なら気長にまとうという結論  
になり、一通り提供できる範囲の情報を渡した後、帰っていった

「クロノ提督が頭を下げるなんて、珍しい所を見れました」

「よして下さいカリム」

さっきの行動を少し後悔しているのか、クロノはため息をつきカリ  
ムはクスクスと笑っている

「全く……そろそろでて来たらどうだ、クオン」

クロノが後ろに向かって話しかけるとその空間が歪み、クオンが現  
れる。

その光景を見てカリムは目を白黒させて驚く

「いつから気がついてましたか？」

「最初からさ、クラウドディアからお前が消えたと報告があったからね。」

ケントに頼まれたか」

「……………ありがとうございました」

「何がだ？」

「ケント様の覚悟、理解していただいて」

「思い出させないでくれ」

クロノは苦笑して顔を歪める、

「彼は話さなくてはなりませんね……………予言の続きも含めて……………」

カリムがそう言って先ほどの予言書を取り出す  
この予言には続きがある……………

伝えられしは王の罪

裁かれしは神の歌



裏の世界で生きる

悪魔達は歌いだす

表と裏が交わりし時

忘却の都

現れん



第27・5話

番外編

幼女ほど怖いものはない（前書き）

第27話のすぐ後です

暇潰しに書いたので今までで一番短く物語に何の関係もありません。



てくれましたし」

そう言つて足下を見るとすやすや眠っている二人、それを見てフェイトさんはまた微笑む

「気持ち良さそう……」

「日頃の訓練の疲れがでたんでしょう。今日は寝かしてあげて下さい」

年が近いだけあつて二人共よくやってくれた、それに二人共今日は少し子供に戻つたようでイキイキとしてた、この二人精神年齢結構高いんだよな

「ほらヴィヴィオ、ケント君に「ありがとう」ってお礼しよ」

なのはさんがヴィヴィオに話しかける、べつにいいんだが、お礼なんて、こつちも楽しかつたし……

トコトコとこつちにヴィヴィオが歩いてくる

俺の目の前で止まると小さくお辞儀をすると……

「ありがとう！ケントお兄ちゃん！」

「おう！また遊ぼうな」

「うんー！」

だがその時、



らしい、そのせいで……

「あー！ー！ー！！」

「なんや〜ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオが妙にキラキラした目ではやてさんを見て言い放った

「たぬきさんだー！ー！！」

目の前の金少女はまだ「ギャグ」というものを知らない心が真つさ  
らの純粹な少女……

そんな子からマジの

「たぬきさん」宣言をされてしまったのだ  
そしてはやてさんは……

「うわああああああん！！！！」

泣いた……盛大に……そして走った、部隊長室に……そして隔離した、  
全ての通信を、入口のドアをロックして……

その光景を見て不思議に思ったのかヴィヴィオがシャマル先生に向  
き合い質問した

「ねえねえ、」

「えっと……どうしたのヴィヴィオ？」

守護騎士達は自己紹介を終えていたりする……

「どうしてたぬきさんはどっか行っちゃったの

シヤマルおぼっちゃか」



それを聞いた途端シャマルおば……先生も泣いた。…そして医務室を占拠、隔離した

俺はこの時確信する

魔王よりたち悪い……と…

余談だが、病んでるなのはさんをカメラで撮ろうとしたヴァイスはピンク色の光によって星になりました

第28話

模擬戦！

V S シグナム！！（前書き）

なんか今までと違って少し変になりました

## 第28話

### 模擬戦！

### V S シグナム！！

「シグナムさん……やめにしませんか、こんな事……」

「約束は約束だ、それを破るなど騎士道に反するぞ」

よく間違えられるけど俺って魔導師なんだよね……騎士じゃないんだ、騎士道じゃなくてどっちかっていうと魔道？なんかなのはさんみたいになった……

あっ、こんにちは、ケントです。

ヴィヴィオが保護されてから少し経った、はやてさんやなのはさんは次の日にはなんとか立ち直ったけどシャルおば……先生はひどかったな、三日間くらい引きこもって最後は守護騎士全員で医務室に突入して取り押さえた。

なのはさんはなんとか「なのはお姉ちゃん（笑）」にしようと頑張ってたけど結局駄目だったらしい、保護責任者なのはさん、後見人はフェイトさんになった訳なんだが、フェイトさんも「ママ」と呼ばれてっただけ病んだ、後から俺の事を「ケントパパ」にしようって頑張ってたけどこれまた無理だったそうだ。

訓練の方はスバルのお姉さん、ギンガが移動してきて模擬戦とかやった、実力はスバルより少し上ぐらいか？

まあ前置きはこの位にして今どうしているかという……

「フッ、やっと剣を交える事が出来る」

「俺は刀なんですけどね」

なんと！シグナムさんがとうとう収束を完成させたんだよ！まだ実戦段階ではないんだけど、「魔力を集める」事はほぼ完璧、これをどの様に工夫して、実戦で使える「技」にするかが今後の課題  
ん？飯を奢った時に完成したんじゃないかって？

あれはトラウマだな。食事が終わった後俺のライフは0だった。主にサイフの中が……

人って生命の危機をかんじたら何でも出来るらしい。シグナムさんは空腹で死にそうだったから今まで以上の力が出たんでだろう。あれからまた出来なくなつた。

まあそんなこんなで完成した訳だが、あの約束、「収束が完成したら模擬戦をする」なんて言ってしまったからね、今シグナムさんが向かい合ってる訳。

ほんと勘弁して欲しい、バトルマニアは……

「じゃあケント君は「閃光」のスピードが早くなるのはなしね、それ以外はいつもの模擬戦と同じだから」

なにノリノリなんですかなのはさん……こらその青毛姉妹、目をキラキラさせない、あと、いつから現れたかは知らんがヴァイス、どさくさに紛れて賭博しない。おい！なにシグナムさんに賭けてんだよ、俺の応援しろよ。

「いくぞー!!」

「お手柔らかに……」

全く……「超速移動」が使えないとなるときつい……まあそれでも……

「勝ちに行く!!」

お互いの武器がぶつかり合う

side

なのは

「すごい」

思わず口から出てしまう。

私は魔導師になってからシグナムさん以上の剣の使い手をほとんど見た事が無い

それほどまでに彼女は強い

ケント君ははつきり言って「閃光」を注意すれば勝てると思ったた。

まあそれでも難しいんだけど……

私はやてちゃんみたいな移動砲台はふところに入られるのが一番嫌いだからね……

でもケント君はそれだけじゃない……上手いんだ……刀さばきが……シグナムさんは相手の攻撃を受け止めるタイプだけとケント君は「受け流す」そして隙を見つけて斬りかかる。みたいな感じ……かな



「ショットオンムーブ!!」

「クツ!紫電一閃!!」

俺の斬撃とシグナムさんの紫電一閃がぶつかり合い爆発する……

そして俺がそのまま突き!!

だが、

「はあああああああ!!」

「くっ!!」

俺が突く前にシグナムさんのレバンティン（略してレバ剣）が刃が付いたムチのようになり俺に襲いかかる技、シュランゲバイセン……

一旦距離をとるが……

「はあ!!」

「ちい!!」

シュランゲバイセン・アングリフ……多分そのまま……

「飛竜一閃!!」

ほら来たよ!シグナムさんが元々覚えてた砲撃級魔法!!

「シーザー!!」

>わかってる<

そして攻撃は直撃した……

side シグナム

終わった……か……

だが強かった、現に紫電一閃の後私はシュランゲバイセンをしてなかつたら相当な痛手だっただろう。さらにケントは私に飛竜一閃まで使わした、あれを使ったのは久しぶりだな、それほどまでに気が抜けなかった、始めの撃ち合いの時も同じ力量、「閃光」を百パーセントで使われていたら……負けていたな、飛竜一閃も難なくよけてしまう。

「まだ終わってねーですよ」

「な?!」

ケント?!なぜ立っている?!



確かに飛竜一閃は直撃だったはずだ！

「不思議そうですね、答えはこれ」

ケントの右手には光り輝くシーザー、いつでもショットオンムーブが放てる状態、だが技どおしがぶつかり合った感じはしなかった……まさか！

「そう、俺の魔力をシーザーに込めて強化したんです。一時的にね」

「そんな事が……」

「行きますよ！」

「くっ！」

間合いを詰められるとっさにレバンティンで受け止めるが……

ガキーン！！

「なっ！！」

弾かれただと？！

「終わりです！」

「やらせるものか！」

0距離砲撃、これをくらったら負けだろう……だが！

「ショットオンムーブ！！」

「紫電一閃！！」

二つの技がぶつかり合い、爆発した

side ケント

「いてえ」

「私は楽しかったぞ、礼を言う」

あの爆発の後俺もシグナムさんも伸びちまって医務室で休んだ、結果は引き分け……勝ったと思ったんだが…

「それにしてもデバイスの強化とは……」

「フフフ、すごいだろ、一撃の威力も上がるんですよ。その代わりに魔力消費が激しいけど……」

あれは常に魔力を送らないといけないからな、はつきり言って諸刃の剣だ。

「私にも教えてほしいんだが……」

「いいですよ、魔力をデバイスに溜めるだけなんで収束よりは簡単です」

「そうか、あとなんだか、明日も模擬s「却下です」なっ！なぜだ！」

「あれは試合ではなく半分「死合い」です。あんな勝負毎日なんてとてもじゃないですけど無理です」

「大丈夫だろうそれくら「教えませんよ、強化」……卑怯だぞ」

そんなこんなでシグナムさんが好敵手になりつつある俺でした……

ちなみにこのあとデバイスに魔力を溜める強化の練習でシグナムさんが失敗し、訓練場にちいさなクレーターができました

第29話

公開意見陣述会(前書き)

展開が早すぎる……………

なんでこんなものになってしまったんだろう……………

力の無さにすみません m( ) m( ) m

「さて、明日から公開意見陣述会や」

公開意見陣述会、簡単に言えば地上本部で意見を言い合う会だと思  
つてくれ、ん？なんで省いたのかつて？

作者がうる覚えだからだよ！ちゃんと原作見直して書き上がれっ  
てんだ！

おっと、メタ発言がでたな……原作？何の事かさっぱりなのだが、

「ちょっとケント君？聞いてるんか」

「ん？すみません、聞いてませんでした」

「そこは聞いてなくても聞いてましたって答えるべきやろ……」

なんか大変そうですね、あまりストレス溜め込むと剥げますよ

「誰のせいや誰の」

さあ？誰でしょうか？

「はあ全くもう、明日の14時からの開会に備えて現場の警備はも  
う始まつてる。なのは隊長とヴィータ副隊長、リイン曹長とFW陣  
はこれから出発、ナイトシフトで警備開始」

「みんなちゃんと仮眠とった？」

「……はい！」「……」

なのはさんからの問いにカラフルズは元気良く挨拶をする

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝に集合入りする。それまでの間、よろしくな」

「……はい！」「……」

「はぁ……それとケント副隊長は……はぁ……」

かなり疲れた様子でこっちに声をかけてくる、まあ、当然か……

「クロノ君から「貸し出し」が来てるからちゃんと行くように、地上本部まではなのは隊長達とヘリでおくるわ、要人警護らしいからしつかりな」

スカリエツティは公開意見陣述会に動く可能性が高い、はやてさんも出せる戦力が減るのが惜しいんだろう。すみません……

「ほんなら、よろしく頼むでー！」

「……はい！」「……」

ロビーに元気な声が響き渡る……

「そんじゃ、よろしく頼む、ヴァイス」

「任して下さい旦那」

六課の屋上はヘリポートになっておりそこから毎度ヘリが出ている、  
なのはさんやFW陣も集まってきてもうすぐ出発するだろう  
あと今回は塩ラーメンをチョイスしてみた

「ほんとに旦那はそれ（ラーメン）好きですよね〜」

「ラーメン食わないと力がでない、ヴァイス、新しいラーメンを…  
…」

「ケンぱんマン、新しいラーメンよ！それ！……………て、なにさせる  
んですか」

国民的ヒーローあ ぱんマン……………  
あいつって自分の顔ちぎって痛くないのか？

そんな会話を大人にもなってヴァイスと軽く語り合う、やっぱり男

の話し手はいい、エリオも一様男だけど……やっぱり年が近いだけあってヴァイスとは話が弾む、グリフィス？あいつはちょっと真面目すぎだ……

そこに金髪幼女、もといヴィヴィオがととと近づいてくる、うん、可愛い、ロリじゃないよ、素直に子供として可愛いと思っただけだからな

へりの音でよく聞こえないが何やらなのはさんと話している、いいよな、こつこつうのつて、さて、場も和んだ事ですし、

「行くか、ヴァイス」

そして俺たちは地上本部へと向かった

side はやて

「はあ〜」

何回目やろ、六課設立からため息がでたのは、それも約一名がほと



んぢや、

そして約一名に課せられた要人警護の任務、はつきり言って絶対に違う、クロノ君からの任務やから余計や、大体ケント君の強さを多分一番知っているクロノ君が、今日見たいな日にわざわざケント君を指名するはずがない……

自分の前にモニターを展開する、そこには翼をまとったケント君……この前の事件の映像、

もう一度新たにモニターを展開する、ホテル・アグスタ、突然洗われて襲ってきた正体不明の彼女、そして彼女にも翼、似ているのだ、なぜだかそう思う、形は全然違うのに雰囲気……

「一体何者なんや、あんたは……」

月の光に照らされた部隊長室の中、八神はやてはもう一度ため息をついた

s i d e

ケント

『であるからして、我ら地上の人間は……』

……長い、

ほんとに長い……

それさつきも聞いたよ、何度同じ事言えば気が済むんだよ、えっと、誰だったっけ？地上本部の准将だったよな、なんかポーンに出てくるサ キさんにそっくりなやつ、目つきとか凄い似てるよ、ほんとに

ん？俺か？俺は今、中だ

中と言ったら地上本部しかないよ、簡単に言えば俺も聞かないといけねーんだ

公開意見陣述会を！

全く、ほんとに面倒くさい、

こんなもん愚痴を言い合うだけじゃねーかよ  
それだったら警備させろや

「ふおっふお、不満そうじゃの、ケント」

「当たり前だ、俺が何でこんなもんに出席しなくちゃなんねーんだ」

「あなたがいなかったらそれこそ地上のお人が文句言ってきますよ」

くそっ……

ちなみに今俺は個室にいる、下には本局や地上でそれなりに地位がある奴が議員席見たいなところに座っている

あと個室といってもあと三人も同じ部屋にいるんだがな……  
簡単にいうと老人会、威厳がある言い方でいうと三提督

「それに貴方がこの様にすぐ来てくれたところを見ると、何か企んでそうですし。」

はあ、全くその通りだよ、だから年くってる奴は…

その時……

ズズズズズズン

ガッ！

ドカン！

「なんだ！」 「管制室と連絡を……」 「何がどうなってる！？」 「早く外部と連絡を」 「うわああああ！」

……来たか、

「んじゃ、行ってくるわ」

俺はシーザーを持って個室から出る、デバイス所持禁止？ んなもん知らねーよ  
さて、少し頑張ってくれよ、機動六課、

side      ギンガ

「三重魔法壁「滅波」」

「がはっ！」

圧倒的      この言葉は今の状況に一番対応しいのじゃないかしら

「くっ！IS「ランブルデトネーター」」

「プロテクション」

ダンダンダンダン！

戦闘機人が投げるナイフは唐突に現れた女性によって全て防がれる

「シールド」

彼女がそつつぶやくと戦闘機人の目の前にミッド式のシールドが現れる、

そして……

「バースト」

「がああああああー!!」

シールドが爆発し、相手を吹っ飛ばす、

「凄い……」

私がかかなり苦戦した相手を、こころもあつさりと……  
そして彼女は相手をバインドで拘束する

「さて、この子は預けますので、処理をお願いします」

「まっつて!」

どこかに行こうとする彼女を押しとどめる、彼女は立ち止まって無表情のままこちらを向く

「名前はなん d 「クオン」 即答!」

そう言っつて彼女は消えた

side

3人称

カツカツ

誰もいない廊下を青年が歩く、おそらくは外の襲撃の対処で出っばらってるのだろう

カツ、チン

見た目はふつうのエレベーター、それに乗り込み一番下のボタンを押す

『最下層・第48会議室・第49会議室でございます』

「シーザー……」

>了解<

青年は自分の相棒に頼んでエレベーターにハッキングをかける、するとエレベーターの扉が閉まり最下層より下へと進んで行く

チン

今度はアナウンスが流れる事は無い、扉が開くと真っ暗の部屋に三本の

発光する柱の様なものがある部屋に行き着く

そしてその柱、いや、柱の中にある物が喋り出す

彼らのごちゃごちゃ言っているが青年は聞く耳を持たずにデバイスをセツトして告げる

「終わりにしましょう。腐りきった元・英雄達よ」





### 第30話

### 移り変わっていく時代

『お、おぬし、どうやって?!』

「エレベーターにハッキングかけたんだよ結構頑丈だったな」

『こ、こんなところにくるくらいなら外の警備に行かぬか!』

「俺はお前らに用があつて来たんだよ、それぐらい察しろ」

どこからか聞こえてくる声にケントが答える、彼の目の前には発光する柱……いや……生体ポットの様な物の中に丸出しの脳がそれぞれ三つ浮いている

『なんの用だ!お前が今ここにいる事がどうゆう事かわかっておるのか!いや、それ以前にどうしてここがわかった!』

脳の内一つ、評議長と書かれた脳が声を張り上げる、それに対しケントはボリボリと頭をかく

「おいおい、こつちには超優秀な使い魔がいるんだ、てめえらのいる所を調べるなんて簡単なんだよ」

『……クオンか……』

クオンは後方支援のエキスパート、シーザーが行ったハッキングもクオンが組んだデータを使った

「それともう一つ質問したな、なぜ俺がこのタイミングで来たかつ

て事が、まあそれは簡単だ、いつもなら見張りや監視なんかもいるだろ？それが面倒だっただけ、あと「最高評議会」を抹殺した、なんて知られたら俺が犯罪者になるじゃん」

だがそれが言い終わらない内にどこからか現れた五人の人影がケントを囲む

「洗脳魔導師か、んなもんに二十四時間護衛させるなら外の警備に当たらせるよ」

『自分が今おかれている状況を理解できているのかな？こやつらは全員最低でもSランクはある。』

いくらおぬしでm「すまん、もう終わった」なに!?!?』

そう言うと五人の洗脳魔導師はバタバタと倒れていく

『なっ！なにを!?!?』

「俺の力、知らない訳じゃないだろう。「反応」できないと俺にとつてFランクもSSSランクも変わらない、そして俺のスピードに反応できるのはベテランの「直感」だな、そんな操り人形に直感があるなんて到底思えないんだが……」

自分が選んだえりすぐりの護衛、それが一瞬で倒された事に三つの脳、最高評議会は焦る。ケントが口にした「抹殺」という言葉、脳味噌だけになった彼らにそれを止めるすべは無い

『なぜ！なぜそんな事をしようとする！我らは人類の宝、我らを殺すという事が、人類にとってどれほどの損失か理解しているのか！』

「んなもん知るか、平和平和って、お前らはどれほどの人間をその言葉で殺してきた」

『それくらいの犠牲は当然、次元世界の平和のためだ』

ケントはまた一つため息をつく

「お前らもういいよ、それぞれ定年退職しろ」

『なにを言っておる！我らがいるからこそ今の時代があるのだぞ、その我らに向かって！』

「はつきり言ってお前らは今の時代の中で邪魔でしかない、お前らの言い方で言うと「平和のため」に死んでほしい」

『なっ！』

ケントがシーザーを構えると……ゆっくりと、ゆっくりと光始める

『おっ、おぬしは人を殺さないのじゃないのか！！』

「100年以上も生き続け、体も思想も腐りきった奴らなんで人間でもなんでもないよ、最後に教えといてやる」

そう言っつて、シーザーを振りかざす

「時代は、移り変わっていくものだ」

暗い空間を、光がつつむ

「この世界のトップも、呆気ないものね」

女性の声、ケントは静かに振り返り、目の前の女性と向き合う

「今回は手を出さないんだろ、カナ」

ホテル・アグスタに現れた女性、「カナ」その彼女が、ここにいた

「もう、「お姉ちゃん」って呼んでくいたらいいのに」

そんな彼女を無視してケントは乗ってきたエレベーターに向かう、

「今回は負けらしいよ、地上本部かなりやばいよ」

「……………そうか」

ケントはそれだけ言ってエレベーターに乗り込み、この場を後にする  
それを見守るカナの目は、敵ではなく、弟を心配する、れっきとした「姉」の目だった……………

実質、地上本部襲撃事件はスカリエッツィの勝利、機動六課の敗北  
で幕を閉じる、多くの人の負傷、六課壊滅、そして保護児童、ヴィ

ヴィオの誘拐、さらには全次元世界に向けての大演説

だが、正式な歴史、原作とは違い、ギンガの誘拐阻止、さらに戦闘  
機人一人の捕縛という結果になるが、  
ここに、正式な歴史を知る者はいない………

s i d e

ケント

一夜が明けた、

俺はあの後地上本部に襲撃してきたガジエットの殲滅にあたった、  
だが六課は壊滅、妹の様に接してしたヴィヴィオが誘拐される、と  
いう結果に終わった。

ギンガの話によるとクオンが捕縛した銀髪眼帯の戦闘機人は聖王教  
会のほうで眠っている、あいつは敵に容赦ないからな、まあいつ  
目覚めても大丈夫な様にかなりきつい結界をはってある、逃げる事  
はできないだろう、それに万が一の事を考えてクオンにも隠れて見  
張ってもらっているからな

ほんとに悪い事した、六課には……………

けど今回のタイミングしか無かった、奴らにも話した通り、いつもの地上本部で今回の事をしたら瞬時に情報が流れて俺と、俺に関わった全ての人間が殺される。

それだけは避けれないといけない

現場処理、簡単に元六課の調査をして少しの休憩にはいる

一人ココアを飲みながら少し考える

おそらくスカリエッティは一ヶ月以内には必ず動く、目標はそれまでに奴を止める事……………

いろいろあったが楽しかった六課での生活、こうしてやられてみるとやはり悔しい思いだつてある

扉越しに聞いたたなのはさんの心の内……………ママと慕われていた彼女だ、思うものは大きかったのだろう  
だから終わらせない、こんな所で……………

だからやられたら……………



やり返す!!

とあるラボ、厳密に言つとスカリエッツィのラボ

「ふむやはり素晴らしいね、聖王の器は」

「お疲れ様です、ドクター」

機動六課を襲撃した際に手に入れた聖王の器、もといヴィヴィオ、その小さな体に彼はレリックをいれ終わったところだった

「それとドクター、ドゥーエから報告がありました」

「ふむ、なんだったのかな？」

IS「ライダーズマスク」で地上本部にスパイとして潜入している彼女、No.2ドゥーエはスカリエッツィにとつてのスポンサー、そして生みの親、最終的には抹殺したいと考えている最高評議会に近づく任務を与えている

「はい、報告によるとスポンサー達はすでに何者かによって殺されていたと……おそらくは、飛天王の仕業かと思われます」

「ふむ、それは本当かい？」

「はい」

スカリエッツィの問いにウーノは極めて冷静に答える、スカリエッツィ自身、もう用済みの人物が死んだ事にはなんの感情も持たないが起こした人物が飛天王の血を受け継ぐ、「ケント」なら話は違ってくる、なぜ彼がそんな事をしなければならないのか……

「フッフ、面白い、だがまだレジアスは生きているのだろうか？」

「はい」

「ならもう少しだけ彼女には頑張って貰おう……ああ、一週間後が楽しみだ！」

彼は高笑いして、

いつも通り研究に励み出す

s i d e            ? ? ? ?

「最高評議会の連中が、死んだか……」

薄暗い空間の中、何者かの声にする、恐らくは、男

「最高評議会が私たちに味方するのを恐れた……か、なかなかいいじゃない」

近くにいた女性……ファンタジアが口を開き小さく笑う、よくよく見渡せば他にもいくつかの影が見える、中にはまだ小さな子供の様な影もある

そして半透明、恐らくは通信を使っている女性、カナが続けてその中の中心の男性に報告をする

『スカリエッティはすぐに動くでしょう、どうします?』

「……………私が行こう」

『なっ!』

これにはカナだけでなく、周りの影も動揺する

「なんで親父が!だったら俺が行く!」

そう言っつて声を張り上げたのはボルス、だが男性は黙ってボルスの言葉を静止させる

「挨拶だけだ、奴らの決戦の時には手を出すつもりはない、終わってからだ」

「なら……………いいけど、」

ボルスは押しとどまり男性は歩き出し、つぶやく

「さて、お前はどんな反応をする?」

ケント  
「よ

第30話

移り変わっていく時代（後書き）

ちょっと早い脳味噌達のログアウトでした

第31話

チンクとクオン

ついでにケント

「ほえ、でけえな」

あ、おはこんばんわ ケントです

今俺はなんか大きな宇宙船の前にいる  
近くで見るといつ見てもでかいな

「アースラって言ってね、私達が小さい頃お世話になった船なんだ  
……」

隣のフェイトさんが懐かしい物を見るかの様に答える  
なんでも六課隊舎が全壊してしまった為に仮の隊舎としてこの船が  
選ばれたらしい

結構古い船だと言っていたんだが……まあ大丈夫だろう  
それにしてもはやてさん、いくらなんでも古いとはいえ次元航空船  
ですか……別にいいですけど……

「それじゃあ乗ろっか」

「ん？あつ、はい」

さて、これから会議だったっけ？  
はあ、めんどくさい

side

3人称

聖王病院のとある一室

そこで眠っている少女が目を覚ます

髪は銀髪で右目は眼帯をしていた（今は外されている）彼女は体を起こし、少し周りを見渡すと突如険しい顔になって、音をたてずにベットから降り、病室から出ようとする。  
だが、

ガチガチガチガチ！！

「くっ！」

少女の手足に展開されるバインド、そして

「無駄ですよ、この周りには見張りとして一様魔導師が見張っています、」今の「貴方なら撃墜されて終わりです」

「っ？！お前は！」



いつの間にか自分の寝ていたベットの隣に狐の女性、クオンがたっている

それに反応した少女が自身ISを発動させようとするが……

「?!なんでだ!」

ISが発動しないのだ、それに自身の魔力も感じなくなっている

「少々貴方をいじらせてもらいました。

今は魔力もISも封印されているでしょう」

「!?!」

少女は信じられなかった、自分は天才、無限の欲望の肩書きを持つスカリエツティに造られた存在、その自分にアクセスなどできるとは考えられなかった

さらに目の前の女性は「いじった」と言った……その先は、考えたくもない

「心配しなくても、いじったと言っても魔力とISを一時的に封印しただけです。」

そんな様子を見て察したのかクオンが静かに自分の言葉を修正するその言葉を聞いて安心したのか、少女は安堵の息をはく

「さて、戦う力のない貴方がここから逃げ出す事はまず不可能です。大人しくこちらの質問に答えて貰えれば嬉しいのですが」

「私が口を開くとでも？」

少女はそう言って口を閉ざす、それにクオンはいかにも面倒くさそうなため息を一回はく

「名前くらいは教えて下さい」

「……………チンクだ」

「…以外と素直で良かったです」

「どういう事だ？」

少女、チンクが首を傾げる、今の返答は相手がいかにも自分を知っているかの返答だった、それをチンクは疑問に感じたのだ

「貴方の頭の中、少し見させてもらいました。なので知っています、名前もNo.も基地も姉妹達も目的も、今の質問は貴方の性格を拝見させてもらう為です。もし、敵対の意思があり、偽名などを使っていたら、貴方を拘置所に送らなくてはいけませんでした」

「そうか……………」

その言葉にチンクは一気に体の力を抜く、隠し通す事は無理だと察したのでだろう

「もう六課にもアジトの場所は聖王教会を通して伝えました。後は結果を待つのみです」

「……………」

チンクは無言で頷き、クオンに問う

「もし、もしもだ、私達が敗れた場合は……妹達はどうなる」

チンクの頭にあるのはその後の事、もし、自分達が敗れ、捕まった場合は……自分達は戦闘機人、もしかしたら裏で実験台として使われるかもしれない……

「安心して下さい、加害者のスカリエッティは知りませんが被害者の貴方なら方なら別です。」

「私達が被害者だと？」

「貴方達は生みの親には逆らえないでしょう？」

その言葉にチンクは静かに頷く、彼女自身、はっきり言って今回の事をする意味を見出せずにいた。

わからないのだ彼女には、こんな事をする理由が、だが生みの親がそう決めて姉妹が納得しているのであれば……そんな感じだ

「マスターは貴方達を見捨てませんよ、同じですから……………」

そう言ってクオンは部屋を出て行く、だが……………

「……………あの、だな……………何処かに行くのなら、その、バインドを外してからしてくれないか……………」

だがもうそこにクオンの姿はなく

チンクのつぶやきは虚空に消えた

s i d e

ケント

「で、これは誰？」

怖いですフェイトさん

ただいまアースラの会議室にいます

そこで公表されたのはスカリエッティのラボの場所や今後について、  
ちなみにラボの

場所はクオンが捕まった戦闘機人を解析してわかったものだ

カリムの弟のロツサも見つけたらしいが少し遅かったな

まあそれはそうと今目の前に映し出されているモニター、

うんクオンだね、なんでこんなに目の前の金髪美女は怒っているの  
でしょうか？

「クオンですが？」

「だから誰やねん」

だからクオンですって、知っているでしょ、俺の使い魔ですよ

「んなもん知らんわ！」

「あれ？もしかして言ってませんでした？」

「……ケントくん、少しOHANASIIしよっか……」

…えっ？

FW陣はこの後語る

「地獄って、こんな所にあっただろ」と

自分の体がプスプスいつてるよ

危うく死にかけた、なにあの集中砲火、閻魔様もびっくりだよ

さらに廊下に放置って…

どうやらクオンの正体をあの休日の日からずっと追ってたんだと  
まあいきなり現れて市街地で戦闘、さらにはギンガを助けたらしい  
し、突然現れて突然消えるし、行動も不明だから六課では「要注意  
人物」だったらしい

俺はそれを聞かされた時寝てた、寝る子は育つ！

あと俺が怪しいと思ったのは女のカンなんだと、怖えよ。

と、その時、なんかよくわからん通信が入った

『ククク、始めまして機動六課の諸君』

「……………」

はあ、機動六課に向けての全体か…さらに発信元がス力野郎って…  
…ほんとマッドは何考えているかわからん

そこから勝手に演説？的なものを始めやがるし…………  
しばらく適当に聞き流していたら画面が変わる、そこには…………

『あああああああああああああ！！』

えっ？

「ヴィヴィ……………オ？」

モニターに映し出されているのはなにやら椅子のようなものに座っている。

そして恐らく激痛による絶叫……………

俺の中で何かがグツグツとこみ上げてくるのがわかる

『……………アルハザードの遺産……………聖王の……………』

……………じい

『……………これこそ私の……………なのだよ』

だまれ

目の前のモニターでクスがごちゃごちゃ言ってる、ふざけんなよ



『さて、ケント君、この前の答えを聞いていなかったね。私が付  
くなら今のうちだが？あとこの通信はケント君だけの音声は拾える  
からね、さあ、答えを聞こう』

「……………」

『ん？すまないね、聞こえなかった、もう一度言ってくれるかい？』

こいつは絶対……………」

「ぶっ殺す!!」

はやてさん達が俺を見つけてこちらに走ってくる

目の前のスカリエッティは残念そうな顔をしてため息をつき、口  
を開く

「はあ、残念だよ、ケント君……いや、ここはあえてこう言った方が  
いいかな？」

第四代・戦闘技術総大将

ケント・スカイ  
『

第32話 決戦前（前書き）

長く更新しなかった割には短いです

## 第32話

## 決戦前

「えっと……あの……」

「……………」

普通に喋って下さい、はやてさん……

あつ、こんにちは、ケントです

ス力野郎からの通信があつて十分くらいか？

今はアースラの会議室にいます。

まあそれはいいんですけど……はあ……

「こ、この様な方針で進めようかと考えているのですが……よろしいでしょうか？」

ほんとやめて、俺のライフはもうゼロです。

「はやてさん……お願いだからさ、普通に話して」

「ですが……一様上官ですし……」

さっきからみんな敬語で話してくるし動きがガクガクしてる。はあ〜

「今まで通りでいいんですよ、はやてさんはこの部隊の部隊長、俺はライトニング隊の副隊長、それでいいじゃないですか」

「う〜、わかった、じゃあそうさせてもらつわ」

軽！！

「だってケント君なんかはこの喋り方はちよつとな〜」

「にやはは、私しもちよつと…」

……………泣いていいですか、

「にしてもおめー何者なんだ？そんな階級聞いたことねーぞ」

「私もそれ気になる」

ですよ〜、

「う〜ん、「大将」といつても政治とかには関与しませんよ、簡単  
にいつてしまったら本局所属の戦闘技術総大将というのは「本局戦  
闘魔導師のトップ」ですかね〜」

「じゃあ、ケントは私達の直属の上司って事？」

「まあそうですね」

ほえ〜、という感じでなんか皆口を馬鹿みたいに開けて

「でもなんでみんな知らんねん？」

「機密なんですよ、知っているのは将官クラスの人物と提督達ぐら  
いです。」

おいロングアーチ、そんなガクガクしなくていい、FW陣も、俺の

管理外なんだから元に戻れ、ヴァイスはケータイの俺のメアド見て手を震わせない、いいんだよメアド持っても、階級ぐらい気にすんな！」

「FWの奴らがお前の管理外って、どういことだよ？」

「簡単ですよ、陸には陸の大将がいるという事です」

「またも全員「ほえ〜」とした感じに口を開ける  
そんなに以外？」

「まあその話は後や、みんな自分のやる事、ちゃんと確認しーや」

ちなみに役割分担といつかなんとといつか……

俺とフェイトさん、それから教会のロツサとシスターシャツハでスカイ、今変な事考えていただろ」  
力野郎のアジトを、  
ヴィータさんとなのはさんでゆりかごの殲滅  
FW陣やザフィー、シャマルさんとかで市街地の応援、シグナムさんは何かあった時の待機だ、流石ニート侍の事だけはある……

「スカイ、今変な事考えていただろ」

「イイエ、ソナナコトハアリマセンヨ」

なんで考えてる事わかるの？

今のがなんの役割かといつか……ゆりかごといつかというのが浮上したんだよ

めんどくせえ〜……ん？

「おっ、着いたか」

「どうしたん、ケント君？」

「はやてさん、ちょっといいですか？」

「？」

子だぬ……ゴホンゴホン、はやてさんが頭に？マークを浮かべる

「考えてみたんですけどゆりかこの戦力が少ないと思っんです。」

「ケント、それははやても重々承知だよ、でも……」

回せる戦力が無い……か

「なのでちょっと応援を……」

そう言つと会議室のドアが開き一人の女性が入ってくる



クオン

「お久しぶりです。マスター」

side  
なのは

「えっと……よろしくね」

「……。」

「ゆ、ゆりかごの制圧頑張る！」

「……。」

えっと、こんにちは高町なのはです  
ゆりかごが浮上して、私達がそれを制圧する役なんですが……

「おいおめー、何か言ったらどうだよー!!」

「……………」。

このとおり、クオンさんが……うん、

「おめえいい加減に「脳筋馬鹿が……少し黙って下さい」なっ！て  
めえー!!」

「ヴィータちゃん！抑えて抑えて」

この人が強い事は分かってるんだけど、性格が問題かもしれないね  
……………

「クオン、気に入らないかもしれねーが言う事ぐらい聞け、今から  
一緒に動くんだから」

「……………分かりましたマスター」

はあ、大丈夫かな

スカリエツティアジト

「ドクター、少しよろしいでしょうか」

紫の髪をまとった女性、ウーノがモニターを見ているスカリエツティに声をかける  
かけられたスカリエツティは「どうしたのかね」と一言言うと今まで見ていたモニターを背にし、ウーノに向き合う

「妹達の配備、完了しました。

ゆりかごは残り3時間45分で所定の位置に到着します。」

「フフ、そうか、六課の方はどうだい？」

「先ほどエースオブエースと夜天の主、守護騎士一名と使い魔一匹がゆりかごへと  
テスタロツサお嬢様と大将はこちらへと向かって来ているのが確認されました」

「やはりか……」

スカリエツティが一言つぶやきモニターをいじると今度は新しくガジェット映像が映し出される

そこに乗っているのはルーテシアとガリユー

「ルーテシアにもお願いした、上手く動いてもらおう。  
騎士ゼストは？」

「一様作戦は伝えましたがおそらくは……」

「まあいいだろう、彼には時間がない、放って置いても直ぐに死ぬ  
さ」

スカリエツティは笑っているがウーノは何か奥歯に挟まったような  
顔をして報告を続ける、スカリエツティも気づいたらしい

「どうしたんだいウーノ、そんな顔をして」

「いえ、ただ一つ疑問に思った事が……」

「ふむ、」

ウーノはスカリエツティに次ぐ知能派でありだいたいこの事は一人で  
考え、一人でこなす、

スカリエツティはそんな彼女が抱く疑問に興味を持った

「いえ、「ゆりかご」の危険性はケント様もよく知っているはずで  
す。

なのになぜゆりかごの迎撃に行かないのかと……」

「大将」という肩書きを持っている彼だ、ふつうは自分達の逮捕を  
自らの使い魔をさせて自分はゆりかごの迎撃にあたったほうが1番  
手っ取り早いはずだ、

それにクオンはどちらかと言うと「制圧」よりは「逮捕」の方が向  
いているはずだ

なのになぜ逆なのか……

「ウーノは知らなかったんだね、それは彼が持っているデバイスに  
関係があるんだ」

「デバイスに、ですか？」

ケントがつかっているのはシーザーという名のデバイス、特に変わった所はない筈だが……

「ゆりかごでは彼の「シーザー」は使えないのだよ、恐らくは事前にクオン君によって簡単な幻術でもかけておいたんじゃないかな、ゆりかごの担当者にならないように」

「それなら他のに変えれば……」

「そう簡単じゃないのだよウーノ、なぜなら彼はシーザーであってシーザーは彼であるからね」

「??？」

スカリエッツィの答えにウーノが理解出来ないといった顔をする

「言い方が悪かったね、要するに彼はシーザーなしでは戦えないという事だ」

「へぶしっ!!」

「大丈夫？風邪？」

「大丈夫ですフェイトさん、ただ何処かのマッドが俺の噂をしてい  
る様な気が……」

ケントは体を震わせながら答える  
だが彼等のまえには……

「どうしましょうかね……フェイトさん……」

「が、頑張る」

目の前を多い尽くすガジェットガジェットガジェットガジェットガ  
ジェットガジェットガジェットガジェットガジェットガジェットガ  
ジェットガジェットガジェットガジェットガジェットガジェットガ  
ジェットガジェットガジェットガジェットガジェットガジェットガ

ジェット・・・・・・・・

明らかに時間稼ぎだ

「無駄な事ばかりしやがって」

「でもこの数はキリが無いね、振り切るよ」

そうして二人は空を駆ける

「やっぱり外側からだけやったら拉致があかへん、中からなんとかせんと」

そう言いながらもはやては迫り来るガジェットを薙ぎ払う

だが数は減るところが増える一方でさらにゆりかごからは絶え間なく四方八方へと砲撃が発射される

さらには敵も味方も入り乱れている中、自分が得意とする広域殲滅魔法などは使う事が出来ない

もし上手くガジェット、ゆりかごに放てたとしても巨大なゆりかごの前では決定打は与えられない  
止めるには中から動力源を破壊する以外にない

「デイバイン・バスター!!」

「アイゼン!!」

なんとかしてもこの二人を突入させなければ、そんな思いがはやてによぎる

s i d e

? ? ? ?

空を飛ぶゆりかご、それを阻止しようとする同員達



その様子を見つめながら、初老の男は自分のタバコに火をつける

周りには残骸と化したガジェット……

「ん、そろそろか？」

男がつぶやくと体が少しづつ変わってゆく

白髪のは髪は綺麗な金髪へ

身についたシワはすっかりなくなり

そこにいるのは所定の位置の男性ではなく美しい青年になっていた

「じゃ、遊びにいくか」

青年は歩き出す

ゆりかごと



### 第33話

### 決戦 1

side

3人称

「おらっ！」

ドガンッ！！

ヴィータとなのは、この二人がゆりかごに突入してどれくらいの時間が過ぎただろうか。

突入部隊のメンバーが揃うまで、少しでもゆりかご内の敵を減らす役目、それが二人にあたえられた任務だった。

だが実際に武器を振るい、攻撃を打ち出しているのは紅い騎士、ヴィータだけでありなのは全くと言っていいほど手を出していない。否、出せていない。

「ヴィータちゃん、飛ばし過ぎだよ……………」

ヴィータを見ると彼女にはかなりの疲労の色が見える  
それを気にしてなのはが声を掛けるが……

「はっ、いーんだよ、ベルカの騎士を舐めんなよ」

そう言って無理して作った笑いを向ける

ヴィータのおかげでなのはの魔力、体力ともに余裕という状態なのだが、このままいくと変わりにヴィータが潰れてしまうだろう

だがヴィータが頑張っている理由は他にもある。  
簡単に言えばイライラだろう

「それに……あいつは何処いったんだよ!!」

「お、落ち着いてよヴィータちゃん」

二人とともに突入したクオンが当然いなくなったのだ。  
気付いたらフツと、いつ、何処でいなくなったのかもわからない  
それがヴィータの心をイライラさせていた

と、そこに通信が入る

『突入部隊からスターズ分隊へ』

「はい」

『駆動炉と玉座の間、詳細ルートが判明しました』

その言葉の後、二人の目の前にモニターが現れ、ゆりかご内部の地  
図を映し出す

自分達の現在地、駆動炉の位置、玉座の間

「これって……真逆方向！」

「くそつ、突入部隊のメンバー、まだ揃わねえのか!？」

『各地から緊急招兵していますが……まだ……』

二人揃って少しの間無言となると、ヴィータが重い口を開く

「仕方ねえ、スターズ1とスターズ2、別行動で行く」

「ヴィータちゃん?!」

なのはが声を上げるのも無理はない、なのは自身は大丈夫だがヴィータは今までの戦いによって体力、魔力ともに消耗が激しい、そんな彼女を、まだどれだけの戦力を隠しているかわからないゆりかごに残すなどなのはにはできる筈がない

『了解しました。急いで応援をそろえます』

向こうからの通信が途切れる

「駆動炉と玉座の間のヴィヴィオ、かたっば止めただけで止まるかもしんねーしそうじゃねーかもしんねーし、こうしてる間にも外は危なくなってきたる。

時間がねーんだ。」

「でもヴィータちゃ「破壊力と粉碎はあたしとアイゼンの得意部、なのはだっしてっしてんだろ?」……うん。」

なのはは言い返せない、彼女の言っている事が正論だから、外はもう……時間が無い。

「鉄槌の騎士、ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼンに碎けねえ者なんてありやしねーんだよ」

ヴィータはなのはに背を向ける、小さい筈の背中は、今のなのはにとって少し、大きく見えた様な気がした。

「一瞬でぶち壊してからお前の援護に行ってやるよ。」

なのはにヒラヒラと手を振ってヴィータは歩き出す。

「絶対、絶対にすぐ合流だよ!!」

「あつたりめーだ!!」

その言葉に安心したのかなのはは玉座の間に向かって飛び立った。

「はあ、ここがマッドの研究所、ひろいねえ」

言葉を発したのはケント、隣には一緒に飛んできたフェイトと入り口で合流したシスターシャツハ、緑の長髪査察官、ロツサは一足先に潜入している

そして今彼等がいる場所はスカリエツティの研究所、彼の言うとうり広くはあるが壁際には生体ポッドや起動していないガジェットたちが所せましと並んでいる

「これは、人体実験の素体？」

「そうなんじゃないっすか」

「人の命を弄び、ただの実験材料として扱う。あの男がしてきたのは、そうゆう研究……」

フェイトの拳に力がはいる

彼は人の事を実験動物モルモットとしか見ていない、そして自分やエリオみたいな消える事のない傷を持つ人を造り出す。

今の彼女にあるのは途方もない悔しさと怒りだ、

「一秒でも早く……止めないといけませんね」

「はい……」

シャツハの言葉にフェイトは短く肯定する  
止めないといけない、絶対に

「んじゃ、ちゃっちゃと終わらせましょう。」

そう言つて歩き出したその時、研究所全体が大きく揺れ、そして……

「ぐっ!!」

「「シスター!!」」

シャツハの頭上から落ちてきた? 型ガジェットが彼女を押しつぶしたのだ。

その巨体から普通ならば助かる事は出来ない  
フェイトが慌てて? 型が落ちた所に近寄ると同時に……

ガキンッ!!

「ぐっ……」

「なかなかいい不意打ちだったけど……ちょっとあまかったな」

フェイトが振り向くとケントがシーザーを使って紫色の羽の様な武器を防いでいる

一度舌打ちしてから襲撃者は一度自分達との距離をとって再び武器を構える。数は、二人



『フェイト執務官、こちらは無事です。戦闘機人一人を補足しました。この子を確保次第、そちらに合流します』

その言葉に胸をなでおろした彼女は目の前にいる二人はの戦闘機人に向き合う

紺色の短髪と桃色の長髪、戦闘機人、トーレ、そしてセツテ

「今の一撃で大将殿、貴方を潰そうとしたのですが……やはり失敗ですね」

「おいおい、潰そうだなんて物騒な」

ケントが両手を広げて　やれやれ　とした感じで首を振る  
その様子は得にあせった感じはなく、終始落ち着いている

「フェイトお嬢様」

トーレが今度はフェイトに向き合う  
フェイトが彼女等に睨みながら答える

「こちらにいらしたのは帰還ですか……それとも反逆ですか？」

「どっちも、違う」

「犯罪者の逮捕、それだけだ」

彼女はつぶやく様に、それでもはっきりと答えた

「これぐらいか……」

ゆりかご内にあるとある部屋、そこにクオンはいた

彼女は今、ゆりかごの壁に手を当てて目を閉じているだけ、ただそれだけでも彼女にとってはとても意味のある行動に変わる

「さて、そろそろ行きますか」

壁から手を離して彼女は向かう

ゆりかごの制御室へと

第33話

決戦 1 (後書き)

やはりこの小説は隊長陣中心ですね  
FW陣、書いた事が無い気がする……

第34話

決戦 2 (前書き)

駄文です……

「うおおおおおお！！！」

ガキイン！

バツ！

「寝てんのか？」

「！！！！」

トーレが自身のIS「ラインドインプレス」を使いケントに殴りかかる、しかし彼はデバイスのシーザーを巧みに扱いトーレの攻撃を軽く受け流す、魔法など一切使っていない  
さらにセツテがブーメランプレイドで斬りかかるがまたも受け流される、もちろん魔法は使っていない

そんな攻防が約2分、AMFなど関係ない、ケントはその「技量」だけで二人の戦闘機人を圧倒していた

その間、トーレとセツテは今までフェイトには一切手を出せていない、彼女等は目の前にいる「本局の大将」の相手で精一杯だ。

「すいじう……」

フエイトはつぶやく、それは純粹な感想、地上本部襲撃の時、自分を足止めた二人の強さは自分自身が一番わかっている、だがケントはそれをはるかに上回り、彼が「大将」だと言う事を改めて実感させられた、なら今まではどうだったのか？

おそらくは今まで大将だと言う事を隠していたので彼なりに力を抜いていたのだろう。

「やはり……お強い……」

トーレが悔しそうにつぶやく、それに反応したようにケントは一つため息をつく

「お前ら自首しろ、悪いようにはしねえ」

「悪いがそれは出来ません」

「……………そっか」

一瞬だった、ケントは自身の希少能力レアスキルを使いセツテの後ろに回り込んだと思ったら彼女の後頭部に肘打ちを決め、さらにはそのままトーレに投げつけた

「ぐはっ！」

「うっ！」

魔力で身体強化をしたのだろう、セツテを投げつけられたトーレは

そのまま吹っ飛び、壁に激突した  
二人は再び立ち上がろうとするが彼のバインドで拘束され、動く事が出来ない

「フェイトさん、すみませんがこの二人、外までお願いします。ス  
カリエッティは俺が探しておくんで」

ケントはいたって冷静に、静かに答える、フェイトはこの様な彼を  
見た事がない、今までどんな戦闘でも自身の感情を少しでも出して  
いた筈、しかし今の彼はなんだ？

冷静なのはいい事だ、だが今の彼は冷静すぎる、何かを隠している  
様な、いや違う

怯えているんだ

何に対してかはわからない、だが彼は静かに怯えている

それを表情に出さまいと必死になっている

彼がこうなったのはいつからだ？

そうだ、スカリエッティの研究所に入って、シスターシャツハと人  
体実験の素体などと話しをした時から……



「どうしましたか？」

「えっ、いやなんでも無いよ」

彼が突然覗き込んできたのでびっくりしてしまっ

「じゃあ、すみませんがお願いします」

「でも、一緒に行ったほうが……」

「大丈夫ですよ、すぐ終わらせてきます」

そう言って背中を向ける、だが……

「その必要はないよ」

真っ白な白衣をまとい

肩まで伸ばした紫色の髪

「スカリエッティ」

変態マッドがそこにいた

「おおおおおりああああああああ！！！」

ゆりかご内部、駆動炉の手前、そこに彼女の声が響き渡る  
足元には大量のスクラップ、彼女の胸には……血

そしてスクラップの元の原型はガジェット？型、かつて彼女、ヴィー  
ータの目の前に現れなのはに歩くことさえ難しくなる程の大怪我を  
負わせた機体  
その全てがヴィータのハンマによって破壊された

「うっ……ぐっ！」

全て破壊したことによって安心感したのか、彼女は床に手をつく、胸からは絶え間なく血が流れ出て、それがどれほど大きな傷かを物語っている

それだけではない、戦闘によってできた身体中の傷、普通ならば激痛によって動くことすらままならない

「ゲホツ、ゲホツ、ちくしょう」

彼女の目の前には目的の場所、駆動炉がある部屋が見える

ヴィータは自身の相棒「グラーファイゼン」を杖の様にして一歩、また一歩と進む

そして……

「これが……駆動炉……」

今までで一番大きな部屋、そこには禍々しい程紅く光り輝く巨大な水晶のようなプリズム

そしてこれが、目的の駆動炉……

「これを、ぶっ壊したら……この、デカブツも、止まんだよな……」

ヴィータの息は荒く、言葉も途切れ途切れになる

しかし彼女は自分と同じ様に傷ついた相棒を残った力を総動員して振り上げる

「アイゼン、リミットブレイク……………やれるよな」

その問いにアイゼンは力強く答え、ガシヤンガシヤンとカードリツジが三つ排出される

そしてアイゼンはその形を変え、彼女ができる最大の攻撃を發動する形に変化する

そして……

「ツエアシユテールングスッ!!」

ヴィータができる、最大の攻撃が發動する……

「はっ！」

「！　　っく」

デイドによる「ツインブレイズ」による斬撃、ティアナはとつさにクロスミラージュのタガーで相殺しようとするが力の差で後方へ飛ばされる

「ティアア！」

「よそ見してんじゃねーぞタイプゼロ！」

「スバル！！！」

「お前もっスよ！」

コンビであるティアナが吹っ飛ばされた事によってスバルの反応が遅れる、それを見過ごす様な事をせずにノーヴェによる蹴りが彼女に迫る、それを防ごうとギンガが前に出てシールドを張るが対峙していたウインディからの砲撃によって二人まとめて吹っ飛ばされる

スバル、ティアナ、ギンガ、この三人相手にノーヴェ、ウインディ、デイド、そしてガジェット、戦況はほぼ五分五分、今回は一瞬の油断によりスターズ側は後退したが戦いの行方はわからない……

「はあ……はあ………」

高町なのはは荒い息をする

目の前には彼女との砲撃戦に敗れた戦闘機人、ディエチが倒れている

「くっ、」

とっさの判断によって使用したブラスターシステムの反動、その苦痛に彼女は顔を歪ませる

AMF状況下は飛行するだけでも大量の魔力を消費してしまう

いくら空のエースであり、魔力量がオーバースの彼女だるときついものはきつい

しかし……

「ブラスター1はこのまま維持、いけるよねレイジングハート」

その問いかけに彼女のデバイスは当たり前のように返事をする

彼女は止まれない、もうすぐそこに助けを求める娘がいるのだから  
そのまま飛翔し先を急ぐ、その時彼女から3つのスフィアが流れて  
行く

「あの扉です」

固く閉ざされる扉、そこに向けてなのはは砲撃を吹き飛ばす  
土煙などものともせずには彼女は突っ込み、そして……

「いらっしゃい、お待ちしておりました」

涼しい顔をした戦闘機人、No.4クアットロと、ピクリとも動か  
ず、椅子に縛り付けられたヴィヴィオであった。

ゆりかごの外の戦闘……。

『6時の方向、ガジェット減少!』

『第8区間、殲滅完了しました!』

「第2分隊、残りは少ない全部墮とせ!」

次々と入ってくる情報にはやては笑みをうかべる、確かにガジェットはまだゆりかごから投入はされ続けてはいるが初めにくらべてかなり減ったさらにはそのおかげでほかの隊長達の指揮もだんだんと安定してきた。

だったら……

「だれか指揮を代わって!私もゆりかごに突入する!」

「なら私が!」

「お願いします!」

近くにいたある分隊の隊長が彼女の問いかけにいち早く答える  
そしてはやてが突入しようとした時……事態が急変する……

『なっ! ガジェット増大……新型です!!』

「なんやて?!」

航空部体から送られてきた情報に彼女は旋律する、

「あれはなんだ!」



近くにいた隊員が声を荒げる、新型ガジェット……数はあまりないが？型と同じくらいの大きさであり飛行型……

「くっ、私が広域殲滅魔法で一掃する！隊員は全員下がって！」

はやてはこれによってゆりかご突入へのチャンスを逃してしまっ……

……



## 第35話

## 心(前書き)

書く側から読む側になってました……  
ついつい夢中になって……更新遅くなりました。

### 第35話 心

「スカリエッツィ……………」

ケントは目の前の男を見てそう小さくつぶやく、紫色の髪に真っ白な白衣を見にまとう「不気味」の三文字が驚くほど似合う男性

「ククク、初めましてかな？ようこそ大将殿、そしてフェイトテスト  
タロツサ執務官」

その言葉にフェイトはスカリエッツィを睨みつける

「地上での祭りを楽しんでくれているかい？」

「何が祭りだ！この重犯罪者が！！」

フェイトが怒鳴りつけるがスカリエッツィはどこ吹く風とばかりに涼しげな顔をする

火に油なのか…………フェイトの顔がみるみる恐ろしくなっていく

「……………たく、まあそこらへんはおいといてスカ野郎、お前を逮捕  
s「自首しよう」……………は？」

ケントとフェイト共々思わず間拔けな声を出してしまう。

なんせ今まで六課が追ってきた犯罪者がいきなり目の前で「自首する」と言い出したのだ、驚かないほうがおかしい。

「私としてもオーバースの魔導師と「本局最強」の大将が目の前に

いる状況で抵抗しようなんて思わないさ、ここは潔く捕まるう」

「だったらゆりかごも「自首はするがゆりかごを止める気はないね、ゆりかごの制御自体はクアットロが全て請け負っている、こちらからはゆりかごにアクセルすらできないよ」…そんな」

クククとまたスカリエッティが不気味な笑いを取るする

「私は「囿」さ、六課の戦力を分断する為のね、まあそれはいいとして」

スカリエッティがケントに向きなおる、フェイトが悔しそうに齒軋りをしているがスカリエッティは見向きもしていない

「しょうがないことだ、スカリエッティは管理局からすればこれ以上ない危険な存在、たとえ今回、たまたまアジトを発見して囿だと思っただけでも絶対に捕まえなければならなかった、今を逃すといつまたチャンスがあるかなどわからない……」

「ケント大将殿、今の私は君にとっても興味があつてね、君について私が調べた事、捕まる前にその答え合わせをしたいんだが」

ケントが目を細める

「時間がないんだ、後にしろ」

「そもいかないな、無限の欲望という二つ名を持つ私からすれば今すぐに君について知りたいんだ、もし断るならば……」

そう言ってスカリエッティは一つのスイッチを取り出す、

「このボタンを押して研究所全てを崩壊させよう」

「その前に脱出すればいいだけの事だ」

「いいのかい？この研究所にはまだ生きている実験素材もいる。彼らを全て殺すと言う事になるのだが……」

「……ツチ、早く終わらせろ」

またスカリエツティはクククと不気味な笑いを一つしてから話し出す。

フェイトは話しについていけないという感じだ。

「大丈夫だよ、すぐに終われせる。」

まずいくつかの質問に答えてほしい」

「とつととしろ」

「ふむ、そうだね、ではなぜ君が「ゆりかご」に出撃しなかったかだね」

ピクツとケントの体が動く

「古代ベルカの時代、代表的なのは聖王や霸王だね。彼ら王達は一人一人が強大な力を持っていた、それこそ普通の魔導師など足元にも届かない程」

「王達の実力はほぼ互角、まあ聖王は少し抜けていたらしいけどね。そんな王達が一番自身の力を発揮できる場所、それがどこだかわかるかい、フェイト執務官殿？」

「……自身の城か？」

今のスカリエッツィに抵抗の意思はなさそうと見てフェイトは戦闘体制を崩す

「そのとうりだ、城、またはその国の切り札の様な兵器、これらの中では王達の力はほぼ百パーセント引き出すことができる。そして逆に敵の王の力を引き出せなくする場所でもある」

「何が言いたい……………」

ケントがスカリエッツィを睨みつける

「ゆりかごの王に対する効力は知っているかい？フェイト執務官？」  
「……………」

「フフ、正解は「精神操作」だよ」

「それとケントは何の関係がある」

「おや？知らないのかい？」

スカリエッツィは怪訝そうな顔をする、

「ケント大将も王の血を引き継ぐ人間だよ、忘れられた王、「飛天王」の」

えっ、とつばやきフェイトがケントを見つめる、ケントはスカリエ

ツティをみたまま動かない

「ふむ、話を戻そう。」

まあ「精神操作」と言ってもその時の感情を強めるだけだがね、憎しみの感情を持っているならばそれを強め、絶望を持っているならば強める。

そうして敵の王に冷静な判断をできないようにする。

それがゆりかごの王に対しての効力、そうだろう「シーザー」？

>……………<

「ス力野郎、お前、どこまで……………」

「おや？私は「シーザー」に聴いているのだが？なぜそのデバイスはAIを使って話さないんだい？いや、「話せない」のか……………」

「？」

フエイトが頭の上に？マークを出す

「初代飛天王「メビウス」のデバイス、「神月」の能力の一つがゆりかごと同じ「精神操作」、名前は同じだがゆりかごとは違い持ち手の精神を安定させる、これによって初代飛天王は「黒」にならずにすんだ」

「……………。」

「ククク、今の君はこの研究所にあった実験動物達モルモットを見て殺意などの感情に駆られている。

そしてその感情を抑えているのが君のデバイスであるシーザーだ。



だがそれはシーザーであって神月ではない、恐らくは神月を元にした模造品コピー、ということはそのデバイスを作った研究者がいるということだ、そして今、君はそれを持っているそうになるとケント大将、君はその研究者と面識があり研究者は飛天王の存在を知っている。忘れられた王の存在をね、違うか？」

ケントはそれを聞きため息を一つする

「シーザーのAIが作動していないのも今、君の本当の考えは私に対する殺意などにみちているから……シーザーはその負の感情を抑えているんだろう。」

もとより、普段の日常生活でも微かだが作動している様にみえるが

……」

「……………」

「ククク、無言は肯定と捉えよう、おかしいと思ったんだよ。」

君が始めて飛天王の象徴である「翼」を出現させた時、翼は「白」にも「黒」にも完全には染まりきっていなかった。

二つの色の混色、つまり君は「覚醒」していないんだ。

だが飛天王の歴史上、どちらにも染まらなかった王はいない、覚醒は自身の心によってきまるからね、したがって私が導き出した答えは一つだ」

「君の心はもう壊れている、廃人なのだろう」

「私には君に何があったのかわからないが……まあいい、シーザーにも「擬似的な心」を作り出す事は簡単だ、それによって今の君は心を保っていられる。違うかい？」

「それって……」

フェイトが自分なりに何かを感じ取ったのか静かに声をあげる

「疑問に思わなかったのかいフェイト執務官殿？本局の大将という強大な力、そして今、一番危険視されているのは私ではなく「ゆりかご」の筈だ、だが君は何の疑問も感じていない……流石は本局大將補佐クオンといったところか、高度な幻術だよ」

「!?!」

「流石は無限の欲望、アルハザードの人間が元になっただけの事はある……」

「そちらも私の事を知っているというわけか、流石だね」

そう言っつてスカリエッティは手に持っていたスイッチを握り潰す。

「最後に聞きたいことがある……」

「なんだよ」

「君は……誰に造られた？」

「く……………そお……………」

今にも崩れそうな体を必死に奮い起こしてヴィータがつぶやく  
目の前には不気味に輝く巨大なプリズム  
足元には新たに破壊したガジェットの残骸が転がっている  
ゆりかご外に現れた新型ガジェットだ

「手間……………かけさせやがって……………」

ヴィータはアイゼンを持ち上げようとするが手に力が入らずに膝をつく、

「あたしがやんねえと……いけねえのに」

そのアイゼンでさえもボロボロで、すでに鉄の塊と言ったほうがいいだがそんな状態でもヴィータは残る力を振り絞って立ち上がる  
だが……

「えっ………」

いつもの彼女ならきずけていたかもしれない  
だが今は立つ事すらままならない、そんな彼女の目に写ったもの……それは……

「ちく……しよー」

そこにいたのはガジェット？型、昔、管理局のエース、高町なのはに重傷を負わせたガジェットであり戦闘に特化している機体  
詰めが甘かった、もうヴィータにはこれを壊せる力は残っていない

そして無常にも、その刃は振り下ろされた

### 第36話

### 二人の大将補佐

「はあ……はあ……」

管理局のエースオブエースと言われればほとんどの局員が口を揃えて言うだろう。

「高町なのは一等空尉」だと、  
優しく、美しく、そして強い

なのは、ヴィータ、クオンがゆりかごに突入し、かなりの時間がたつ、彼女、高町なのははゆりかご中の「玉座の間」に突入した。  
だが……

「ヴィヴィオ！私だよ！なのはママだよ！」

「五月蠅い！貴方なんか、ママなんかじゃない！！」

彼女の目の前にいるのはあの弱々しく、自分に甘えてくるような娘ではなく、自分と同じぐらいの体に良く似たバリアジャケットを纏う女性、そして向けられているのは「敵意」の目……

だが、金髪でオッドアイという特徴から、同一人物であるということがはっきりと確認できる。

なのはがヴィヴィオ相手に戦闘を始めてから数分……その間に彼女は切り札とも言える「ブラスターシステム」を二段階まで発動させていた。

もちろん消費はかなり激しくなる、それにいくら自身を強化させたからと言って実の娘に攻撃するなどもつてのほかだ。

その為防戦一方、なのはの体力は限界に近い

しかし、その状況もこの時をもって崩れる

「見つ……けた!!」

自身が玉座の間に突入前に放った三つのサーチャーの一つがこの「ゆりかご」を操っている張本人、クアットロを見つけ出す。クアットロは見つけられたことに驚いたような表情を見せる

「くっ!!」

何度も破られたバインドを隙についてヴィヴィオに発動させる  
ヴィヴィオはもがいているがなのはにとってはここが勝負どころであり破られないように今まで以上に硬い

「レイジングハート……いくよ!!」

彼女のデバイスからいくつかのカードリッジが排出され魔力が集まり出す

その様子をモニター越しで見ているクアットロの表情が徐々に変わっていき、彼女がやるうとしている事がわかったのだろう。

「壁抜き」

通常の魔導師ならば絶対に不可能だろう、

だが実際に彼女は4年前、スバルを助け出すときに成し遂げている

なのはの表情が歪む、だが彼女は止まらない……いや、止まらない!!

「ブラスター3!!」

ブラスターシステムの最終段階、ブラスター3を発動させる……  
そして……

「デイバイン・バスターアアアア!!」

桃色の奔流がゆりかご中の壁を一枚、二枚と突き破り、進む、クア  
ットロが必死に逃げようとするが……間に合わない、そして……

「はぁ……はぁ……やった……」

砲撃はクアットロのいた部屋を撃ち抜いた



筈だった

『ぞんねぞんぞんした〜』

「えっ?」

玉座の間に響き渡る声、それは紛れもなく今さっき撃ち抜いたクア  
ットロのもの

「ぞひ……して?」

なのはの表情からみるみるうちに光が消えていく

『どうして?ですか、わ・た・しがその程度の対策を取らないと  
でも?』

「ぞひぞひぞひと……!」

『んふふ〜、特別に教えて差し上げましょうか〜、簡単ですよ、私の立体ホログラムをいたるところに設置してあるだけでございます  
う〜』

「えっ?」

『貴方が撃ち抜いたのはその一つで〜、まだまだたくさん残ってます〜、さ〜て、エースオブエースは見事私を撃ち抜いて陛下を助けることができるんでしょうか〜』

完全になのはから光が消える

当たり前だろう、AMF状況下の中、ブラスター3まで使って砲撃したのだ。

もう彼女に残された魔力は少なく、聖王となったヴィヴィオと戦いながら本体を見つけ出し、撃ち抜くなど不可能に近い

『うふふ〜せいぜい頑張ってくださいな〜』

なのはは必死にこぼれ落ちそうになる涙を堪える、この状況は、なのはの不屈の心までをも砕こうとしていた……だが……

『全く、多くの人は戦っているというのに、貴方は高みの見物ですか……ため息がでますよ』

『「!」!」!』

クアットロと同じ様に流れてくる久しぶりの声が響く

『な、なんで貴方がここに!』!』

『ゆりかごに少しだけハツキングをかけたら出てきました、このゆりかごは、聖王を倒しす、駆動炉を止めるの二つだけでは止まりません、この船を操っている貴方も倒さなければいけない………本当はこのゆりかごの制御を奪いたかつたのですが難しいですね、流石は古代ベルカの遺産、そのせいで貴方の居場所ぐらいしか特定出来ませんでした』

「クオンさん！」

希望が出来たからか、なのはの声に若干明るさが戻っている

『その声は………なのはさんでしたね、この人の相手は私がするのでわがままな聖王は任せましたよ』

「うん！！」

そうやってなのははヴィヴィオに向き直る、心に光を照らしながら

「ゆりかごにハッキング……ですかあ、これまた大将補佐というのは、すごいですねえ」

ため息混じりにそう、クアットロがつぶやく、クオンはお構いなしというような感じで言い放つ

「我がマスター、ケント・スカイの命令により、貴方を逮捕します」

「これを見てもですかあ」

二人がいる部屋の壁という壁が開く、そこには無数のガジェット……

「うふふ、このガジェットの大群にたった一人で勝てるっても」

クアットロは自信ありげに話すがクオンは一度目を閉じ、そして……

「時空管理局本局所属、戦闘技術者大将補佐クオン、参ります」

無数のガジェットに突っ込んで行った……

ガシャン！！

「えっ？」

思わず素っ頓狂な声をあげてしまう、自分はガシャン？型に殺され  
そうになって……

ヴィータは恐る恐る顔を上げる、そこにはガジェットではなく女性  
の姿、先程のガジェットは彼女に吹っ飛ばされたのだろう、数十メ  
ートル先でスクラップになっている

（応援か……………）

恐らくは突入部隊だろうと半分安心、パンフ遅かった事へのイライラを持ちながらアイゼンを杖の様にしてフラフラと立ち上がる

「おせーんだよ、来んのが……」

目の前の女性は腰まである緑色の髪をストレートに垂らし、紅い瞳をした女性、背の高さはヴィータより少し高いぐらいか？

見た感じでいうと「おしとやかそう」友人でいうと月村すずかのようなイメージを連想させる、だが……

「本局の魔導師っつーのは礼の一つぐらい言えねーのかぁ？」

「はっ？」

見た目とは裏腹な言葉遣いにヴィータは驚いた様な声を上げる

よくよく見てみると突入部隊ではないらしい、彼女一人しかないさらに彼女は肩にニメートルはゆうに越す大刀を片手で振り回している

「礼は？」

「はっ？」

「礼はねえーのかって聞いてんだよ!」

「あつ、えつと……ありがとう」

「ッチ」

そう言っつて目の前の女性、いや、少女は巨大なプリズムに向かって歩き出す

「おい！お前、誰だよ！」

一人で突入する局員なんていない筈だ、率直に感じた疑問を彼女に投げかける

「人に名前を聞くときは自分から名乗りやがれ！！」

「あ、あたしはヴィータだ」

「所属は！！」

「本局だ」

「階級は！！」

「さ、三等空尉だ」

はあ、と一つため息をついてから少女はヴィータに向き直る  
そして、

「私は地上本部大将補佐、カイリ・マーベルだ。  
独断でこの駆動炉を破壊しに来た、わかったか？」

そう、大将補佐カイリは告げた



第37話

スマホでポチポチ文章書いてるんですけど……もうすぐラストよ

F a t e / z e r o が面白すぎる……神ですよねあのクオリティは

……

### 第37話

スマホでポチポチ文章書いてるんですけど……もうすぐラストと

「君は、誰に「造られた」？」

スカリエッティの静かな一言にフェイトはより一層目を見開く  
信じたくない、彼もまた、「プロジェクトF」の被害者などと……

「本当はこんな事考えたくはないのだがね、なんせ私は飛天王のクローンを作るのに失敗している」

「だがこれしか思いつかないのだよ、遥かなる歴史の中で飛天王が生きていた？ククク、それはそれで面白いのだがほぼゼロだろう。しかもそのデバイス「シーザー」はさっきも言った様に明らかに何者かによって作られた神月の模造品コピー。こうなってしまうとその科学者に君とセットでシーザーも作られたというのが妥当なのだよ。初代飛天王のデバイス、神月のコピーを作り飛天王のクローンを作り出す、こんな事ができる科学者、私は知らない……いや、一人だけいるかな、もう死んでしまっているが……」

またもクククとスカリエッティは肩を小刻みに動かしながら笑う

「まあ私が話したい事は以上だ、すまなかったね。時間をとらせて」

「たくつ、別に構わねえーよ、さて……と……！」

ガキイン!!

ケントがスカリエツティに放たれた「何者かの」レーザーを弾く  
この場にいる誰もが口を開けて呆気になっている中、ケントは静か  
に刀を構える

「スカリエツティさん、迷惑なお客さんがご到着らしいぜ」

「じゃあこれを壊しゃーいいのか」

「ぐっ……ああ」

ヴィータはアイゼンを杖の様にしながらフラフラとカイリと言った少女に近づくとカイリは顎に手をつけ何かを考えている

「簡単に壊す方法は………なさそうだな、じゃっ！真っ正面からやりますか！！」

「おっ、おい！」

「なんだあ？」

「本当に出来んのかよ、これ、想像以上にかてえぞ！！ それに………」

ヴィータは身をもって体験している、このプリズムの想像以上の硬さと、正規の歴史とは違う防御プログラム………このプリズムは一度攻撃することに防御プログラムが発動する。したがって一度失敗すればかなりの痛でとなるのだ、今のヴィータには……それを止めるすべはない

「はあ？ ナニイッテンダヨ」

だがカイリはやれやれと手と首をふり呆れた様な仕草をし始め、ヴィータはその動作に一瞬カチンときたがそれを必死にとどめる

「これぐらい出来なきゃ大将補佐なんて出来ねーっの！ それにあのジジイにも笑われちゃうだろーが！！」

いきなり怒鳴られたのでヴィータは少し驚くがカイリはそんな事は

気にせずにカードリッジを三つ排出する

「いくぜ、」  
「瀑風」

カイリがデバイスの名前を叫ぶと同時に巨大なプリズムに向かって  
飛ぶ……そして……

「灰燼・破閃!!」

大刀を叩きつけた

「なかなか……やりますわね……」

声の主、クアットロはそうつぶやく

たった一人、たった一人だけなのだ……それなのに……

「捕縛魔法輪・爆破」

ドドドドドとまた何機ものガジェットが破壊される、目の前の彼女、クオンにはかすり傷一つ付いていない、

「くっ、」

クアットロが操作し、ガジェット？型がクオンに襲いかかる、だが……

「あーもう、じれったいですわねその盾!!」

クオンの周りを動き回る5つのシールド、これがガジェット達の攻撃を全て防いでいる、シールドなのに意思を持った様に……

「それは全自動です。どんな攻撃からも自動で私を守る」

「そんなの……ありますの」

クアットロは何度が彼女の事を調べていたのだがクオンは根っから後方支援型、つまりは陣形というフルバックに値する。

彼女単体での戦闘力は小さいものだと思っていた、だが現実はどうだ？ガジェットは次々とシールドやバインドの爆破によって破壊されクオン自身にも完璧な防御、これをどうやって突破すればよいのか……

「くっ、ですが！！」

だがクアットロの目的はあくまでもゆりかごを軌道線上まで持つていく事、それができればゆりかご内の防御プログラムが全回復し、クオンでもなかなか手を出せなくなる

ようするにクアットロは時間を稼げば勝ちというわけだ

「……………一気に決めましょうか……………」

蟻の様にいるガジェットの群れ、流石に一つ一つ破壊するのは効率が悪いと考えたのか、クオンは一旦攻撃を止める、そして……

「四重魔法柱」

部屋の隅に四本の魔力で出来た柱が現れる

だがこんなもの、ミッド式でもベルカ式でもない……………違う魔力形成

「これは……！」

クアットロが声をあげる、恐らくは知っているのだろう。

クオンはそんな声には目も向けず、そして

「カルラ  
迦楼羅」

その瞬間、全てのガジェットが巨大な爆発により消し飛んだ



第38話

漆黒のガジェット(前書き)

もうテストだというのに……俺は何をやっているのだろorz

### 第38話

### 漆黒のガジェット

「まったく、こんなわらわらと……1、2、3、4……20体ぐら  
いか？」

ケントが呆れたようにやれやれといった感じのため息をつく  
影の中で動く物体、それは少しづつ近づき、正体を現した……

「スカリエツティー!!」

フエイトが声を荒げる、まあ当然だろう、現れたのは「ガジェット  
」なのだから……  
だがこれまでとは違う、いままでのガジェットは球体で全体的に青  
かったのに対し現れたのは漆黒に光る装甲の様なもので身を包んだ  
「人型」のガジェット、それぞれの手には剣やら斧やら銃を構えて  
いる

「お前！」

フエイトがスカリエツティを思いつ切り睨むがスカリエツティ自身、  
表情には出さないものの驚いていた

「信じてもらえないかもしれないがこんなもの、作った記憶がない  
ね。

それに今まで私が何かを操っている様に見えたかい？もしあるとす  
れば全体に指示を出しているウーノぐらいなのだが……」

「そのウーノって奴ならお前が話してる間にプライバシーなんてく  
そくらえみたい有能力持つてる査察官が捕縛したと連絡がきたぜ、

まあお前の仕業じゃないってわかってるからいいよ。  
それよりもう抵抗する気がないんだったらAMF消してくんないかな、こいつらの殲滅対象、お前も入ってるみたいだしさ」

「わかった、少し待ってくれ」

スカリエッティは空間ディスプレイを表示して作業を始めるが、

ガッ！！

剣を持った一体のガジェットがスカリエッティに向けて斬りかかる、そのスピードはこれまでのガジェットとは一線をこえていた、だがそれをケントは「閃光」を使い一瞬で移動して魔力を使わずに受け止める

「邪魔なんだよ！」

ケントが相手の剣を弾き相手の顎に肘打ちを決め、シーザーで胸の部分にあるコア？の様な物を貫く、それを見ていた？斧を持ったガジェットがまたも高速でケントめがけて斬りかかるが、

「おらよー！！」

胸を貫かれたガジェットを盾にして相手の攻撃を防いでしまう、斧というのは一撃の威力は高いがどうしても次の行動にはタイムラグが生じる、その隙をケントが見逃す筈がなくまたもシーザーでコアを貫く

まだ魔力を使っていない

「ふむ、ラボ内のAMF全て解除した」

フェイトはバルディッシュを構える、相変わらずケントは魔力を使わずに自身の技量だけで戦っているがそんな中刀を持つガジェットがフェイトに襲いかかる、だがAMFが解かれたとなればフェイトは全力を出す事ができる

「はっ！」

ガジェットをも上回るスピードで後ろを取り一刀両断してしまう恐らく、ガジェット一体一体の戦闘力はB〜Cランクぐらいだろう、前のガジェットとそこまで変わりが無い、そんな事を考えていると後ろから斧を振り落とされる、フェイトがとっさにバルディッシュでガードするが……

「えっ？」

違和感

フェイトはその場から飛び退く、バルディッシュを再び構えるがその形をみて驚く

バルディッシュの刀身が縮んでいる

徐々に元には戻っているがそれは自分の魔力を使い再構成しているからだ

AMF? いや、そんなものではない、もっと強力な力

「これは……」

ガッ!

「っ!!」

今度は槍、それを避けきれずにバルディッシュでガードするが……

「また!!」

再び違和感、なにかこう、ゴツソリ魔力を持っていかれる様な……

「……今は考えてもしょうがない」

今はこのガジェット達を殲滅するのが先、誰の仕業かはわからないがこの事件が終わったら調査する、と、頭を切り換える

「あと八体!!」

隣からケントの声が聞こえる、一瞬だけ見てみるとまだケントは魔力を使っていない

ガッ!

「ハアッ!」

またも斧のガジェットが攻撃してくる、それをフェイトは避け、バルディッシュで横から斬りかかる、  
だがそれを槍のガジェットが黙っている訳でもなく、阻止せんと突き出す

>プロテクション<

バルディッシュによる防御、それにより斧の方は破壊、槍のガジェットと向かい合う、

しかしフェイトはここである事に気付く

(さっきより……重い?)

バルディッシュによるプロテクション、それは真つ正面から攻撃を受け止めた、またも魔力が減ったがそれが問題ではない、問題はさっきより攻撃が重くなった事だ

(もしかして……魔力を吸収してる!?)

フェイトの考えは……正解だ

現にガジェット達は「相対している敵の魔力を吸収し続けている」立っているだけでは感じられないが着実に、魔力によって出来た物質ならそれが顕著に現れる

ガッ!

槍による突き、だがそれよりも早くフェイトはコアを破壊した隣では……

「ラストオオオオ!!」

最後のコアをケントが破壊する、恐らく、もういないだろう

フェイトは自分なりに納得する

だから魔力を使わなかったんだと

だがそれと同時に「ケントがこのガジェット達を知っている」という事になる

だったらやるべき事は一つだ

「ケント、ちょっといい？」

「お疲れ様ですフェイトさん、まずはスカリエッティを引き渡してから地上の方と合流しましょう」

「うん、それはそうなんだけど………」

笑顔というのはいいものだ、特に美人の笑顔など最高だろう、ただ……

「ちゃんとは今回の一件、包み隠さずにおしえてね」

なんで、体が震えるのか？

「思ってた以上に硬かったな」

ヴィータは目の前の景色に只々某然としていた、なんせ自分がいくら叩いても壊せなかった代物をたった一撃で目の前彼女は粉碎機してしまったのだ。驚くなという方が無理だろう

「さてと、防御プログラムも作動しない様だし、帰るか」

「えっ？うわ！」

カイリはそう言うとデバイスと同じ様にヴィータを肩に担ぐ

「ちよっ、おまっ、もうちよっとなマシな運び方はねーのかよ！」

「は？警沢言っんじゃねえーよ、文句言っんなら降りろ、その体で歩けるんだったらな」

ヴィータは押し黙る、今の自分は歩くななんて到底出来ない様な怪我をおっている、少々荒くてもここから出るには彼女に従うしかない

「じゃ、帰るぞ「ちよっとなまってくれ！」なんだよ」

「だけど戻れない、なぜなら……」



「なのはが、なのはがまだ玉座の間にいるんだよ。あいつと約束したんだ、すぐに合流だって」

「あのなあ、お前その体でどうするっつーんだよ、今お前が玉座の間に行っても足で纏い、簡単に言えば邪魔、わかるか？それにクオンの野郎だっているんだ。心配する事ねーよ」

「でもクオンは私も気にいらねーが実力も確かだしケントに頼まれた事はどんな事があってもやり通す奴だ、怪我人は怪我人でベツトで寝てりあいなんだよ」……………」

ヴィータは言い返せない、もしなのはが敵と戦闘中だったら確実に自分は足で纏い、最悪なのはを危険にさらしてしまうかもしれない、クオンの事はヴィータ自身あまり信用していないが実力は確かだろう。

「ちく……………しよー」

「てめえが弱いんじゃない、敵が大き過ぎたんだよ、よくやったと思っぜ」

そうして二人はその場を後にした

「う……………そ……………」

これが夢だったらどれ程いいだろうか、

蟻の様にいたガジェットが一瞬、一瞬で全滅したのだ。

自分の目を疑いたくなる

「終わり……………ですね」

クアットロの目の前にクオンが降り立つ、あれだけのガジェットから攻撃されながらもその体には傷一つ入っていない

「諦めて投降しなさい、どう足掻いても無駄です」

クアットロとクオン、二人は後方支援型のエキスパートだ、だが戦闘面では圧倒的、クアットロには相手を倒すための能力などなく、自身を守るガジェット達も全て焼き払われた、もうクアットロが勝利出来る可能性は残されていない

「フフフフフ」

乾いた笑い

まだ作品があるのか、それとも自暴自棄になったのかはわからない  
ひとしきり笑い続けた後、クアットロは話し出す

「流石は「天照式魔法」の使い手、と言ったところですかねえ」

今までほとんど無表情だったクオオンの表情が若干崩れる

「貴方の最後の魔法、あれを見なければ私でもわかりませんでした  
ねえ、流石、巧妙に隠されてますねえ、ミッド式のように」

「無駄話など無用でs「獣人」……………」

「人間でもなく獣でもない、そのせいで大量に捕縛され実験動物扱  
いでしたっけ」

「お前……………」

「ですから人間から逃れる為に獣人が作り出したのが「天照  
式魔法」 後方支援に特化していて逃げるのには最適だったと  
かあ、まあそれでも絶滅してしまったらしいですけど、たしかあ、  
その実験で作りに出されたのが「使い魔」契約の魔法でしたっけ？」

またクアットロはフッフッフと小さく笑う

「はあ、私ももうちょっと早くに作られていれば、もっと「有効的  
な実験」に使ってあげましたのに」

バンッ！

「ハアハア……………」

「フフ、また随分と取り乱して、どうしたのですかぁ？」

殴った

あのクオンが…………だ……

「今すぐゆりかごを停止させなさい、そうしなければ命の保証は出  
来ません」

冷たい声、射抜くようにクアットロにあびせる  
だが聞こえてきたのはまた笑い声

空中モニターではなのはが何時の間にかヴィヴィオを助け出している  
もうクアットロに笑う余裕などない筈だ

「なぜ笑う」

その問いかけに今度は盛大に笑い出し、そして……

「どうせ今のゆりかごではアランカンシエルで墜とされるのは目に  
見えてます。

なので………

今から約三十分後、宇宙からゆりかごの全エネルギーを使ってミッドを火の海にしますうゝ、そのあとはエネルギーの失ったゆりかごを中心部にむかってドッカーン、面白そうだとは思いませんか？」

それを聞いた瞬間、クオンはクアット口を気絶させなのは元へと  
飛んだ



第39話 カウントダウン!! (前書き)

前半シリーズです……

ん？全部か？

### 第39話 カウントダウン！！

「くっ、プログラムが複雑すぎる……妨害ができない」

クオンが悔しそうにつぶやく、今、この場にはなのは、なのはに抱えられたヴィヴィオ、クオンと気絶したクアットロがいる

「ゆりかごによるミッドチルダ上空からの一斉攻撃」

それを止めようとクオンが必死になって空中ディスプレイを操作しているが動力源が全て破壊されてしまった事によりゆりかご内の防御プログラムが作動、外部と通信する事すら不可能であり魔法も全く使えない状況にある

今こうして空中ディスプレイを展開する事もクオンにとってはかなり過酷だ。

だがそれでも必死に外との連絡をとろうとクオンがゆりかご内のサーバーにハッキングをかける

「せめて、外にこの事を伝えられれば……」

なのはも悔しそうに嘆くが現状は悪化するばかり……

実質、スカリエッティがミッド中心部で何かしらやらかすと予想はしていたので関係の無い一般市民は殆ど避難している。

これまで避難していなかった人達もゆりかごが上空に上がった事でこの数時間の間に避難は完了しているだろう。

危険なのは、局員……

なのはは悔しそうに顔を歪める



ヴィヴィオはそんなママが心配なのか、じつと顔を見つめていた  
そのとき……

ズガガガガン!!

盛大な音をたてて崩れ落ちる壁、そしてそこにはなのはの教え子達、  
そしてクオンは……

「外との連絡、可能になりました」

一息ついてそう答えた

「ゆりかごを使ったの一斉攻撃か……」

ケントがクオンから送られてきた通信に一度舌打ちする

後ろから驚愕の聲が上がるが直ぐにそれぞれの部隊の隊長達が部下に指示をだしてミッドから避難するように命じる

「内側からどうにかなんねーのか」

『無理ですね、時間があればなんとかできると思いますがあと十五分弱、すみませんマスター……………』

「お前が謝る事じゃない、お前となのはは救助に来たスバルとテイアナ、二人を連れてより遠くに避難しろ」

『了解しました』

そう言って通信を切る、周りを見れば各部署の局員達が我先にとばかりに避難を始めていた、中には悔しそうに空を見上げたままの地上の局員が大勢いたが隊長の一喝でその場を後にしている

「ケント……………」

後ろを振り向く、心配する様にこちらを見つめるエリオとキャロ、二人を抱く様にして慰めるフェイト、そして気を失っているルーテシア……………

「どうするの？」

フェイトが心配そうに語りかけてくる……………当たり前だ、たった十五分、それだけの時間で全局員がミッドをはなれるなどとうてい不可能……………はつきり言ってしまうは恐らく……………半数以上が死ぬ非戦闘員など……………生き残る事は出来ない

次元航空船がミッド上空の宇宙に着くまでまだ約一時間弱ある、もうこれは……免れない……

「俺達も……ここを離れよう……俺達の技量なら……生き残れる」

「でも「ごめん」……」

「ホントに……ごめん……」

いくら「大将」といえど……いくら「最強」といえど不可能な事など山ほど存在する

あの巨大なゆりかごの破壊など……彼には到底できることではない。出来るならとつくにやっている

「フェイトさん、エリオ、キャラ、フリード……行くっ……」

ケントは後ろを向いて歩き出す……もう周りには局員など数えられる程度の人数しかない

地上本部には沢山の人はまだ残っている

ミッド中心部にはガジェットとの戦いで動けない局員も大勢いる

スカリエッティのラボには、まだ生きている人もいる

だけど……もしここで立ち止まってしまったらエリオやキャラも巻き込んでしまう

そんな感情がフェイトの心に渦を巻く

「フェイトさん……」

エリオが心配そうに覗き込む……そして…

「エリオ、キャロ……行こう」

フェイトはその場を後にした

「八神部隊長！！もう、時間が……」

「はやくちゃん！！」

ロングアーチとリンから声をかけられる、ゆりかごによる攻撃ま  
であと約十分……その中ではやくは出来るだけ多くの局員を逃がそ  
うと必死に誘導していたが……時間が少な過ぎた……

「もうちょっと……もうちょっとやねん！」

「もうちょっと」と言っているがまだまだ地上本部には沢山の局員が中にいて……さらにミッドからも逃げないといけないのだ……地上本部から逃げ出せたとしても恐らくは逃げる途中で……

ブンブンと頭を震わしてネガティブな思考から逃れる、なんて事を考えているんだと……絶対全員助けるんだ……と……

「主……！」

「っ！シグナムか……！」

やって来たのはシグナム、だが背中から炎の翼をはやせ、バリアジヤケットの色も変わっている

「主はやて、もう時間がありません、直ぐにここから避難を！」

シグナムは必死にはやてを説得にかかるが……

「ごめんなあシグナム……もう少し……もう少しなんや……！」

はやてはもう無駄だと分かっているながらその場を離れようとはしない、その答えにシグナムは一旦目を閉じ

「お許し下さい、主」

手刀……それははやてに綺麗に直撃し、彼女は気を失う

シグナムははやてを抱きかかえながら、その場を後にした……

「ここまで来れば……大丈夫だろ」

周りには沢山の局員がいる

あるものは地上本部をじっと見つめ

あるものは地面に伏して

あるものは自身の隊長の命令に対して怒鳴り散らし

あるものは引き返そうとして仲間止められている

「攻撃が終わったなら……救助に行きましょう……そして全員……助け出しましょう」

ケントがつぶやく、フェイトはそれに頷く事しか出来ない

遠くに見えるゆりかごはここまでかなりの距離だといつのはつきり確認出来る

あと……約三分……

「さて…と…！」

ガキーン！！

「えっ！ちよっ！」

ケントが背伸びをしたと思ったらいきなりフェイトにバインドをしかける

「ケント！どついう事！！」

フェイトが叫ぶが同様に隣にいるエリオとキャロにもバインドがされていて身動きが取れない

「フェイトさん、ゆりかごからの攻撃が終わった後……」俺の救助

「、お願いします」

「えっ？」

ケントは彼女に少し苦笑いして答える

「俺が無茶しようとするれば必ずみんな追っかけて来ちゃうと思うん

ですよ。なので此処まで来て貰いました。」

「無茶って……………」

ケントは一度目を閉じる

「恐らくはゆりかごの攻撃を止める事はまず無理でしょう。なので

……………」

ゆりかごからの攻撃を……………全て撃ち落とす!!」



そう言って、彼はその場から消えた

side ケント

>全くうちのダメマスターは……無茶しかないわね<

「悪かったな無茶ばっかで!」

>その前に体、いかれるわよ?抵抗とかで<

「わかつてる!!」

「閃光」は確かに強い能力だけど連続での使用は出来ない、いくら身体強化していても空気を抵抗やらその他もろもろは真つ正面から受ける事になるからな、まあそれを解消する為に使うのが……

バサツ!!

飛天王の「翼」、これを使えば閃光によるダメージをほぼ0にする事が出来る、後からくる激痛はきついけどもとより使つつもりだ、本気で止めるにはこれでも足りないかもしんねえ

ゆりかごからの攻撃まであと約二分……いけるか？

> 死なないようにねく

「誰に向かって言ってるんだ？俺がそう簡単に死ぬわけがねーだろ！」

まあ死にはしない様に頑張るけど大怪我は確實だな、ハハハハハ

、乾いた笑い

> はあ、まっ、最後まで付き合うわよ。「あそこ」から逃げた時だつてそうだった……く

「ありがとうよ」

ミッド中心部にたどり着く、目の前に見えるのが……地上本部……下を見てみるとガジェットとの戦いのせいで倒れている局員、必至で逃げている非戦闘員とかもかなりの数がある

俺が飛んでいるのは見てない、いや、早過ぎて見えないんだろう

>あと一分ないわよ<

「了解!!」

全速力、そして……

>来た!!<

俺は空を見上げる、空は真っ赤、小さなレーザー的なものや白い魔王様の砲撃、さらには質量兵器のオンパレードが雨の様に降り注いでくる、もしこれが中心部に直撃したら塵一つ残らないだろうな、

……

「さあて」

シーザーに魔力を溜める、

これだけの攻撃だ、動力源が全て破壊されてもやはり古代ベルカの遺産というわけか……うっ、勝てる気がしない……だけど……

俺がここで止めないと誰が一体この破壊の雨を止める？

何人の人間が死ぬ？

そんなこんなで、こっちも譲れない訳だ

フェイトさんにも救助、お願いしてしまったしな

「いくぜ……シーザー……」

>了解!マスター!!<

「あゝ大丈夫かな、死なないかな」

ミッド中心部、とあるビルの屋上、そこに金髪の青年はタバコを吹かしながらケントを眺めている、その顔はどこか愉快そうで、楽しそうだ

「報告します」

「ん？どした？」

青年の後ろに現れたのは「カナ」ケント曰く「姉」

「スカリエッティを殺す為に送り込んだガジェットは全て破壊されています。映像データを解析しましたところケント、それからフ

エイトTハラオウンが破壊したのかと、スカリエツティは生存しているのですがどうしますか？指示を下されれば新たにガジェットを送り込みますが」

「その必要はないよ〜ん、それよりもさあ、ゆりかごがここに落ちてくるんだって、「あれ」を使ってケントをびっくりさせたいから準備してって連絡いれて〜」

「了解しました」

そう言っただけでカナはその場から離れる、青年はニコニコしながらケントを見続ける

「むふふ〜、楽しみだ、

俺の「最高傑作」がどれ程のものか、しかと拝見させて貰おう」



第39話 カウントダウン!! (後書き)

シリアスだし終わり方微妙、次どうやって始めようか……

第40話

一つの終わりと一つの始まり(前書き)

み、短い……orz



## 第40話

## 一つの終わりと一つの始まり

side ケント

「……は？」

目が覚める、まだはっきりとは起きていないようで視界が少し霞む  
が大丈夫だと思う。

どうやらベッドの上、どこだ……？

「っ！……いてっ！」

なんだよなんだよ！体中が痛えぞ！

「ん、起きたか」

「目が覚めたら見舞いに男が来てたとか萎える、こっいつ時は美女  
じゃないと」

「フェイトが三十分前までいたさ、その時に起きていなかった君が  
悪い」

目の前の男、シスコ………ゴホンゴホン、クロノがいた、なんで  
いんだよ

「まあお前がなぜここに居るのは置いて………どこだ？」

「聖王病院だよ、君が血まみれで発見されてから十日、十時間の手術  
が終わってから八日、一人でゆりかごからの集中攻撃を止めよう

とするなんてね。相変わらず無茶ばかりするな君は」

「……………そういえば俺はゆりかごからの攻撃を止めようとして死に物狂いで攻撃を防ぎきって……………エネルギーを無くしたゆりかごが落ちて来て破壊しようとしたら……………意識を失った……………って！！」

「地上は！ゆりかごによる被害者は！！その後どうなった！！」

「おっ、落ち着いてくれ、順番に話す」

落ち着いてなんかいられるか！！ゆりかごみたいなデカブツがミッド中心部に落ちたのなら被害は計り知れないだろ！！

「だったら早く……………がはっ！」

口から生温かい液体が流れ出す、これは……………血？

「あれだけの時間翼を使ったんだ。誰にもばれないようにしておくから……………君は耐えろ」

「まじかよ……………何度なっても、これはかんべんだ、よ！」

その後俺は盛大に吐いた、そこから先は……………意識が飛んだ

「大丈夫か？」

意識を失ってるだろうケントにクロノは言葉をかける

ケントが叫び、もだえ、苦しみの声をあげ始めてから三十分……地面には血の池が出来ており何処かの殺人現場の様になっている

「ハア……ハア……もう、大丈夫だ。」

荒い息をしながらゆっくりと目を開ける、クロノは一度軽い溜息をつくと部屋にある椅子にかける

「ゆりかごだったな」

「ああ」

「公式には「ギリギリたどり着いた次元航空船によるアランカンシエルによって破壊」とされてるよ、君の活躍もあって地上への被害はほぼ0だ。そのせいでケント、君はヒーローなんて呼ばれてるよ」

「よかった、だがヒーローなんて御免だな、俺は偽善の正義を振りかざすただのバケモンだ」

「それでも君がいなければ今頃ミッドは跡形も無く生滅していただろう？胸をはってもいい」

ケントは苦笑してから立ち上がる。

「だけどあの時俺にゆりかごを破壊出来る用な力は無かったし、その前に力尽きたぞ?」

そう、ケントにはゆりかごに攻撃した記憶が無い、その前に意識を失ってしまったている。

ケントの問いを聞いたクロノは一度目を閉じると重々しく口を開いた

「ゆりかごは……消えたよ」

「消えた?」

「ああ、ゆりかごの下にあった空間が捻れるようにしてね、そのままゆりかごは姿を消した」

「どづいう事だよ……それ」

あの巨大なゆりかごが消えた?空間が捻れた?そんな事はあり得ない

「そして、これ」

クロノはポケットに入っていた何かを取り出す

「それは?」

「携帯端末だ、君が見つかった時に握りしめていたよ」

「俺が?」

「一つ、音声登録されている、さて、僕は仕事に戻るとするか」

そう言っただ部屋から出て行く、ケントは少しベッドに横になった後、端末に保存されている音声流す

そこから聞こえてくるのは若い男の声、その声はカレンを従えていた金髪の男の声だ

ケントは音声を聞き終わったあと、もう一度ベッドに横になり、

端末を握り潰した

side ?

「ついに……この時がついに来た」

機動六課前、そこになぜかは知らないが喜びに身を震わせている青年がいる

なびくような銀髪にスラリとした背丈、さらにはオッドアイというイケメン君だ

「この世界に生まれてから二十年、生まれた世界は辺境の管理外世界、此処まで来るのに俺がどれ程の苦勞をしたか……」

拳はプルプルと震えさせ、自身の過去を回想し始める

「ここから、ここから俺の物語が始まるんだ、これまで我慢に我慢を続けた俺の物語が、この「オリ主」の物語が、待ってるよ、なのは、フェイト、はやて……」

男は勢いよく走り始め、思いっきり地面を蹴って叫ぶ

「原作介入だ――」

第41話

銀髪オツドアイ厨二病全開君

(自称オリ主)

side ケント

「酷い目にあつた……」

目が覚めてから半日か？

クロノが帰った後がものすごく大変だった…

フェイトさんには抱きつかれるし

はやてさんには説教されるし

なのはさんにはO H A N A S I I させられるし

クロノはもう一度来て「フェイトに手を出したか」とか言つて問答無用で永久凍結魔法使ってくるし……あつ、発動する瞬間にピンク色の光によつて星になつたけどね！！

まあそんなこんなで疲れた、シーザーはメンテの途中らしい、フレームがところどころ破損したんだと、ちゃんと謝らないとな……

前置きはその辺にして……

「新しいメンバーね」

何でも六課に新メンバーが来るとはやてさんが伝えてきた、何でも辺境の管理外世界で生まれ、一年前ぐらいにそこで起こった小規模なロストロギアの事件に関わつてこつち(ミッド)に来たんだと、



魔力量はAAAランク、ただ実戦経験が余り無くこの一年はずっと訓練、階級は二等空士で本人が強く六課を希望してるんだとてか銀髪にオッドアイって……………

「その前に所属は何処になるんだ？」

見た感じ丁度二十歳だが実戦経験が少なくなるとスターズやライトニングに「新人」として入る事になる

どちらかと言うとスターズかな？ライトニングには俺がいるから副隊長が一人多い訳だしAAAランク相当の魔力の持ち主だ、管理局としては、なのはさんに付けて使える人材にしたいところだろう。

「俺も一目見たいんだけど、無理だろうな」

一様もう体的には殆ど回復しているんだけどもやっぱり手術した事もあって一ヶ月は入院してくれだとはあ……………

「暇だ……………」

side 六課

「やっぱりスターズなんだよね」

「そやで〜、将来期待できる人材や、しっかり教えたつてよ〜、なのはちゃん!」

ケントの予想通りかの自称「オリ主」君はスターズになるらしい、はつきり言ってしまうとなのはもはやてもその新人と会った事が無い、何故彼が六課に来たいのかは知らないが、なのは自身、「強くなりたい」ならば一人の教導官として全力でサポートするつもりでいる。

「けど一先ず一見落着やで〜、事件が終わってから十日、ずっと書類書類書類やつたもん、しばらくはやてさんはお休みや〜」

「ですう〜」

はやてがぐだあ〜と机にもたれかかると隣でフヨフヨしていたリインも同じくぐだあ〜と寝転がる、彼女が言う通りこの十日間は猫の手を借りたいほど大変だった。

なのはやヴィータは入院、それによって残った六課メンバーの仕事が一段と増えてしまったのだ。はやて自身殆ど寝れていないのだからうか……

スカリエッツィの逮捕に率先して行動していたのは六課だ、その分後片づけも多くなる。

そんな机でぐだつていているはやてを見てなのははお疲れ様と苦笑しながら声をかける

ちなみに今フェイトはこの場にはいない、なんでもスカリエッツィに「聞きたい事がある」と言つて今日は六課に帰つて来ないらしい

「それよりもクオンちゃんは何処行つたんやろ〜な」

「そうだね、気づいたらいなくなってたし」

クオンはなのは達を避難させた後さっさと何処かに行ってしまった、グイータの話によるとカイリと言う少女もまた、グイータを病院に連れて行った後消えてしまったらしい  
部隊長としてお礼の一つは言いたいのだろうがいなくなってしまった  
てはしょうがないだろう

そして……

「失礼します」

「入ってええよ」

そう言って、あの銀髪オッドアイ厨二病全開君が入って来た

482

side

銀髪オッドアイ厨二病全開君

俺の名前はクラウド・D・ドレアー

初めに言っておこう、俺は

転生者だ!!!

初めはビックリしたさ、いきなり世界が暗転したがと思うと目の前に自称神（笑）がいてね、なんでも間違つて俺を殺したらしい、まあ心の広い俺だ、神（笑）に「リリなのの世界に転生させてくれたら許す」と軽い条件で許してやったさ、そしたら「似た様な平行世界」に転生させてくれると、俺は飛び上がって喜んださ、なんだってテンプレだけ！二次創作だけ！こんな事が現実にあるなんて夢にも思わなかったさ！

まあその時にちよくちよく特典を貰ったがね。

だがあの人神（笑）……………こんな心の広い俺に何をしたと思う……………確かにリリなのの世界に転生と、言ったさ……………だが俺が生まれたのは魔法もクソもない管理外世界……………地球でもないんだせ！？主人公達と一年違いだから十才までには！と思つてたけど介入出来ず。…だが俺は諦めなかったね、十八の時に俺の星で小規模だがロストロギアの事件が起こったんだよ！

俺はデバイス無しで必死に練習した魔法と特典を使って見事解決してやったんだ！

だったら俺の魔力量を見た管理局がスカウトして来たって訳だ！

本当はなのは達が俺を六課にスカウトしてくれたら嬉しかったんだが原作通りFWは四人、だったらと思つて必死に自分の部隊長に志願したよ

そして俺は今此処にいる……何でも六課の試験期間が二年になつたらしい、これが原作と似た平行世界と言う事か？JS事件が終わつてしまつたのは残念だが六課にいれる時間が長くなつたのは嬉しい限りだ

残り一年、この完璧な容姿でハーレムを作つてやる！！

つと、その前にはやてての挨拶だな

部隊長室は………ここか

「失礼します」

「入つてええよ」

な、生はやて声！！

感動だ、この二十年間会いたかつた人がこの扉の奥に！！

扉が開く、な、なのはだと！！主人公キャラと初めに巡り合わせるなんてなんたる幸運！これが俺、「オリ主」の力というのか！！

「今日から配属されましたクラウドス・D・ドレアーです。一年という短い間ですがよろしくお願いします！」

やっべ！むっちゃ緊張してるし！やっぱり可愛いな〜二人とも……だが焦つちやいけねえ、ゆっくり、ゆっくりハーレムを作るんだ。慎重に丁寧にな！この一年が終わる頃には原作メンバー全員を性奴隷に………

「う、うん、よろしく頼むよ、期待………してるからな」

「はい」

お？緊張してるのか？やっぱりイケメンを目の前にするとはやてでも緊張するよな、早くもフラグゲットか？

「じゃ、じゃあ、今日は荷物を整理して休んでな、明日からデスクワークと訓練頑張ってもらおうから」

「はい」

なのは一言も喋らなかつたけど緊張していたのかな？いずれ俺のものになるんだから緊張しなくていいのにな  
ふふふ、明日からハーレム作りの為に頑張りますか！

「なあなのはちゃん」

「何かなはやてちゃん」

「初対面の相手には失礼やと思うんやけど……」

「大丈夫だよ、私も思ったから」

「うん、なんか……」

「「気持ち悪かった」」

side 3人称

「おやおや、仕事はいいのかい？テストアロツサ執務官殿？」

「お前に聞きたい事がある……スカリエツティ」

次元拘留所内、魔力で遮られた窓を挟んで話している人影が二人……一人はフェイトで一人はスカリエツティ

「お前の研究所内で話していた事……あれは本当か？」

「うむ、多すぎて何を聞きたいのか分からないのだが、もう少し絞って質問してくれないか？」

「全部だ！ケントはプロジェクトFによって作り出されたのか！？彼に心が無いとはどういう事だ！？飛天王とは何だ！？何処の研究者が彼を造り出した！？」

あらん限りの声を出して怒鳴りつける、スカリエツティは「ふむ」と一つ呟いた後腕を組む

「まあケント君が人造魔導師だと言う事は間違い無いね、デバイスが物語ってるよ」

「そんな……な……」

フエイトの声から落胆の言葉が漏れる、それ程までに今の言葉は彼女の傷をえぐった

「誰だ」

「む？」

「誰が彼を造り出した」

「そんな事を聞いてどうするんだい？」

「私が……ぜつたいに捕まえる」



決意の言葉、フェイト自身プロジェクトFによって造り出された身だ。

その傷は自分が一番理解している  
だからもう、この悲劇を繰り返さないためにも、どんな事があっても彼女は戦う事を選ぶ

「君に彼を捕まえる事が出来るとは到底無理だとはおもうがね」

「それでもだ!!」

さつき以上の怒鳴り声をあげる

それを見てスカリエッツィは引きつった笑みを浮かべると

「ククク、だったら教えよう、ケント君を造り出したのは「それ以上言えば首が飛びますよ、ジェイルスカリエッツィ」……………」

スカリエッツィの首元に短剣を押し当てているのはクオン、これ以上スカリエッツィが口を動かせば容赦無く彼女はスカリエッツィを殺すだろう

「どうして!?!」

「貴方方には関係の無い事です。余りすぎた真似をしますと、貴方も殺しますよ?フェイトさん」

キツ、とクオンはフェイトを睨みつける。

フェイトは睨まれた事によってこれ以上言葉が続かない

「スカリエッツィ、貴方は部屋に戻りなさい」

「人使いが荒いね、君は、せつかく

彼女に「絶望」を見せる事ができたというのに「

スカリエッツィはそう最後に言い残し、部屋を後にした

## オリキャラ設定2 (前書き)

コロコロ変わってすみません。

少しばかりネタバレ含むかもしれません

カイリとクラウスの名前がごっちゃになってましたので修正しました。(・・;) )

カ、カイリの名前がカレンさんに!!  
修正しましたすみませんm ) ) m

## オリキャラ設定2

ケント・スカイ

魔導師ランク      S S +

魔力量      S相当      (飛天王状態時 S S)

魔力光      白と黒の混色

階級      四代目本局大将

出身      ????

魔法形態      ミッド主体ベル力混合

年齢      19歳

身長      164cm

体重      51kg

希少能力1      閃光

希少能力2      飛天王状態 (未覚醒)

好きな事(物)      甘い物・読書・空を眺める・ラーメン  
t c      e

黒髪に青い目をした青年、顔は整っており背が高いと「かつこいい」なのだろうが残念ながら低いため「かわいい」と認識される事が多い。

ケントの過去を知っているのは親友である「クロノ・ハラオウン」  
「聖王教会騎士で少将である「カリム・グラシア」  
そしてかの三提督「レオーネ・フィルス」  
「ラルゴ・キール」  
「ミゼツトクローベル」など

アグスタの時に対峙した女性「カナ」とは面識があるがその仲間である「ボルス」や「ファンタジア」とは面識がない  
フェイトの好意には薄々気づいているが自分にはそんな資格はない  
と言って距離をとる。

また、自分を「化物」や「怪物」と言う時もしばしば……  
基本的に優しい性格であり誰からでも好かれるが、女性陣などから  
の目が身長の方があって、子供を見る目になって来ている事が最近  
の悩み

プロジェクトFの応用によって造り出された人造魔導師であり、初  
代飛天王メビウスの血を引き継いでいる。

過去にあった出来事により「心」が壊れてしまっていてシーザーの  
力により「擬似的な心」によって自分を保っている。

クオン

魔導師ランク            A A A +

魔力量                    A A A

魔力光                    純白

階級                      四代目本局大将補佐

魔法形態                天照式

出身                      本人にも分からない

年齢                      本人にも分からない

好きなもの(事)    油揚げ    きつねうどん    きつねそば    いなり寿  
司    ケントの役に立つ事

嫌いなもの(事)    違法研究者    マッドサイエンティスト    ケント  
の敵

容姿は森羅万象チヨコの四代絶影クオン    (作者が好きだから)

ケントの使い魔

冷静な性格で大人しい、ケントを尊敬、敬愛しており彼の右手とな  
って働く

バインドやシールド、幻術など、補助系のスペシャリスト、シール  
ドは耐久ランクSSとかなりの実力者だがその分、砲撃や斬撃など

の攻撃魔法のランクはCである  
クオンが使う遠距離で発動するプロテクションはクオンにしか出来ない、彼女曰く「なんか出来た」らしい……  
またシールドを他の場所に何個も展開させたり、バインドを瞬時に発動させたりといういと常識外れ  
昔、尻尾が九本であり「獣人」と珍しい狐という事から違法研究所で捕まり、毎日地獄の様な日々をおくっていた  
ケントがその違法研究所を破壊しクオンを発見、衰弱して死んでしまったところをケントが使い魔にした

カイリ・マーベル

魔導師ランク S +

魔力量 S +

魔力光 緑

階級 三代目地上本部大将補佐

魔法形態 近代ベルカ式

出身 第12管理世界フェディキア

年齢 18歳

身長 159cm

好きな事(物) 熱く燃えあがれる様な戦い・料理・武器・風  
呂・ぬいぐるみ etc

嫌いな事(物) 弱々しいやつ・デブいやつ etc

性格はハンドル持ったら性格変わるあれ……カイリは武器を持った  
らシグナム以上の超戦闘狂になる  
二丁三メートルにもなる大刀を片手で振り回したりとかなりの力持ち  
武器を持っていないときは逆に弱々しくすぐに謝ったりする引ッ込  
み思案な女性であり、戦闘時の彼女とは正反対の女性になる

クラウドス・D・ドレアー

魔導師ランク A-

魔力量 AAA

魔力光 銀

階級 二等空士

魔法形態 ミッド式 (カードリッジシステム有り)



出身 第147管理外世界トルディア

年齢 二十歳

身長 185cm

体重 76kg

好きな事(物) エロい事・原作キャラ・妄想 e t c

嫌いな事(物) 男キャラ・ケント・運動 e t c

特典1 銀髪オッドアイのイケメン

特典2 ニコポ・ナデポ

特典3 幻想殺し (自分の魔力には不干涉)

転生者であり前世はデブのきもオタ、死ぬときは白昼堂々エロ本読みながら歩いていてトラックに跳ねられ死亡

まっくらな場所で神?に出会いこの世界に転生したが生まれた場所が管理外世界……

十八年間原作に関わろうと努力し、小規模のロストロギア事件を解決した事により管理局の目に留まった

三つまで貰える特典の内二つ目のニコポ・ナデポによって本局でかなりの数の女性を惚れさせたが原作キャラには通用しない。ちなみに本人はそれを知らない

右手にやどる幻想殺しは自分の魔力には無感情な為魔力を使いながら戦う事が出来る。  
イレギュラーであり、自分の一番お気に入りであるフェイトが好意を寄せているケントを目の敵にしている。  
自称オリ主

カナ・スカイ

魔導師ランク      SS+相当

魔力量      SS相当

魔力光      漆黑

魔法形態      ミッド主体ベルカ混合

出身      ????

年齢      23歳

身長      167cm

希少能力1      先駆け

希少能力2      絶対破壊

希少能力3      飛天王状態「黒ノ王」

ケントの姉であり七代目飛天王「ガゼル」の血を引き継いでケントと同じ様に造り出された人造魔導師

黒髪で青い目をし、胸の膨らみはシグナム達に劣らない

漆黒の槍をデバイスにして四代目大将であるケントに余裕勝ちする  
実力を持つ

金髪の謎の青年を主とし、行動する。

基本的には弟思い

飛天王状態を黒ノ王にし、完全に覚醒させている



「やはり、きつい……この…量は………」

「しっかりしなさいよ、ホントに体力ないわねあんた」

「あはははは」

六課訓練所、そこにorzしているクラウドス、それを上から目線で見下げてるティアナと愛想笑いしているスバルの姿がある。その隣にはエリオとキャラコの姿もあり皆訓練服だ……

「最年長なんだからしっかりしなさい、足引つ張ったら容赦しないわよ」

「い、イエッサー………」

時間はもうお昼、丁度午前の訓練が終わった時間だろう。

エリキャラココンビは仲良くストレッチしているがクラウドスは汗をダラダラ流し非常に暑苦しい、いくら転生したとはいえ以前は運動なんてからっきしの駄目人間なのだ、当然と言えば当然だろう。

一週間前、朝の自己紹介の時点では皆からの反応は悪くは無かった、むしろ良かった方だろう。

何しろヴィータ並の魔力を持つ人間だ。戦力アップには十分だろう。だが魔力はあっても経験や体力はどうしよもない、朝のアップから疲労困憊で歩けない程にまでなっていたのだ。この訓練メニューに慣れてしまっている人間から見れば悪態の一つつきたくなるだろう。

このメニューに慣れてしまっているFW陣が異常なだけだが……

「フツ、あと一週間……いや、三日で克服してみせるさ、なぐに、俺はオリ主、出来ない事などない!!」

「はいはい期待しとく、それよりもスバル、エリオ、キャロ、ご飯食べに行きましょう」

「待ってくれティアナ、動けないだ、手を貸してくれ」

「オリ主なんですよ、だったら自分で立ちなさい」

「ツンデレだな、ティアナは……」

「ねえスバル、殴っていいかしら、こいつ」

「てい、ティア!!少し落ち着こ?」

「我々の世界ではそれをご褒美という」

「永眠しろ!!」

今日の六課は平和である

「旅行？」

「うふふ、そうよ」

機動六課の部隊長室、そこにこの部屋の主でもあるはやてが空中に展開されたモニターを見ながら声をあげる

隣にはいつもの様にリインがフヨフヨと浮いていないのでどうやら  
仕事中らしい

そしてモニターに通して話し合っているのは聖王教会の騎士、カリムだ

「ちよつ、いきなりすぎへんか！？事件が終わってからまだ殆ど経つてへんねんで！！管理局が今休みくれるとは思えへんし」

「あら？休みなら取れてるわよ？」

「うそ！？」

またまたはやては驚きの声をあげる、このクソ忙しい時にいくら有休が溜まっている六課の隊長陣といえども休みなど取る事は不可能なはずだ

「彼は三提督を除いては本局のトップよ？それぐらい簡単だとおも  
うけど」

「は、発案者はケント君か!？」

彼、ケント・スカイは詳しくはまだ聞いていないが機動六課に二等空尉と名乗りこの六課にいたが本当は本局の大将である事が事件の内に発覚したのだ。彼の意見ならば少なからず上層部はその意見に賛成するだろう。

だが……………

「なんでよりもよって旅行？」

「言っていたわよ」「あいつらは仕事が恋人のワーカーホリックかああああ!!」「って、事件の後の処理のせいでろくに休めてないってわかったでしょう」「

「反論でけへん……………」

「だから強制的に休ませるって」

「そうか」

あははははと乾いた笑いをしてみる

「お手上げやわ、私はとにかくなのはちゃんやフェイトちゃんもかなり疲れたまっとうと思うしな、行き先は何処なん？」

「やっぱり都会より体を休めるには自然がたくさんあった方がいいかなって、だから行き先は……………」



第23管理世界「ルヴェラ」よ」

「くーー！！歩けるって最高！！」

オツスおらケント！！

いきなり声を上げたせいで道ゆく人が振り向いてるが気にしない、  
そこのお母さん、子供を「見てはいけません」いうな……………

それよりも聞いてくれ、やっと、やっと「歩くこと」が許可された  
んだよ！！

確かに酷い怪我で「絶対安静」って言われてたさ、けど一日中ベッ  
ドの上、更にはシグナムさんが……………

「これがお前の分の仕事だ、一日中寝ているのなど退屈だろう？」

と、紙の束を持ってきたときは断れなかった、だって目の下にくま  
作って恨めしそうにこつち睨んでくるんだぜ！？

更には顔は「断ったら叩き斬る」って表情してるし……………

なんでも一週間前、終わったと思って脱力しきっていた六課に追加  
の仕事がきたんだと、そのせいで隊長陣はろくに寝れず……………

そこで考えついたのが旅行！！

都市部ならあのワーカーホリック娘達は無理にだも仕事しそうだから自然保護区がある場所という考えだ！！

旅行中なら俺への仕事も無いと思うしな！！

その事をクロノに伝えたら凄く嫌な顔してたけど……大丈夫だろう

「大丈夫な筈がないだろう、よりもよってこんな時期に……」

「いつからいたし、てかなんで俺の考えがわかる？」

何時の間にか後ろにはクロノ、ストーカーか？

「途中から口に出してたぞ」

マジか……

「上の許可取るの大変だったんだからな、まあフェイト達はやはり働きすぎだと思つから提案自体は悪くはないが」

「まあそこら辺は気にすんなくて、数日抜けるぐらいいたいたいしたことないだろ！」

クロノが一度マリアナ海溝より深いため息をつく、落ち込みすぎだよ……

するとクロノが大きく息を吸い込んで……

「だからと言ってなんでさりげなく僕の所に君の仕事が混ざってるんだ……」

「えつと……気分？」

謝るから謝るから！！だから無言でデュランダル向けてくるのやめて！！目が殺る気だよ！！

「まったく、預かり物だ、返しとくよ」

「？、ってシーザーか？」

「彼女から伝言だ「定期的にメンテにくる事！デバイスに余り無茶はさせてはいけません！！」だってさ」

>クソ馬鹿マスター<

「す、すみません」

第42話

この頃びっくりするぐらい書けない……軽いスランプ状態だー

間が長い上に短い……さらに駄文

ホントにやばいかも……(´・`・´)

第42話

「この頃びっくりするぐらい書けない……軽いスランプ状態だー」

ミッドチルダ、とある首都空港  
そこでは……………

「サ、サイン下さい!!」

「ずりいぞ!!俺も!!」

「何言ってるのよ!私が先よ」

「握手して下さい!!」

そこには人人人…………… 以下略

大勢の人の波が出来上がってしまったている。  
そしてその中心にいるのが……………

「えっと……………にはは」

「す、すごい人……………」

「あちゃー、やってしもうたなー」

「幾らなんでもこりゃねーだろ」

そう、ケントを含めた六課隊長陣とFW達だ。

スカリエッティによる大規模テロからはや一ヶ月ちょっと……………ケ

ントも無事退院し、今日からケントが企画した旅行がスタートなのだ。

勿論六課全員で行って仕事が全く出来ないのもあれなので三グループに別れての旅行……そうして始めは前線メンバー達というわけだ。そして六課といえば事件を解決に導いた「奇跡の部隊」でありケントに至ってはミッドチルダが壊滅する様なゆりかごによる攻撃を「たった一人」で食い止めたある意味「英雄」だ。「大将」というのはうっかりスカさんが六課にのみ公開してしまっただけであって一様管理局の機密事項だ。まだ公には知られてはいないがやはりそんな英雄達の顔なんて当たり前のように知られてしまっている状態で空港に来たならば当然、誰かが気付いて話しかける。それを周りの人間が聞いてまた集まってくる。それを繰り返す今この状況だ……

「これじゃあ前に進めませんね」

「エリオ、キャラ、ちゃんと手をつないどころね。迷子になったら大変だしね」

「あ、はい！」

「ティアティア、向こうのアイス屋さん美味しそうだよ！行こう行こう！！」

「この状況でどうやって行けてゆうのよ馬鹿スバル！」

と、警備員が目の前で食い止めてくれているとはいえこれでは前に進めない

ちなみに今いる場所は21番ゲートで自分達が乗る次元航空船がある場所は40番ゲートだ。実質まだまだある

「ん、じゃっお願い」

「？誰と話とつたん？」

ケントが何時の間にか誰かと通信していた。それを見てはやてが首を傾げる

「ああ、パイロットですよ、船の。21番ゲートまで持って来てくれるとは様に頼みましたからすぐ来ますよ」

「え？でも私ら以外にも沢山乗る人はおるやろ………そんな事してほんまにいいん？」

「大丈夫ですよ、俺らが乗る船は「貸切」ですから」

「……………は？」

全員の心が一つになったとは言つまでもない

「誰だよあいつ……………」

「貸切」の次元航空船の中……………椅子に座りながらクラウドは一人小さく呟く、その視線の先には彼が知らない人物、いや、一様自己紹介もしたしこの一ヶ月の間にちよこちよこ聞いていたので知らないわけでは無いのだがそこではない……………

彼は転生者だ……………

死んで神？のような人物に助けてもらい特典を持ってこの世界に生まれてきた。

当然この「リリカルなのは」の世界を希望したのも彼だ。

だが彼が遭遇しているのは原作では無かった設定。

完全なるイレギュラーの存在……………

（俺がいる事によって生まれたイレギュラーか？それとも他の……………）

頭の中で様々な可能性が渦巻く

彼が六課の副隊長並の力を持っている以上、今の実力でどうこうできる話ではない

（まずはしばらく様子見か……………）

彼は知らない

ケントは転生者などでは無い事を

彼が、管理局の実質的トップだという事も



「ケント兄さん」

「ん？どうしたエリオ？」

自分の席で雑誌を読んでたらさっきまで遊んでいたエリオが声をかけてきた

この船は貸切だから多少騒いでも大丈夫だ。

なのでちびっ子達は探検やら鬼ごっこをしていたのだが今は疲れてぐったりしている

だけどエリオ、キャラ、ヴィヴィオはいいとしてなんでスバル、お前も混ざってたんだ？

ちなみに「兄さん」というのはヴィヴィオが俺の事をそう呼ぶからエリオやキャラもそう呼び始めただけだ

「今から僕たちが行く所ってどんな所なんですか？」

「どんな所か、まあ大自然っていうのが妥当かな………これ見てみる」

自分が見ていた雑誌を見せる

そこには高くそびえ立つ山や遙か遠くの水平線と夕焼けが見えるエメラルドグリーン的大海

「向こうは今夏だからな、海に入り放題だ」

「凄く、綺麗です」

雑誌を食い入る様に見ながら目をキラキラさせるエリオ、かわええ

……

「あと一時間ぐらいだからなおりる準備しとけよ」

「あつ、はい！」

元気よく挨拶をして走って行くエリオ、雑誌……もっていくなよ……

……

「ありがとね」

「いきなりどうしたんですか？」

隣にいるフェイトさんがいきなり声をかけてくる

「エリオとキャロがこんなに喜んでるの久しぶりだからさ……」

「そんな事無いですよ、確かにあいつらははちょっと大人びてますが、けどフェイトさんと一緒にいる時、凄い嬉しそうな顔しますから」

「そうかな？」

「少なくとも俺にはそう見えますよ、少しは自信を持っていいんじゃないですか？」

そういうと「っ」「うん」と頷いて二人の元へ駆け寄って行く

フェイトさんは事件が終わってからまだ一度も俺の事を追求しようとはしない

スカリエツティのラボでの出来事、聞きたい事は山ほどある筈なのに彼女は待っていてくれる。俺が自分から話出すのを……

<間もなくルヴェラ空港に到着します。搭乗中のお客様は……>

アナウンスが流れる、まあせっかくの旅行だ、辛気臭い事は出来るだけ無しにして楽しもう!!

これが……俺にとって最後の旅行になるかもしれないから……

## 第43話

作者は熱でノックダウンです

「海だー!!」

「うみだあー!!」

快晴の空

まばゆいくらいに光り輝く海

気持ちの良い潮風

ルヴェラ旅行初日

予定よりも少し早く現地につく事ができ今は丁度お昼前

ホテルに大半の荷物をおいた後、ヴィヴィオやスバルがはしゃぎまくって速攻ホテルのビーチに来て見た訳だがいやはや……

ミッドチルダとはまた違う風と臭いがして気持ちがいい

周りの男性客が俺に恨みの視線を向けて来るが承知の上だ………気にしたらいけない………

分かり切った事だが六課の前線メンバー達はみんな美女ばかりだその美女達が今に至っては全員水着……俺も着替え終わって合流した時は少し見とれてしまったし………

エリオは子供だから良いとして俺は十九だ、身長的事を入れたら高校生ぐらいにも見えなくはないがそれでも子供とは違い「男性」だそんな男性の俺が水着美女達の真ん中にいるとすれば………こんな事は必然だ………

男といえばクラウスもいるがあいつはいわゆる「逆ナン」と言うものをされて少し遠くの方で大量の女の子に囲まれている

どうやら男友達数人と来ていたらしく、人数的には同じぐらいなのだがその男子達は放つたらかした。可哀想に

「はあ」

「ため息なんてどないしたん？美女ばかりの海がそんなに不満か」

俺が周りからの視線に耐えていると唐突に狸……もとい借金執事が声をかけてきた

「なんか今ものすごい失礼な事言われた気がすんねんけど」

「気のせいだと思いますよ？あと不満なんて全然ありませんよ、ただ世の中の男性の殆どを敵に回してる様な気がして」

「？、ようわからんけどほら、ビーチバレーしようや！！シグナムとフェイトちゃんもするそうやから」

ビーチバレーね、よくよく見て見ると金髪美女のフェイトさんが元気よくこっちに手を振ってこれまた美女のシグナムさんが腕を組みみながら待っている

てかフェイトさん……黒のビキニって大胆すぎません……道ゆく男性が全員チラ見してますよ……あっ、今一人の青年が彼女にひっぱたかれた……

「な、なにガン見しとんや、フェイトちゃんのナイスバディにやられたか？」

「な、なにを！！」

「だってずっとフェイトちゃん見とんやんか、胸か！胸がええんか  
！！」

「ビ、ビーチバレーでしたっけ！？頑張るぞ、オー」

「あっ！逃げるな〜！」

俺だって男の子なんです

「手な訳で、最初っから全力で行きますよ！」

「もとより負けるつもりは無いよ！！よろしくねケント！！」

組み分けは至って簡単で

ミッドVSベルカの戦い

向こうはシグナムさんとはやてさん、厄介なのはシグナムさんかな？

ああ、また男共からの恨みと嫉妬の視線が……

「ほないくで〜!」

はやてさんが掛け声とともにサーブをする、サーブする前に少しだけニヤリと笑った様に見えたのは気のせいだろうか?

「フェイトさん!!」

「任せて!」

レシーブ、トスと上手い具合に繋げ強烈なスパイクをフェイトさんが放つ、てか早え!弾丸かよ!!

「主!」

「任せた!シグナム!!」

だがそんな弾丸スパイクもシグナムさんによって防がれはやてさんがトスを放つ、そしてそのまま腕を振り上げ……

「紫電」

「は?」

「一閃!!」

ズバゴン、というピーチバレーでは絶対聞かない、漫画の様な音をして、ギョルギョルギョルとボールが砂浜にめり込み回転した後静かに静止する、なつ、

「なんですか今の!!」

「ふふん、魔法の使用禁止なんて一言も言っていないで」

「卑怯な……」

「卑怯でも狸でもなんとでも言い!!この勝負、勝たせて貰うで!!」

ハツハツハツと悪役に良くありそうな高笑いをしながら得意そうに笑うはやてさんとどや顔するシグナムさん

「フェイトさん……」

「分かってるよケント」

「この勝負貰ったー」

甲高い声をあげてはやて……もとい狸がサーブをしてくる。少し痛い目にあってもらいますよ

そして……

ズバァァン!!

「……え？」

ベルカ組が硬直している、まあ当たり前だろう、だってまだサーブをして相手コートにボールが入った直前にボールが跳ね返ってきた



んだから

「え〜と……今のは？」

「閃光ですよはやてさん、ボールまでちょうどそこそくで移動しては  
じき返させてもらいました」

「なっ！？リアルスキルなんてずるいで！！」

「勝負なんて勝てばいいと言ったのは何処の狸ですか！！全力で行  
きますよフェイトさん」

「徹底的に叩き潰すよケント！！」

「それで勝ったと思ったたら大間違いやで！！」

「この勝負、負けられん！！」

そこから始まったどこぞの超次元サッカー顔負けのビーチバレー  
てかバレーってよんでいいのか？

「ファイアトルネード！！」

「うおおおおお！！くらえ！ゴッ　ハンドオオオオ！！」

「なにお！響け！終焉の笛　ラグナロク　ボールバージョン！！」

「その程度じゃ私達には勝てないよ！はやて！！」

「ぐおおおお！紫電一閃！！」

「同じてが通用するかああお！！」

結局試合は引き分け、今から昼ご飯らしいから終了だ。周りを見渡すと地形が変わっていたけど何時の間にかシャマルさん達によって結界が張られていたので大丈夫だろう

「次は負けへんで」

「それはこっちのセリフですよ」

取り合えず腹減ったんで飯にしよう

「こりゃまた……」

俺達が移動した後、そこにあつたのは戦場だった  
てかこれ一回なかったか？たしか……そう地球だ地球！！あのとき  
もたしかバーベキュー、そして今回も……

「教官命令だ！！スバル、その肉あたしによこせ！！」

「職務乱用ですよヴィータさん！！これは私が育てた肉なのであ  
げませ〜んってああ！！シグナムさん！！」

「油断したなスバル、その一瞬が命取りになるぞ」

うん、まあ今回もバーベキューな訳であって前と同じ様に戦場と楽  
園で別れてある

戦場の方はスバルやヴィータさんや今来たシグナムさん達、ちなみ  
に肉を焼いているのはなのはさんだ、はやt……………狸はさっきの試  
合で体力を使い果たしベンチの上でぐたってる

スバル、お前の隣にある串の山はなんだ？もしかしてそれ全部お前  
が食べたのか？

クラウスはこの場にはいないどうやらまだ遊んでいるらしいな……

「ケント君ケント君」

「何ですかシヤマル先生？」

「はいこれ」

シヤマル先生が差し出したのは……………何だよこれ……………どうやったら肉  
が緑色に焼けるんだよ……………てかこの野菜なに？なんかウネウネ動い  
てる様に見えるんだけど……………

「食べて「遠慮しておきます」ど、どうして……………」

そんな目をウルウルされても食べないものは食べません

「大体前回そのせいで俺、死の淵をさまよったんですからね！！」

「こ、今回は大丈夫よ!!」「焼いただけ」だから」

「焼いただけならどうして肉が緑色になるんですか!!」

「こっちの方が目に良いわよ」

「……………」。

駄目だこの人、早く何とかしないと……

「食べません!!」

「そんな事いわずに」

「その辺にしとけシャマル…………お前の料理を食べば生きては帰れま  
い」

「おう、ケントを殺したく無いんだったらやめろ」

「二人とも酷い!!」

ヴィータさんとシグナムさんのおかげで何とか踏みとどまってくれ  
た様子…………

「それでも諦めな——い!!」

「「なっ!!」」

バ、バインド!!…ちよっ、ちよっど!!…!

「あああああああ！！」

その瞬間、俺の意識はブラックアウトした

「はっ！？俺は……」

「気がついた？」

目が覚めると俺はレジャーシートに仰向けになって寝ており隣には  
なのはさんがいた  
空はもうオレンジ色になっていてもう夕方だ……

「お、俺はなんで気絶していたんだ？」

「覚えてないの？」

「えつと……」

何故だろう？思い出そうとすると体が全力で拒絶する

「無理に思い出さなくてもいいよ、むしろ忘れたほうが身のためだし」

「そ、そうですか？」

「にははは（シャル先生のフルコースを全て食べたなんて死んでもいえない）……」

まあ簡単だ。

シャル先生の料理で気絶したのならシャル先生の料理で復活させれば良いのではないかという考え  
その考え通り気絶しているケント食べさせたのだが……結果、悪化した

そんな事をケントが知るはずも無い

「ん？もう夕方ですか、みんなは？」

「もうすぐ戻って来ると思うよ。ケント君はしばらく横になっておいた方がいいよ」

「お言葉に甘えさせてもらいます」

なのはさんはクスツと笑うと周りの荷物などを整理し始める  
手伝いたいが無故だか体が上手く動かない  
ホントに何があったんだ？

まあそれからみんなが帰って来てからホテルに戻った。  
しきりに体調の事を心配してくれたのだけど……ホントに何があっ  
たんだ？

## 第44話 男のロマン

海から帰って来て大体一時間、みんなそれぞれの部屋に戻ってゆったりしてるだろう。そんな中俺と相部屋となったクラウスの野郎は……はあ……

「おおおおおおおおおー!!」

「……………」

「おおおおおおおおおー!!」

「ゴホンッ……………」

「おっ、おっ、うおおおおおおおー!!」

「だー!!もう!好い加減にしやがれ!」

「なぐにさつきから恥ずかしくてんですか?男のロマンでしょう?」

「何がロマンだ!何が!!ぶっ壊すぞそれ!!」

「ちよっ!壊すのはやめて下さい!!俺のコレクションの一部なんですから!」

「だからってこんなとこまで持ってくんなコンチクショーー!!」



泣)」

なんでAV見てんだよバカヤロー!!

そんなもの旅行に必要か!?

なんで海から帰って来て速攻見てんだよ!!

相部屋の俺の事も考えるコンチクショー!

「男だったら誰でも喜びません?」

「だからってエリオがいる前で見始めるか普通!? フェイトさん達の部屋に避難させて正解だったよバカヤロー!!」

「エリオも十歳なんですからこれくらい……」

「それ十八禁だよな!? そうだよな!!」

「まあまあ、今はエリオはいないんですし二人で見ましようよ!!」

「黙れエエエエ!! しかもなんだ!! 主演の女優が隊長たちに似てるのはわざとなのか!! 喧嘩売ってんのかバカヤロー!!」

「怒ったら怖い茶髪魔王様と気弱な金髪美女、そして関西弁でノリノリな茶髪美人が主演ですよ!! こんばんのオカズはこれで「よし壊す」だっ!! ちよっ!! やめああああああ!!」

滝の様に涙を流す変態、もといクラウドは放っておく  
その壊れたAVだったものはちゃんと片付けておけよ

「フフフフフフ」

「？、シヨックで頭がイかれたか？」

「甘い、甘いですよケントさん！！」

こんな事があるうかとちゃんと言備を持って来ておいたんですよ！！

こっちはピンクの巨乳ポニテとロリツ子三つ編み幼女！！更には

「シヨットオナムーブ」ぎゃあああああ！！………その幻想をぶち殺す！！」

「いつ見てもすげエなそのスキル」

幻想殺し（イマジンプレイカー）だったっけ？異能の力なら全てを打ち消すとかどんなスキルだよ

「この宝だけは譲れな「シュート」え？あああああああ！！」

そのかわり右手触れてないと効果が発動しない、だったら小さな魔力弾で破壊してしまえばいいだけだ

「不幸だー！！」とか叫んでるが関係ない、自業自得だ

「はあ、それよりそろそろ風呂に行くんだけどお前は「行くに決まってるじゃないですか！！」そ、そうか」

いきなり元気になりやがった！！

こいつ風呂好きなのか？

「そうと決まればさっそく実行！！行きますよケントさん！！いざ、楽園へ！！」

>ケント<

「なんだよシーザー？」

> 頑張りなさい<

「はあ、ありがとうよ」

なんだか嫌な予感するのは俺だけか？

「ザッブーン!!」

「ギューン!!」

「え、む、む、」

「キャロ、真似しちや駄目よ。ヴィヴィオも馬鹿スバルの真似しな  
い」

「ティアナの言うとうりだよヴィヴィオ、あとスバル、ヴィヴィオ  
に何か変な事覚えさせたら O H A N A S I だよ」

「は、はいはい……」

スバルが体を震わせる、隣でヴィヴィオが頭に「？」マークを浮かべてるが彼女も近いうちにその恐怖を味わう事は確定だ  
ちなみにここは女風呂であり六課女性メンバー全員が大集合している  
更に何故だかは知らないが他の女性客が風呂には今一人もいないので貸し切りに近い状態になっている

「くはー、生き返る〜」

「ホントに気持ちいいね」

「ブクブク」

「ん？どうしたのエリオ君？」

「何でもないよキャロ……てっ！！後ろ向いて後ろ！！」

「??？」

ちなみにエリオは前回同様女風呂に強制連行、ケントやザフィーラに助けを求めたがコンマ一秒で見捨てられクラウスに至ってはエリオにカメラを押し付けてきた  
まあそのカメラは一瞬で灰と化してしまったのだが……

「そつやそつやフェイトちゃん」

「？、どうしたのはやて？」

そんな中はやてがフェイトに目をキラキラさせながら声をかける

「前から思ってたんやけどな、ズバリ！ケント君を好きになった

理由はなんなん!!」

「な、な、そ、それは……」

いきなりの質問にフェイトは顔を赤らめ、はやてはフェイトにグイグイ詰め寄る

その目は捕食者の目でありかなり怪しい

「はよはよ言うてみい、恥ずかしがる必要なんてないで」

「うっうっ」

フェイトは更に顔を赤らめはやてはその様子をおちよくるかの様にニヤニヤと眺める。

というか実際におちよくっているのだろう

そんなやり取りが少し続いたあと、心の整理が出来たのかフェイトが口を開く

「匂い……かな?」

「匂い??」

予想してなかった発言にはやては頭を捻らせる

「自分でもよく分からないんだけどね、なんだか、懐かしいんだ。でも何でだか分からない」

「んっ、懐かしいな」

「うん」

フェイトは無意識に空を眺める  
雲一つなく、満点の星空がそこにはあった

「離して下さい！！風呂と言ったらやる事は一つでしょう！！」

「訳わかんねえよ！！てかばれたら俺にもとばっちりが来るからやめるー！」

「何言ってるんですか！！これは男ならば必ず為せばならない使命！  
！ケントさんも一緒に！！！」

「何が使命だ何が！！！」

はい、嫌な予感的中しました！！  
今この馬鹿が女風呂覗こうと必死になっております！！  
もしばれたら男風呂はピンクの奔流によって吹っ飛ぶぞ！！

「はっなっせ」

「だ〜め〜だ〜」

くそ、俺だって男なんだよ！！覗きをしたい気持ちもわかるがどれだけのリスクか分かってんのか！？

「彼女達の裸体はそれぐらいの価値があるとは思いませんか！！」

「ああそうだな！！あれだけの美女が裸で集まっている時など殆どないだろうよ！！だが死ぬぞ！！確実に死ぬぞ！！」

「くっ、こうなれば……」

クラウドが力を抜く、やっと大人しく……って！！

「飛行魔法使ってんじゃねーよ！！」

「これで……」

あっ、という間に男風呂と女風呂との仕切り  
の高さまで到達した瞬間

俺たちはピンク、黄色、白の三色の光によって星になった

第45話

ルヴェラ鉱山遺跡(前書き)

ルヴェラという単語で皆さんは気づきましたか？



## 第45話

## ルヴェラ鉱山遺跡

「はっ、ここは？」

「む、目が覚めたか」

気がついたら部屋のベット、空には太陽が登っていて小鳥の鳴き声が聞こえる

隣には人型になったザフィーラがいてこっちを見つめている

「俺はなにを……………」

「覚えていないのか？」

海から帰ってきて、風呂に行つてそれから……

「撃墜された？」

「よく無事でいられたものだ、三人分の砲撃魔法だぞ」

「マジか」

色からしてなのはさん、フェイトさん、はやてさんだろう。そういやクラウドは？

「クラウドはまだ気絶している。それよりこれ、どつするのだ？」

「ん？どれどれ？」

なんだ？えつと……………露天風呂修理費……………は？

「ザフィーラさん、これは……………」

「昨日の砲撃によつて男風呂が全壊してな、その修理費だ」

「まてまてまて、何故俺に？俺はどちらかというと被害者なのだが」

「主はやて曰く「大将なんやからこれ位軽いやる」だ、そうだ」

「……………クロノに任そう」

「いいのか？」

「やってられるか！！丸投げだ丸投げ！！」

帰って早々永久凍結魔法をくらったのは余談である

時間は経って丁度お昼ごろ、クラウドも目を覚まし女性陣達と合流  
終始クラウドは白い目で見られていたけど本人はきずいておらずス  
ルー、あとなんでクラウドが覗こうとしていたのか分かったのかと  
聞いて見たら最初から丸聞こえだったというので出て来たところを  
撃ち落とす準備をしていたらしい。

俺は完全に被害者って訳だ。

そんな俺たちはいくつかのグループに別れて行動していたりする。  
ちなみに俺は一人だ。

> てかなんで一人なの？友達いないの？<

「うっせいシーザー、普通に考えたら自然とこうなるだろ」

ヴィヴィオとママ二人、八神一家とFW陣、そうなると自然に俺と  
クラウドが余る訳だがクラウド曰く「どうしてもやらないといけな  
い事がある」らしい。

なのはさん達は声をかけてくれたが生憎と俺は家族団欒の時間を邪  
魔したりなんてしたくないからゆっくりしたいと言ってルヴェラ北  
部にある港町をブラブラしている

> 素直について行けばいいのに<

「んなもん俺の勝手だろ、あ、おばちゃん、貝焼き串一本頂戴」

「はいよ〜」

ここは港町なので海産物は結構美味しかったりする。なので今は昼  
飯をかねて食べ歩き中だったりもする。

> ねえねえケント、クラウドが言ってた「やらないといけない事」  
ってなんなんでしょうね<

「さあな、どうせ女絡みのことだろ？」

> それにしては結構真剣だったわよ？<

「そつだなく、おっ、ありがとよおばちゃん」

ホタテの様な貝が三つ刺さっていてうまそつだ。火傷しない様に注意だな

> 女絡みで遺跡なんか行くかしら？<

「なんでそんな事わかるんだ？」

> 彼にコッソリスフィアを<

「それ要するにストーカーか？」

> 失礼ね、尾行よ、び、こ、う<

全くこいつは……だがなんで遺跡に行くんだ？あいつの性格からしてそんな所似合わないんだが……それにやらないといけない事って……

「今何処にいる？」

> 結構近くよ、行き先はルヴェラ鉾山遺跡の様ね<

「行ってみるか、暇だし」

奴に限って無いとは思うが盗みとかだったら軽く絞めないといけな  
いからな、余談だが遺跡っていう所には調査済みとはいえまだまだ  
歴史的貴重な物は沢山残っている。そうした物を拝借して行く奴ら  
は多いしもしクラウドが小遣い稼ぎにそんなことをしているのなら  
は見過ごせない

「んじゃ、行くか」

> ナビは任せなさい!! <

ルヴェラ、俺はこれを聞いた時衝撃が走った。

何故ならばこの世界は原作通りに進むと今から六年後、新暦008  
1年に第四期、Forceが始まる。その舞台になるのがルヴェラ  
であり、目の前にある鉱山遺跡だ。

「とは言っても、まだ実験が始まっているか分からないんだけどな」

俺がしたいのはここで実験素材にされている人の救出とヒロイン、  
リレイ・シヨトゼリックの確保。  
そのせいで原作と大きく離れるかもしれないが人の命とは変えられ  
ない

「んじゃ、行くか」

斜面を転ばない様に慎重に降り、遺跡に近づく、今の所は誰もいない

「やっぱりまだ実験は始まっていないのか？」

自分が見た原作でもいつから実験が始まったか明確な時期は教えて  
くれない。だがヴァイゼンの事件はもう起こっているだろうから  
エクリプス自体はあるはずだ

「何にもねーな」

行けども行けども瓦礫があるばかりで研究室などは見えて来ない、  
彼が帰ろうとした瞬間……

「それ」は現れた

「なっ！！」

「それ」はクラウドに向かって飛びかかるがクラウドは自身のデバ  
イス「ガジリアス」とつさに起動させて攻撃を受け流す。

ちなみにガジリアスは起動した場合二本の刀となりクラウドは二刀

流の構えをとる

「何なんだよこいつ」

目の前にいるのは「異形」の生物、人の形はしているが手を使つての四足歩行、骨の形は大きく変わっており体からは黒い毛が生えていて背中には縦に大きく引き裂かれていてウネウネとした触手の様な物が生えている。例えるならばリアルバイオハザードだ。

「ガアッ!！」

「っ!！」

異形の生物が飛びかかり必死にクラウドはデバイスでガードする。だが予想以上に重たかったのかクラウドはそのまま吹っ飛ばされ近くの柱にドンッ、と高い音を立ててぶつかる

「う、うおおおおお!!！」

クラウドはすぐさまデバイスを待機状態にさせ新たなデバイスを起動させる

手に握られたのは二つの銃、名は「ルドルフ」

「くらいやがれええええ!!！」

自分が持ち得るだけの魔力を使つての一斉掃射、今の彼の中にあるのは純粹な死への恐怖、その恐怖がクラウドの攻撃をより激しくさせ、異形の生物は爆発の煙により見えなくなる

「はあはあ、どうだよ………流石に死んだか？」

へへ、と笑ながら立ち上がりその場を見つめる。

煙が晴れるとそこにはぐったりとした異形の生物と小さなクレータ

……

「オリ主に逆らうからこうなんだよ、手間かけさせやがって」

余裕の表情で彼はその生物を見つめる。それは自分の事を「オリ主」と認める自信からなのだろう、だがその油断が時に戦場では命取りになる

「グアア!!」

「えっ？がはっ!!」

一瞬、ほんの一瞬でその生物は何事も無かったかの様に起き上がるとクラウドの首を鷲掴みにすると壁に叩きつける

その人間離れした衝撃はバリアジャケットなど無いかの様に貫通しクラウドの体は悲鳴をあげる

「がはっ、がっ」

「m@pmgwtm殺すtgamt pm」

明確な殺意の言葉、更にクラウドの首を締め上げる力はどんどん強くなり声にならない悲鳴を上げる、そしてもう片方の手を心臓に狙いを定め始める

「pjtdwm死ねtpnwjm」



「！！！！！！」

そしてそのまま心臓を突き破

らなかった

ズシャツという音が聞こえたかと思えば異形の生物の右腕、クラウドの首を絞めていた腕は宙に舞っていた。  
切断された腕からは血がドバドバと吹き出しクラウドの顔を紅く染める

「危機一髪ってか？大丈夫かよ、クラウド？」

「ケント……さん？」

現れたのはここにいるはずの無いケント、だがそんな事は今の彼にとってはどうでもよくだただただ助けられた事に感謝する

「グギヤ、グギヤ、ガアアアアア！！」

「えっ？」

だがその油断もまた命取りでありクラウドは発狂した生物によって

吹き飛ばされ気絶する、ケントはやれやれ、といった感じでクラウスの元に近づき命に別条は無いか確かめた後片腕を失った生物へと向き直る

「お前は人間か？それとも害を成す化け物か？どちらかによって対応の仕方が変わってくるんだが「グギヤアアアアアア！」……個人的な意見で化け物決定だ馬鹿野郎」

そう言って異形の生物、もとい化け物に言い放つ

「という訳で死体決定だ。セツトアップ」

その瞬間、化け物はケントを襲いかかった

## 第46話

### 理性を持たない化け物（前書き）

区切りがいい様にしたので今回は短くなっています。

## 第46話

### 理性を持たない化け物

「調子にのんなよ化け物が!!」

自分に向かつて飛びかかってきた化け物相手にケントはシーザーを横薙ぎにして払う。

片腕を切られたせいも若干さつきより動きが鈍いため、その程度のスピードではケントの命を刈り取る事など不可能に近い

そしてそのまま、化け物は地面に着地し睨み合いになる

「シーザー……………この説明は後でちゃんと聞くから覚悟しろ」

> 思ってた以上に似合ってるわよ <

先ほどから化け物が殺気をビシバシ当てて来るがケントはそんなことを気にしておらず突然顔を真っ赤に染め上げる。

ケントはセットアップをしてバリアジャケットを着た。それだけならまだしも問題は…………

「何でデザインが変わってんだよ!! 誰の仕業だ!! 今すぐ戻せ! 速攻戻せ!!」

> 無理よ、デザインの変更は「あの子」以外行え無いし入り込もうとしてもロックが掛かってるわよ、ちなみにデザインしたのはエイミィよ <

「エイミィさああん!!」

今着ているのは白基準に所々紅の線が入ったバリアジャケットなのだが、デザイン元が……フェイトの男バージョン、スカートがズボンになっただけであってその他特に変更無し。ちやっかり六課のマントまで付いている

> 「これでおそろいね」 だつてく

「余計なお世話だ!!」

こんな雑談している中でも殺気は当たってくる訳であつてケントは一つため息をついてから化け物を再び向き直る、若干やる気無くしてはいるが……

> で、どうするのこの子の対処く

「厄介そうだな、何時の間にか腕、再生してるし」

ケントが相手の腕を斬り裂いた時に感じた重み、あの重みは生物が作れる様な重みでは無く、気づけば何時の間にか腕が再生している。だが一番重要なのは……

「魔力が……効かない？」

相手の腕を斬り裂いた時に、ケントは多少の魔力をシーザーに乗せて切り掛かったのだが刃が相手に当たった瞬間、魔力が分散、いや、魔力が「分解」された。

(もしそれが本当だったら、魔導師の天敵って訳か)

嫌な奴と会つちまつたな、ともう一度溜息をこぼす。その瞬間、

「グルガア！！」

「うっせえんだよ脳筋野郎！！」

真っ正面から飛びかかってきた相手を下から斬り上げる、だが

「！！！！」

「ガア！」

瞬時に化け物の後ろに展開された大量のスフィアがケントを向かって放射される、完全に零距离！！

「クソ野郎が！！」

瞬時にケントは閃光の目を使いその場からギリギリで離脱するしかし

「何なんだよその量！！」

もはや数の暴力、狙いなど定めていない魔力弾は360度全方位に向けての無慈悲な攻撃、それによって遺跡の柱などが崩れ始める

「ガアアアアアアアアアアア！！」

「拉致があかねえな、シーザー、刀身強化！！」

シーザーに魔力を送り込み激しく輝く、そしてケントは一瞬で移動し、

「魔力を分解されんだったら、「分解される前」に殺れはいいだけだろ？」

心臓目掛けて突き刺した

知らない天井、ここは何処だ？

「目え覚ましたか変態」

「ケント、さん？」

目を覚ますと隣のベッドにはケントさんが腰掛けていてねむそつにあくびをしている。

「ここは、痛っ！？」

「あー、動くな動くな、一樣応急処置はしたが打撲やらなんやらあったんだからよ。」

骨は折れてないから安心していーぞ、あとここはホテルだよ。全く、運んでくんのに苦労したんだからな」

そう俺に言っただけで何やらボリボリとスナック菓子の様な袋を開け、食べ始める

よくよく周りをみると確かに俺らが泊まっているホテルで窓の外は紅く染まっている、てか怪我人いるんだったら普通は病院じゃ無いのか？

まあそんな事はどうでもいい、それより

「あいつは、あいつはどうなったんですか!？」

あんな奴を野放しにして置いたら危険すぎる、今この瞬間にも誰かが襲われているかもしれない

「あの化け物か?あいつはもう「いない」よ」

「いない?」

「そうだ、あとこの事は口外すんなよ、勿論六課の隊長陣にも」

「なっ!？」

こいつは何を言っているんだ!?!あの化け物が一匹だけとは限らない、ここは本局に連絡して六課が対処に当たるのが一番だろう!?!

「何を言っただけですか!?!こんな事をしてる間にも「本局に連絡はしてある、あれの対処については別の人間で行う。なおあれに関しては一級機密事項になったから無駄な口外は一切禁ずる、てか忘れろ」あれには管理局が関わってんのか!?!」



脳味噌がトップだった組織だ、裏であんな実験一つや二つしていても不思議じゃ無い、もしかしたらだから機密に……

「あれに関しては多分局は無関係だろうよ、そうだとしたら尻尾ぐらいはクオンが掴んでる。てか事件になると真っ先に局を疑う局員ってどうよ？」

「それは……」

管理局の裏を知ってるからですなど言えない……クオンと言う人が誰なのかは知らないがここまで断言するとなると本当に局は関わってなさそうだ

「そう言う事で口外は禁止、もし世間にしたら軽いパニックになる様な姿だったし、俺なんて一週間夜中のトイレ行けないかもな、まあそうならないためにも誰かに話したのがばれたらまあ……分かってるよな？」

目の前で怖い笑みを浮かべながら冷蔵庫からコップをとって飲み出す自分の目の前にはファタが置かれカビのポテトチップスも投げ渡される

「じゃあこの話は終わり！！一様聞いとくがお前、今日あれ行くのか？怪我してるけど」

「あれってなんですか？」

俺の質問にケントさんは何処か遠い目をして明らか嫌そうな顔を浮かべる、今からやる事あったか？

「夏といえはあれだろ、あれ」

「？」

「はあ……夏といったら

肝試ししかねーだろうよ」

第47話

恐怖の肝試し（前書き）

ちなみに作者も肝試しは大嫌いです（-|-;-;

## 第47話

## 恐怖の肝試し

神社

なんで異世界に「日本」の宗教、神道を信仰している神社があるのかは知らないが、目の前にあるのは明らかに神社です。

お寺じゃないよ、あれは仏教でまた別物だから、それでもミッドには何故があるのだが……

「よし、全員集まったな〜!!」

死神のノートを持っている東大主席の殺人犯、八神が声を張り上げるん？下の名前？確かライト「はやてや」はやてさんでしたね  
ちなみにエリオ、キャラ、ヴィヴィオは不参加だ。今頃は深い眠りについてるだろう

ちなみに俺は片隅で俗にいうお山座りをしてみんなを眺めている

「ほれほれ〜、どうしたんや〜さつきから、まさか怖いんか〜」

「そ、そんな事はありませんよ!!ただちよ〜と薄気味悪いなーと思っただけであって」

「ふ〜ん、じゃああの人魂はなに？」

「へ?……ぎゃあああああ!!」

人魂人魂人魂ああああ!!

「フッ、これぐらいで驚くとは情けない」

「まさかここまでとは」

はやてさんとシグナムさんがどや顔で見つめて、てかレバンティン（略してレバ剣）の仕業かよ！！驚かせるなよ！！

「面白い夜になりそうや」

「なにその舌なめずり！もうやめよう！！死んだ人に失礼だ！」

今日のルートは至ってシンプル、二人人組で小さな森を抜け、神社のお墓を辿り一番奥にある「景品」を持って帰ってくる事  
ちなみに「景品」の中身は買ってきたはやてさん以外誰も知らない、お楽しみという事だ

「ではではくじ引きや！ジャンジャン引いてや〜」

行きたくない行きたくない行きたくない行きたくない行きたくない  
e t c

「ケントオ……………」

「行きたくない行きたくない……………ど、どうしたんですかヴィータさん？」

何時の間にかヴィータさんが涙目で服の袖を弱々しく引っ張ってくる

「逃げ……………よ……………」

「ガッテン承知iiiiiiii!!」

ヴィータさんを掴み上げ閃光を使ってここから逃げ出せ

なかった

「グバア!!」

「ケ、ケントオオオオオオ!!」

「シグナム!!」

「任せろ!!」

シヤマル先生がバインドで捕縛しシグナムさんがロープとガムテープで羽交い締め……て、酷くね!?

「フフフ、逃げられると思つとたん?」

「んーんーんんんー」

ガムテープが口に貼られていて話す事が出来ねえー!!

「ジャンジャンくじ引いてな」

「ケントオオ！！しつかりしろ！こつから二人で逃げるんだろおおお！！」

「んんんーんんんーん（すまない、ヴィータ）」

「ちくしょー！！」

くじ引きの結果

はやて                    シャマル

なのは                    ティアナ

フェイト                  ザフィーラ

ヴィータ                  シグナム

スバル                    リイン

オレ……………                    !? (・・: :?)

「んんんー、んんんんんー（まてまてまてまて、なんで俺は一人なの！?!）」

「じゃあないやん丁度一人余るんやし、それにクジ引かんかったケント君が悪いねんで」

だからって、だからって………  
こんな事ならクラウスを無理してでも連れてきたら良かった……  
あいつは今頃ベットの所で号泣してんだろうな……なんだって体が  
全く動かないらしいから……自業自得だこの野郎

「じゃっ、早速行ってくんな」

意気揚々と森に入って行くはやてさんとシャマル先生、てかはやて  
さんは仕掛け人じゃあないのか？

まあそんなこんなで時間が過ぎる、えっ？省きすぎだっけ？

まあ簡単に説明するとはやてさんとザフィーラ以外は結構怖がつて  
た、正直言っつてやめて欲しい、怖さ倍増するから……

あと景品は、うん、まあなんだ……

シャマル先生とシグナムさんには「これで悩みも解決！！バストア  
ツプCD」

これ以上大きくしてどうすんだ？

なのはさんには「白い魔王の逆鱗」という絵本  
ぞくにいう火に油

ザフィーラにはドックフード

完全に犬扱いだね、盾の守護獣



ヴィータには「全国ロリカレンダー」  
ただの嫌がらせ

スバルとティアナには「百合の素晴らしさ完全版」

二人はパートナーであってそれ以上の関係にはならない様に願う

リインには「リちゃん人形」

並べたらわからん

フェイトさんは何かの写真……顔を赤らめてたけどなんだったんだ？

まあ恐怖の時間というのはあつという間に回ってくる訳であつて……

「おしつ、次はケントだな！！行って来い！！」

さっきまでは半泣きだったヴィータさんが俺を攻め立てる、畜生、  
終わったからっていい気になりやがって

ちなみにはやてさんは向こうでプスプス煙を上げて気絶してる  
原因はなのはさんが……ねえ……

「ほらケント」

「はぁ、行つて来ます」

懐中電灯を渡されて森に一步踏み出す。

知ってるか？怖くないって言いながら肝試しなんかをするとかえつ  
て怖さを倍増させるらしいぜ

まあ俺は……

「怖くない怖くない怖くない怖くない怖くない怖くない怖くない怖くない……」

……」

「こうでもしないと立っていられないんだけど……」

「こ、こうなったらヤケクソじゃー！ー！」

そう叫んで走り出した

で、結局……

「迷った」

> 馬鹿じゃないの？<

否定できない……

只今現在進行形で迷子であります、はい。  
四方八方真っ暗でございますはい。

> 一本道だったんじゃないの？<

「い、いつ間違えた」

み、道を間違える筈はない……だって今までずっと一本道だったから曲がり角なんてなかった

普通ならもう戻っていてもおかしくないのにかれこれ二十分ぐらい森の中だ

「し、シーザー、い、今何処かわかるか？」

ルール違反だとは思うが迷ったんだったら仕方がない、せめてここが何処かなのかは……

>えつと……<

「ど、どうした？シーザー？」

>なんかね、十分前ぐらいからいきなり外部との通信が出来なくなつて……<

「う、ウソだろ……」

そして、

消える懐中電灯……

>……電池切れね<

「あ、あ、あ  
」

やばいやばいやばいやばい

「シ、シーザー？」

>仕方が無いわね<

「セットアップ」

先ずはここから抜ける事が先決……ひとまずセットアップして……

皆さんは知っているだろうか？セットアップの時って周りが明るくなるんだよ、だからその時だけ周りが見えちゃったんだ……なにが言いたいかというと……

563

足が無い人が一人二人三人……

「……………」

>……………  
<

「ムーブ」

>ショット<

「>ブレイカアアアアアアアアアア!!!!<」

「1111は?」

「やっと目が覚めた〜」

みんなが俺の顔を覗き込んでくる、あれ?

「全く、必死に探したんやからな、なんで神社のお堂の前で倒れとつてん?」

「みんな心配したんだからね」

はやてさんが少し起こった様に、フェイトさんが心配する様に声をかけてくる。

神社のお堂?

俺は……………

「ゆ、夢？だよなシーザー？」

>.....<

「あ、あの、シーザーさん？」

>.....残念だけど<

俺はその言葉を最後にもう一度気絶した

ちなみに道はきちんと曲がり角があり、ずっと真っ直ぐ進む道など無いと知ったのはまた別の話

第48話

動き出す運命(前書き)

第二章開始!!

## 第48話

## 動き出す運命

「ケントくん、この書類今日までな」

「……………」

「あつ、これ、印鑑お願いします」

「……………」

「はい、これちゃんと目、通しておいてね」

「……………だああああ！！なんだなんだよなんなんですかあ！？帰って来て早々これは無いんじゃないのぉ！？」

あ、こんにちは、すこし寝不足でくらくらしているケントです。六課前線メンバーの旅行が終了し今の俺達は通常勤務に戻っており得ないほどの仕事をしています。当然の事ながらデスクワークが苦手な俺は中々はかどらないし無理すぎた狸は頭から煙を出して医務室でぶっ倒れています。まあそれはそれとして

「なんでロングアーチ組はこんな仕事を残して行ったんだ！？イジメか！！イジメなんだな！！」

「ケント！口を動かすならさっさと手を動かせ！！一ヶ月前よりは大分ましだ」



そういうシグナムさんはバリアジャケット姿で片手にレバ剣を握りながら必死で腕を動かしている。暴れたいんですね……  
ちなみに補足しておく俺らが帰ってきた日にロングアーチ組は出かけて行った、大量の仕事を残して……、更には殆どの期限が今日までという鬼畜っぷり  
まあだがあるだな、俺は……

「くっ、さっさと出来る限りの事をしろ!! 昏にはここを出るのだろっ!!」

「うっ、ずるいよケント君、いくら本局からの呼び出しとはいえ抜けるなんて」

そう!! 俺は昏には本局からの呼び出しでこの地獄から抜け出す事が出来るのだ!!

逃げるが勝ちとはこの事よ!!

「この勝負、俺が貰ったあああ!!」

半分ぐらいクロノに回してるけどばれないよな?

「ぐぬぬ、じ、じはっ」

「はあ、これならあんたの分も私がした方が早いんじゃないかしら？これはこうでこはこうよ」

「うおー！マジだやべえよマジですげえよ！」

「はいはい、全く、スバルよりも馬鹿な奴なんて初めてだわ」

「ちよつ、ティア、それは酷いよ」

勤務場所に座り空中戦ディスプレイを操作しているのはオレンジと青と、そして銀

銀の男、クラウドはぎこちない動きで一文字一文字文字を打っていて、その様子を見てティアナは額を抑えスバルは苦笑いをする

普段のティアナなら「自分でやりなさいよ」と軽くあしらうのだが、クラウドはもともと管理外世界出身、ミッド語などを完璧に理解していないためにこうして一つ一つ彼女が教えながら作業しているのだ。

そんなこんな中でも自分の作業を止めずFWの中で一番早いというのは流石だろう。

「努力はしてるんだぜ、努力はよ……難しすぎだろミッド語……」

「しょうがないよ、直ぐに読める様になるものじゃないしね」

スバルが慰めるがクラウドは涙目だ、二十歳の男を慰める女性とはどうだろう……

「ティア、ちよつと休憩しよ」

「全く、少しだけよ」

ティアナからの許可が降りるとスバルは目を輝かせながら購買に飛んで行く

ティアナはその様子を疲れた様に見つめ、クラウドは口から魂の様な物を出しながら虚ろな目で仕事を続ける

何だかんだ言って、今日の六課は平和である

「そんなに睨まないでくれるか、落ち着けないだろう」

「貴方がどうなろうと私の知った事ではありませんが、今から行く所がどれ程危険な場所か分かってますか？場合によっては命を落としますよ」

管理局内のある一室、そこにクオンとクロノが同じテーブルを使って向き合っている

重々しいクオンの問いにクロノは目の前に置かれているコーヒーを一口飲むと正面からクオンを見つめる

「戦力は少しでも多い方がいいだろ、それに僕が見る事で「彼」が生きていた事への証拠ともなる、君だって実際に見た事は無いんだろ？」

クロノの問いにクオンは一瞬、少し不機嫌そうな顔になるがそれでも取り乱す事はない

「彼を仕留める事が出来れば「予言」を変える事ができる。向こうから出て来てくれるチャンスなどもう二度と無いさ」

「私はあくまでもケント様を守る為について行くのであって貴方を守る気はありませんが」

「それでいいよ、女の子に守られている様じゃまだまだという事だしね」

その答えにクオンは一つ溜息をついたかと思うと部屋の半分を覆う巨大なガラス張りの窓に目を落とす  
ガラスの先にあるのは巨大な「船」最終チェックだろうか？整備員らしき人達が所狭しと働いている

「船を操縦するのはやっぱり？」

「はい、私直属の管理局「暗部」の人間達です。今回の旅は局内でもかなりの機密事項に入りますから」

「暗部」、それは影から巨大組織を支える影の組織、表の世界には絶対出る事は無い様なグループである

管理局の暗部組織の仕事は局員の汚職捜査などから局が関わっている違法研究の洗い出し、そして研究所の完全破壊など様々だ

また、「機密事項」に多く関わる組織である為に危険は生じるため一人一人が最低でもAランク以上の魔導師でしか構成されない

そしてクオンは、そんな暗部組織を束ねる人間だったりもする。

「暗部か、ケントに聞くまでは都市伝説の様なものだと感じていたが、やはりまじかで見ると本物のエリート集団だな、戦闘も出て来て船の操縦も僕の船の構成員にも引けを取らない」

「そのエリート達も今回の戦闘には参加しませんよ、あくまでもケント様と私、そして飛び入り参加の貴方だけです。恐らくこれ以上人数を増やしても無駄でしょう、彼らの役目は船の操縦と情報の漏洩を防ぐためだけです」

「そうか」

クロノはそう呟くと部屋の時計に目を移す、時刻は丁度11時を回ったぐらいだ

「もうそろそろか」

「先に船に乗っておきましょう、一日はかかりますから」

そう言って二人は部屋を後にした

「なんだよなんだよ、車くらい出してくれてもいいじゃねーかよ、

バ アリンの半分の優しさもないのかよ」

>しょうがないと思うけど？あの地獄から一人だけ逃げ出すなんて周りから見れば殺す対象にしかならないだろうし<

只今バスで移動中です、シーザーの言葉で六課を出た時の事を思い出す。

シグナムさんは首元にレバ剣突き立てて来るしシャマル先生はリンカーコアぶち抜こうとするしなのはさんはSLBぶっ放そうとするし、怖いよ六課

『次は〜 ステーション前〜』

「やっと着いたか」

お金を払って降りる、少し歩くと一人の女性管理局員が近づいてくる

「貴方がケント・スカイ様ですか？」

「そつだ」

「こちらに」

女性が先導して俺が歩く、クオンの話によると直接転送魔法で送るらしい

「いきます」

「ん、頼む」

数分歩いた後、ビルの中の一室で転送魔法を発動させる、辺りが一瞬暗くなったと思ったら次にいた場所は船のメインルームだった

「お久しぶりです、マスター」

「久しぶりだな、クオン」

辺りを見渡しているとクオンが挨拶に来てくれた、感情を押さええているのだろうが尻尾が少し揺れている

「本当に、行くのですか？」

「ああ、どうせまた会うんだ、上手くはいかないと思うけど殺れるんだったら殺っておきたいしな」

「……………わかりました」

そう小さく呟くとクオンは再びクルーに指示を出す、ここにはいないがクロノも何処かにいるだろう

「二度と拝みたくない面なんだけどな、それは叶わないんだろ

ガノルフ」

ケントは何者かの男の名を呟く

それと同時に、船は動き出した



## 第49話 敵

「C班からF班までの人はここから南西方向へ、六課のメンバーはさつき話した様にポイントAからポイントGまでに散って!!」

六課の部隊長、八神はやてからの指示によって六課のメンバーは勿論、地上本部から派遣されたメンバーも動き出す。

辺りを見渡すとその他にも大量の局員が上司の指示に従いながらけたたましく動く

「八神イ、ポイントKからポイントNまでは探し終えた、もう殆ど残っちゃいなえ」

「了解しましたナカジマ三佐!!まだそう遠くへは言ってない筈や!!絶対に探し出す」

彼女達、現在いる六課メンバーを総動員してやって来ているのはミッド中心部地上本部付近、ケントが昼前に六課を出た後に本局、地上本部、そして六課に耳を疑いたくなる様な事件の知らせがきた

ジェイル・スカリエツティ及び同じ拘留場内にいた戦闘機人と脱走

魔力を完全に使えなくした状態であの宇宙空間にあった拘留場から

逃げ出すのはまず不可能

なら考えられるのは外部からの干渉が無ければならない。

はやてはまずホテル・アグスタでケントと戦闘した女性とヴィヴィ才を保護した時に対峙した男女の二人組を思い浮かべたが……可笑しいのはその拘留所に一切の被害が無かった事だ。

はやてが思い浮かべた彼等なら今頃拘留所自体が消し飛んでいるかもしれない

それが無いのだとしたら、手を貸したのは管理局の内部の人間……

「絶対に逃がされへん」

スカリエツティが姿を消してから大分経つがいつこうに姿を見せない、地上本部の力でクラナガン全域に局員を配置しているが影も形も無いのだ、クアットロが持つIS「シルバーカーテン」を使ってもここまで逃げる事は出来ない。

「八神三佐!!」

「くっ、あまり考えても仕方があらへん」

はやては自分の苛立ちを飛ばし、再び指示に戻った

「本当によかったのかい？今頃地上では大混乱だと思うが」

「俺だつて不本意だよ、だが前も言った通り、あいつに張り合えるのはお前しかいねえ……戦力増加の為に絶対仲間にならないといけない人材だ」

本局を出港して約六時間ぐらいだろうか？次元航空船の一室でケントとある男が向かい合っている

その男は約一カ月前にミッドを中心とした大規模テロを起こし、更には今頃地上で起こっている大事件の張本人でもある

「ククク、だがよく私を信用したね。君達を利用するだけ利用してそのまま逃げ出す事もあるだろうに」

「お前の二つ名は「無限の欲望」だったっけか？その欲望通りに進めば俺について来るのが一番愉快だとは思っただけど？」

「ああ、正にそうだね。世の中にはまだこんなにも楽しそうな事が残っているんだ。無限の欲望であるこの私がさんかないなど考えられないね」

そう言つて目の前の男……ジェイル・スカリエッティは小さな笑をこぼす

その隣ではスカリエッティの秘書として第二の頭脳、ウーノが直立不動で立っている

「全く、一週間前にクオン君から話しを聞いた時は私でも驚いたね。まさか彼が生きているなんて、そして……」

「まったく、お前に今からして貰うのは奴と俺たちとの戦闘データの採取とその解析、ミッドに帰ったら暗部の工房で「あれ」をしてもらおう」

「お安い御用だよ、こんな面白い祭りに参加出来るのなら喜んで協力しよう」

またもクククと笑うスカリエッティ、その様子を見て「うわ、また笑ってるよ気持ち悪」という気持ちを抱いてるのだが「元々頭、可笑しいもんな」と一人で納得している為口には出さない

「分かっていたが、地上はやはり大混乱らしいぞ、ほんと、君も思い切った事をする」

「ようクロノ、そろそろか？」

特にノックをする事も無く入ってきたクロノに対し、ケントは軽くクロノに問う

クロノは一度小さく溜息をついた後、ケントに背を向ける

「もうすぐだ、そろそろ準備しておけ」

「ん、了解」

ケントとスカリエッティは自分自身の椅子から立ち上がりクロノの後について行く、到着したのは船の制御室でそこには腕をくんで壁にもたれているクオン、そして巨大な目の前のモニターには一つの星がデカデカと写っている

「第32観測世界シャルト……」

「星の約9割が海で酸素は存在してるものの生物は全くいません」  
そうノリよく返して来るのはクアットロ、今はこうしてケントやク  
オンの指示に従っているが内心ではかなり嫌がっているだろう。彼  
女がいるのはスカリエッティが自分達に協力するのでしょうかがな  
くだろう。

「ここでいい、お前達は万が一に備えアランカンシエルの用意と衝  
撃中和フィールドを展開しておけ、転移座標は f 8 5 9 m q j 8 5  
……………だ、マスター、行きましよう」

「僕を忘れないでくれるかな？」

ケント、クオン、クロノが船に設置されてある転移装置に入り込む、  
暗部の一人とウーノが「ご武運を」と言った所で……………三人は空中  
に投げ出された。

下を見てみると透き通るような色をした海であり、遙か彼方には水  
平線のみしか見えない

本来三人しかいない筈の世界、だがケントの瞳は数百メートル先にいる人影を確実に捉える

煙草を口にくわえる金髪的青年、年は……見た目で言うところと十代後半に見える

隣にいる二人もその人影を捉えたのか臨戦体制に入る、向こう側も少しずつこちらと距離を詰め、今ではお互いの顔がしっかりと見据える事が出来る

ジーンズに白衣、そんな格好をした青年の顔は整っておりそこらのアイドルよりも数段とカッコいい

数秒の睨み合いの中で、先に口を開いたのはケントだった

「ほんととは二度と会いたく無かったんだけどな、世界の事を考えたらそうもいかないらしい」

「俺は自慢の息子が管理局の大将なんかになってくれて嬉しいよ」

「「若返り」か、テープレコーダーの通り、お前に会いにきてやった」

「実の親に向かってタメ口 and 上から目線はどうかと思うんだが」

「俺はお前を父親などと思った事は一度も無い、俺がお前に伝えにきた事は一つだ……今すぐてめえがしようとしてる事、全部やめて死にやがれ」

冷たい一言、それにしても青年は「うん」と頭をボリボリ欠く

「俺の「計画」の事、お前に話した事あったか？そんなのぜんぜん記憶に無いんが」

「「予言」、たとえばわかるか」

「ああ、聖王教会の」

フツ、と青年は笑いケントは青年を睨みつける、その殺気は周りの空気を硬直される

「で、その予言にはなんて？」

「ああ、予言にはこう書いてあったよ

次元世界の崩壊……………つてな」

それを聞いて青年はニヤリと不気味な笑みをこぼす

「あながち間違っでは無いかもな」

「元から期待して無いがもう一度だけ言う。その馬鹿げた「計画」と言うのを速攻中止しろ」

「しないって言ったら？」

「お前を殺す」

ケントはシーザーを青年に向ける、クオンは魔方陣を展開し、クロノはデュランダルを、そんな万事休すな状態であるのに青年は眉一つ動かさない

「ケントく、お前が一番知ってる筈だぜ？俺に齒向かう事がどんなに無謀なのか」

「それでもお前は俺が止める、それが俺が持つ使命だ」

シーザーに魔力が流れ刀身が眩いほど光り出す。「刀身強化」……  
…ケントは本気だ

「後ろにいるのは管理局暗部のクオンと提督のクロノ、なかなかいい人材だよ。でもな、俺には到底届かないよ」

ケントは少し目をつぶる、まぶたの裏に映るのは自分が過去に犯した「罪」

「四代目、管理局戦闘技術総大将としてお前を打つ、いくぞ



三代目管理局戦闘技術総大将

ガノルフ・テスタロッサアアアア！！」

管理局の機密ファイルより

約二十年前、歴史上最強と言われた三代目本局大将であり、魔法研究の第一人者である、ガノルフ・テスタロッサが謎の失踪を遂げた本局が捜索隊を編成し、ある管理外世界で彼の遺体と思われる物を発見

犯人を本局が全力を上げて捜査するも糸口は掴めず。そのまま事件は迷宮入りしている。

妻であるプレシア・テスタロッサと彼女の腹の中にいる子供を残し享年35歳でこの世を去った

また、彼が持つ能力は謎が多く、強力な為、多くの研究者が解明しようとしたがその実態は明らかとなっていない。

第50話 宣戦布告（前書き）

どうしてこうなった……

かなりの駄文です、自分でも何描いてるかわかんなくなってきました（ー；；）

題名で大体わかると思います

第50話 宣戦布告

命

命は重い

それは誰でも知っている

一度死ねばどこその赤い親父みたいに再生できるわけでない  
コインを百個とる？そんな事してもただ金持ちになるだけだ

命は重い

全く同じ命など無い

それぞれに自我があって

心臓があって

体の作りが同じなだけで

他に同じな物なんて一つもない、いや、全く同じ命なんて生まれる  
事は無い

プロジェクトF

全く同じ命を作ろうとした計画

クローン

元が同じなだけで、同一化される。

それぞれに価値があつて

それぞれに生きる権利がある

だけど命は壊れやすい

一振りの刃

一発の銃弾

それだけで命を奪える

この世で変わりなどいない

たった一つの命

そして俺

ケント・スカイという化け物は

たった一振りの刀だけで

そんなかけがない命を

十萬も奪った大罪人だ

ズガガガガガガガ!!!!

巨大な水しぶきが舞う

地上の海は一瞬真つ二つに割れ、  
しぶきはシャワーの様にそれぞれ  
の頭上に降りかかる

「うおおおおおー!!!!」

「いいねいいね、前よりも断然強くなってるな、少しは楽しめそう  
だ」

剣撃の猛襲、言い表すと「嵐」だろうか？

視野出来ないほどのスピードでケントはシーザーを振るう、そして  
それをガノルフは面白おかしく手に持つ白と黒の双刀で弾き返す  
だかケントの猛襲に押されてか、少し、ガノルフは後ろに後退した

そしてケントの親友は、ガノルフが後退した隙を見逃さない

「ブレイズ」

「へえ」

「キャノン!!」

青く光り輝く砲撃がケントの正面を薙ぎ払う

直撃だ

通常の魔導師ならこの一発で決める事が出来る。そう、

「通常」ならば、

「四重魔法柱「迦楼羅」!!」

追撃、狐の尻尾をはやした使い魔、クオンが叫ぶと同時に、正面は  
灼熱の地獄と化す  
例えるならば炎の塔

これもまた直撃

その様子を見つめながらケント、クオン、クロノは一箇所に固まる、これだけの魔法を直撃させても三人とも戦闘体制を維持している

「確かに手応えはあったんだけどな、成る程、どんなトリックを使ったのかは知らないが全く持つてくらってないね、彼」

「同意見です、恐らくはもう」

「さっすが、俺を殺しに來ただけあってそれなりの実力はあるんだな」

そんな声が聞こえた瞬間、炎の地獄は一瞬にして掻き消された  
炎の地獄から解き放たれた少年の体には傷一つ、灰一つ、埃一つも、  
付いていない

「でもまだまだ甘いぜ、これぐらいでやられる様なら本物の「最強」  
なんて名乗れない」

「もとよりこれぐらいで倒せるなんて思っただけよ」

バサツと音をたててケントの背中に現れる黒き翼  
ケントの魔力光がどんどん暗くなっていく

そして、

「ワオ、バインド」

「ブレイズキャノンを撃つた時に補助効果として」

クロノがたんと説明する

その間にシーザーに溜まっていく魔力

クオンの手元で構成される何枚もの魔方陣

少し遅れてクロノの後ろに展開される幾つもの青いナイフ

「おいおいおい、身動きが、出来ない相手にそれは無いんじゃないの？」

「黙って消えてる」

その瞬間、三色の光が空を埋め尽くした

倒したなんて思っていない

死んだなんて思っていない



何故なら

「おーおー、まぶしーまぶしー」

目の前のカス野郎は平然とそこに立っているから  
今の攻撃、直撃なんてしたら肉片一つ残らない様な攻撃だ。  
これには隣にいる二人とも驚いている。こんな人間技じゃないしな

「全く、初っ端から全開かよ、なになに？速攻で終わらせるってか  
？」

気持ち悪い

こいつの声が、動作が、考えが

全部気持ち悪い

「まったく、でも強いな、ケントや暗部のクオンはわかるとして提督  
なんていうクロノ・ハラオウンもたいしたもんだ。

腐っても「原作キャラ」なんだよな」

「馬鹿にしないでもらおうか、君が言っている「原作」とは何かは  
知らないが、僕のランクはオーバースだ」

「おっ！？マジかよ、十年前はそんなに強かったっけ？引きこもりの  
KYだと思ってたんだがな、まっ、どっちでも関係ないか」

強がっているクロノだがこいつは元々魔力がそこまで多くない、大技を使ったせいで肩で息をしている状態だ

「んじゃ、こつちからも攻めさせていただきますか」

「っ！！クオン！！」

クオンが動くのと同時だった

目の前に展開される巨大な魔方陣、その奥に見えるのは右手を突き出したガノルフ

そして突き出された場所には、「大気にヒビが入っている」

「くっ、後ろに飛べ！！」

「海震」

その衝撃はSSランク相当あるバリアを軽く突き抜け迫る、いくらバリアといえど「震動までは防げない」

「がはっ！！」

三人が別々の方向に飛ばされる、幸い、直前に後方へ飛んだおかげで軽傷ですむ

そして次に見たのは、「三体の炎の怪物」

「くそ、厄介なのを」

「燃やし尽くせ、「魔女狩りの王」インケンティウス！！」

怪物が雄叫びをあげ、それぞれに襲いかかる、だが

「舐めるんじゃねーぞー!!」

クロノとクオンはバインドで怪物を捕縛

ケントは……………

「消える」

空に輝く漆黒の魔力光、その光は怪物の再生スピードを遥かに上回りながらチリ一つ残さず消していく  
そして

「終わりだ!!」

閃光、音速の三倍のスピードでガノルフの後ろに回りシーザーを降り下ろす

「直線的すぎだ、「熾天覆う七つの円環」ローアイアス」

刹那、ガノルフの後ろに七つの花卉が咲きシーザーの刃は防がれる、破壊したのは二枚

「んでもってカウンターの「エアロブラスト」」

「くっ、シーザー」

>プロテクション!!<

風の刃と漆黒のシールドがぶつかり合う、だがケントも真っ正面か

ら攻撃を止めようなど思っていない、軌道を少し変えてケントはその場を離脱する

「ケント、あまり無茶をするな、ここにいるのはお前一人じゃない」

「くっ、すまねえクロノ」

最初と同じ様に体制を立て直す

周りを見渡して見れば何時の間にか炎の怪物は消えている

捕縛されたからか、それとも元から期待してなかったのか、恐らくは後者だろう

「諦めて帰りなはれ、言いたい事があって呼んだだけなのにムキになりやがって」

「てめえが今から俺らに話す内容を実現させない為にも今ここでぶっ殺そうとしてんだろ、潔く殺されやがれこのチート野郎」

「俺がチートだという事は認めるが死にたがる様な自殺願望者じゃねーよ」

ケントは肩で息をしながら

クロノはケントに肩を貸しながら

クオンは射抜く様な瞳でガノルフを睨みつける

「おーおー、大分お疲れの様子だな、なら少し話させて貰うぜ」

「させるとでも!?!」

ケントから「ガノルフが話す内容」を事前に聞いているクロノは小型のスフィアをいくつも飛ばしてガノルフを止めようとする  
しかしガノルフに届く直前にスフィアは全て「弾き返される」

「くっ」

「無駄だよクロノ提督殿、この運命は変えられない」

そしてガノルフは、殆ど今までと変わらない口調で、とんでもない事を告げる

「いまここに、俺、ガノルフ・テストロッサは管理局本局、地上本部に

「宣戦布告」する」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6481u/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS 天駆ける翼

2011年12月25日00時57分発行